令和2年第16回教育委員会定例会

（8月18日開会）

台東区教育委員会

○日　　時　　令和２年８月１８日（火）午前１０時０５分から午後６時１５分

○場　　所　　台東区役所１０階　１００１・１００２会議室

○出　席　者

教　育　長	矢下　薫
教育長職務代理者	垣内恵美子
委　員	末廣　照純
委　員	神田しげみ
委　員	髙森　大乗

○出　席　者

事務局次長	酒井　まり
庶務課長	佐々木洋人
学務課長	福田　兼一
児童保育課長	横倉　亨
放課後対策担当課長	西山あゆみ
指導課長	瀧田　健二
教育改革担当課長 兼教育支援館長	倉島　敬和
生涯学習課長	久木田太郎
スポーツ振興課長	櫻井　洋二
中央図書館長	田畑　俊典

○日　　程

日程第１　議案審議

第２７号議案　令和３～６年度使用　台東区立中学校教科用図書採択について

第２８号議案　令和３年度使用　台東区立特別支援学級教科用図書採択について

午前10時05分　開会

○矢下教育長　ただいまから、令和2年第16回台東区教育委員会定例会を開会いたします。

本日の会議録署名委員は、垣内委員にお願いをいたします。

ここで傍聴について申し上げます。

本日、会議の傍聴を希望する方については許可することとしておりますので、ご了承ください。

また、今定例会においては、東京都台東区教育委員会傍聴規則第4条ただし書きの規定に基づき、傍聴人が20名を超える場合であってもこれを許可いたしたいと思います。

また、本日の会議について、写真撮影を行いたい旨の申請がありました。

つきましては、東京都台東区教育委員会傍聴規則第7条の規定により、許可いたしたいと思います。

〈日程第１　議案審議〉

第２７号議案・第２８号議案

○矢下教育長　それでは、日程第1、議案審議に入ります。

第27号議案及び第28号議案を一括して議題といたします。いずれも8月4日に開催した定例会からの継続審議の案件となります。

本日は8月4日の定例会において協議した審議方法に基づいて、教科用図書の採択を行ってまいります。

確認の意味で、私から審議方法について再度説明をいたします。

はじめに中学校教科用図書について審議し、次に特別支援学級教科用図書について審議いたします。審議する教科の順番につきましては、学習指導要領の教科の順番で、1教科ごとに審議・仮決定をしていきたいと思います。

中学校教科用図書については、推薦する教科用図書の発行者について、各委員から理由を付して挙げていただきます。挙げていただく発行者については、1者しかない場合は1者、複数ある場合は3者までとし、優先順位をつけて挙げていただきます。

その際にご留意いただきたいのですが、今回の採択に当たりまして、私たちは当初から一貫して慎重に討議を行うために、全ての教科用図書の発行者名をアルファベットに置き換えた状態で内容を確認し検討をしてまいりました。したがいまして、意見交換の際も、推薦する発行者を挙げていただく際も、A者、B者というように、アルファベットでご発言くださいますようお願いいたします。

次に、推薦を挙げていただく際の発言の順番ですが、教科ごとに議席順でご発言いただき、はじめの教科が議席順1番の委員から始めた場合は、次の教科は議席順2番の委員から始めるというように、教科ごとに最初の発言者を代えていく方法で進めたいと思います。

また、特別支援学級教科用図書については、年度ごとの子供たちの障害の状況等を考慮して審議及び仮決定していきたいと思います。

この進め方でよろしいでしょうか。

（異議なし）

○矢下教育長　それでは、審議する教科の順番、発行者の推薦方法及び発言の順番については、そのように進めさせていただきたいと思います。

次に、仮決定についてですが、委員全員からご意見をいただいた後、委員会として採択する一者を仮決定してまいります。

中学校教科用図書についてですが、3人以上の方が第一位に推薦した発行者については、過半数を超えておりますので、それをもって仮決定といたします。

ただし、過半数に満たない場合は、各委員から改めてご意見をいただくなど協議をした上で仮決定してまいります。

なお、仮決定するまでは、発行者名をアルファベットに置き換えた状態で審議いたしますが、仮決定した発行者名については公表をいたします。

また、昨年の小学校教科用図書の採択のときと同様に、全ての教科について仮決定した後に、審議を行った全てのアルファベットの発行者名も公表をいたします。

次に、最終的な採択までの流れについて説明をいたします。

中学校教科用図書の仮決定が全て終了した後に、特別支援学級教科用図書についても審議し、仮決定いたします。その後、委員会を休憩とし、休憩中に事務局が仮決定をした内容で、第27号議案及び第28号議案を用意いたします。準備ができ次第、委員会を再開し、作成した議案により採択の議決を行いたいと考えております。これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、本日は、このような審議方法で進めてまいります。

それでは、早速審議に入りたいと思います。まず、第27号議案をご審議願います。

国語

○矢下教育長　まず国語についてご審議願います。発行者は4者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

まず、議席番号1番の髙森委員から順にお願いをいたします。

○髙森委員　科目名「国語科」・種目「国語」については、教科書の導入部分において国語を学ぶ意義や目的が学習の見通しや学習法とともに整合性をもって説明されているか、国語科の学習を通して育てたい力、知識、技能が具体性をもって示されているか、拡張教材、補助教材的な位置づけとなる資料編は充実しているか、新出漢字や口語文法の解説には重きが置かれているか、古典文献としての漢文・古文の扱いは適切か、国語の教科書に特色的とも言えるフットノートの活用に工夫が見られるか、デジタル教材は有効に活用されているかといった視点で比較検討し、私は1位にC者、2位にA者を選びた

いと思います。

推薦の理由ですが、まず教科書の導入部分においてC者は各学年で学習の見通しを立てて、各教材の位置づけを明確に示しております。また、9ページの折り込みに「思考の地図」を用意し、思考を広げ整理し、深めるための思考法の具体例が提示されます。また、1年生では、18ページ見開きにノートの取り方、辞書の引き方などのガイダンスもあり、中学1年の早い段階から国語学習のスタイルを習得できる工夫がなされています。

一方のA者は、まず目次の見やすさが特色的です。国語科の学習を通して育てたい力、知識、技能についても、領域別教材一覧を組んで分かりやすく分類しています。また、教科書の使い方が3ページを費やして設けられている点もC者より充実しています。加えて、巻末の資料編に情報の探し方やメモの取り方、辞書の活用法が全学年に用意されているのは好感が持てます。なお、A者の巻末資料編にはC者の「思考の地図」と同様の思考法の具体例が「思考方法の一覧」としてまとめられています。

国語科の学習を通して育てたい力、知識・技能に関しては、C者は本編の要所要所並びに巻末の学習を広げるの中で、アンケートやインタビューの方法、原稿用紙の使い方、手紙や通信文の書き方、読書感想文の書き方といった基礎・基本をはじめ、情報整理の方法、図表の活用、発想の広げ方、豊かな表現方法などなど様々なスキル学習を用意し充実しています。

一方、A者の本編の所々並びに巻末の資料編において、全学年ほぼ共通の内容で同様のスキル学習がまとめられております。併せてA者には、学習用語辞典が用意され、教科書に登場した国語、国文学に関する専門用語が辞書形式にまとめられています。文法事項の解説では、C者は各学年巻末の「文法・漢字・振り返り」にて、口語文法の詳細な解説が、また3学年巻末の資料編288ページ見開きでは、文語文法のうち用言の活用表が用意されています。口語文法では、敬語の使い分けも1年の299ページ、2年の117ページなどで学習機会を設けています。さらにC者は漢文法も他者に比べて充実しており、1年の174ページ、2年の31ページに漢文の訓読法と訓点のルールが紹介されています。

一方、A者は、本編に分散して文法事項の学習がちりばめられ、また教科書の終盤に「文法のまとめ」を掲載して、各学年の文法事項の集約を行っています。漢文法の学習は1年の136ページ・137ページに訓読法と訓点法、2年で136ページに漢詩の形式、3年の135・136ページに訓読法をそれぞれ学習します。

フットノートの活用については、C者は新出漢字、語句の解説、補足説明、図版、図書の紹介などなど実に充実しております。一方、A者のフットノートは、新出漢字や語句説明程度にとどめ、図書紹介はフットノートではなくて巻末の「読書の広場」を充実させている点が特徴的です。こちらの「読書の広場」では、数点の作品が選ばれ、本文の抜粋が掲載されています。

デジタル教材について、C者は目次に全デジタル教材のインデックスへアクセスできる２次元コード、本編にはそれぞれの教材に直接アクセスできるコードが印刷されていま

す。コンテンツも動画、音声を中心にそろえ、授業を補完する機能を十分に有していると思われます。一方、A者は、本編中の二次元コードからしかアクセスできず、しかもどのコードから入ってもインデックス画面にジャンプし、そこから目的のコンテンツに移動するという不便さがあります。また、内容も教科書の紙面をそのまま拡張しただけのテキスト中心の文字情報が多く、板書にすればデジタル教材を使う必要はないのかもしれません。

最後に、具体的な教材ごとに両者を比較したいと思います。対象としたテキストはC者2年196ページの「走れメロス」とA者2年200ページの同じく「走れメロス」です。C者では、212ページの「学習」のフェーズで提示される課題がいずれも抽象的であるため、様々な意見が交わされることが想定されます。一方、A者は216ページの「学びの道しるべ」が用意されていますが、こちらはC者とは対照的で実に具体的な課題が提示され、これが限定的な答えを導くことになるので、誘導的な活動になりがちな予感がします。テスト問題などでよく用いられる常套手段ですので、受験対策のドリルのようなイメージで、それはそれで意味があるかもしれませんが、活発な意見交換は期待できないかと思います。このように考えると、C者のほうが主体的・対話的で深い学びにつながる授業を組み立てやすい工夫になっていると感じます。

以上の比較検討を踏まえ、私は1位にC者、2位にA者を選びました。

以上です。

○矢下教育長　続いて、神田委員お願いをいたします。

○神田委員　来年度から中学校でも新学習指導要領が全面実施されます。新しい学習指導要領の理念を受け、どの教科書も様々な工夫が見られます。

国語科は言語教育という特色を持つ教科です。また、他教科への影響も大きな教科であるとも言えます。そのような視点から考えますと、まず教科書を選ぶときに一つは、学力の向上につながる指導ができる内容であること。それから二つ目として、学習指導要領で目指す国語科の指導にふさわしい内容であるか。三つ目として、学習過程の流れが明確であるか、またその流れが分かりやすく自学自習を行える内容であるか。四つ目が、言葉の学びがあること、語彙指導の充実が図れる内容か。五つ目が、読み物教材の内容が時代にふさわしいものか、また読書指導に充実が図れる内容か。六つ目として、小学校との連携が図られているかなどの視点から拝見させていただきました。

結論から言いますと、私は1位をC者に推したいと思います。全国学力テストなどで情報を整理して内容を捉えたり、テキストの質と信憑性を評価したりすることに課題が見られましたが、情報を扱った教材が多く、読み解いたり活用したりすることで学力の向上につながる工夫が感じられました。特設教材「情報を生きる」や根拠を示して書く教材など随所に工夫が見られます。新学習指導要領では、情報の扱いの項目が設けられました。冒頭の「思考の地図」や「思考のレッスン」、「情報のレッスン」などは、これから指導すべき内容が盛り込まれています。

新学習指導要領のキーワードともなっている主体的・対話的で深い学びですが、学習の窓で何を学ぶかを知り、学習の手引きを使ってどのように学ぶかを知ることができます。教員の指導や生徒の自学に活用できると思います。特に手引きでは、個・集団・個という流れで学習の深まりを狙うこともできます。

また、国語科指導で重視されている語彙指導ですけれども、こちらが大変充実しています。1年で「言葉を集めよう」、2年では「言葉を比べよう」、3年では「言葉を学ぼう」といった3年間を通して語彙を増やし、使えるような学びが示されています。

読み物教材を見ましても、新旧の作品がバランスよく配置されています。読書教材は本の一部を紹介したり、読み比べ、本の探し方などが掲載されておりまして、紹介も大変多かったです。

小中の連携に関しても、工夫が見られました。1年の言葉に出会うためにでは、小学校で学んだことを振り返りながら円滑な接続が期待できます。6年生の漢字の筆順も記載されているなど、細やかな配慮が感じられました。

2位にはB者を押したいと思います。B者も工夫が随所に見られますが、特に1年生のスタートでは詩から入り、文学入門へと流れが発達段階や小中の滑らかな接続を意識していて好感が持てました。また、「学びナビ」が冒頭にあるので、何を学ぶかを明確にして学習できることが挙げられます。B者はSDGsに力を入れていて全学年で取り上げています。カラーユニバーサルにも配慮し、色のシミュレーションがCUDマークの取得など、その取り組みが評価されると思います。以上です。

○矢下教育長　続いて、末廣委員お願いをいたします。

○末廣委員　私は国語科に関しましては、３者挙げたいと思います。それぞれ3者とも構成の仕方が工夫がされています。まず第3位はB者です。

B者は、この教科書を使う生徒たちのために、まず「言葉の地図」というものがあります。そして学びを進めるキーワードとして、七つの範囲の言葉が出てきます。一つは表現・対話・思想。これが一つのグループです。それから自然・環境・科学。人権・多様性・平和。伝統・文化・歴史。身体・生命・家族。近代化・国際社会・共生。自己・他者・物語。この七つのキーワードは、いずれの学年にも使われており、いわゆる持続可能な開発目標SDGｓと深く関係しているという説明があります。

教科書の構成については、学びナビというのがあって、何を学ぶかということが示されています。その後、目標、振り返りがあり、その順番を追って学習が進むということです。

ただ、このB者は話すこと、聞くこと、書くこと、それがどの教材に当たるかとはっきり割り当てていないので少し判りにくいところがあります。一応、関連するページ数が出ており、それをみていけば判るということになっているようです。

また、各章にテーマがありますが、例えば1学年。そのテーマに基づいて、その末尾に広がる本の世界のコーナーがあり、10冊ほど、1年の場合には９章ありますので、１学年

90冊の本が紹介されています。また四季の便りとして、春夏秋冬四季の和歌、俳句、詩が全学年にあります。コラムとしては、言葉と社会、文法のコラム、言葉の小窓、漢字の広場等があります。

また巻末には、言葉と文法解説編、それから言葉の自習室には作品が四つ出ております。伝統芸能へのいざない、これは１、２、３全学年にあります。そのほかには1年生では小倉百人一首、2年生では近代文学史年表、3年生では古典文学の名作等、有意義で面白いものがあります。Bが良かったと思うのは以上の点です。

次に２番目に良いと思ったのはC者です。やはり国語科の目的の一つである、思考、考えですね、思考を広げる。そして、それを整理し、深めていく。この三つの観点が強調されています。また巻末には「情報整理のレッスン」、「思考度レッスン」、「読書コラム」というコーナーがあります。また季節の詩を春夏秋冬ごとに俳句、詩、古文などが1ページに収まっています。

本の世界を広げようということで、それぞれの教材の末に広がる読書として、本の案内があります。巻末には例えば1年では郷土ゆかりの作家・作品が載っていまして各都道府県の作家が一人選ばれて、その作品の紹介があります。これはユニークではないかと思います。

また学習の窓の一覧というのが巻末にありまして、これは古典の世界を広げるものです。巻末の読み物ですが、このC者は夏目漱石と森鷗外を扱っています。本来の教材にはいずれも出てこないのですが、巻末の読み物の中にこの二人、夏目漱石の「坊ちゃん」、森鷗外の「高瀬舟」が出てきます。このC者は教材としては出てないものを巻末で補っているという感じがいたします。

それから、C者で面白いと思ったのは、2年生で「星の王子さま」が出てきます。そしてサンテグジュペリの「星の王子さま」をいろいろな方が翻訳していますが、その翻訳作品を読み比べてみようと、こういうのはユニークで面白いと思いました。それから、評論の「君は最後の晩餐を知っているか」と、解説の「最期の晩餐の新しさ」とこの二つが並んで出てくるということで、立体的な解釈、鑑賞ができるんじゃないかというふうに思います。このようなことで2番目に国語のC者を推しました。

最後に1位はA者です。A者は、それぞれの教材を、全学年共通の九つのテーマでくくっております。例えば最初に、豊かに想像する、そういうくくりで教材が入ってくる。それから、分かりやすく伝える、ものの見方、感性を養う、論理的に考える、古典に学ぶ、情報を関係づける、読みを深め合う、視野を広げる、振り返って見詰めると、これは全ての教材がこの九つのうちどこかに入ってくるということですね。

それから、領域別の教材の一覧ということで、どういう力を付けたいのかということで、知識・技能。あとは思考力、判断力、表現力ですね。それは目的や意図に応じて日常生活の中から話題を決める。それから、話す、聞く、書く等の六つの領域によって求める付けたい力、これが思考力、判断力、表現力の中に入ってきます。

この教科書の使い方はステップ①から⑤まであり、まず①目標の確認、②内容を整理する、③読みを深める、④自分の考えを深める、⑤学びを広げるということで、特に自分の考えを深めるという、これが新しい指導要領の国語科の目標の大きな一つになっていると思います。

各教材での学習ですが、まず読むことですね。そして、目標をたて、ステップ①～⑤を踏んでいく。それから読み方を学ぶ、どのように読むかですね。それから、思考の方法に進んでいく。その後、いろいろと言葉の発見や漢字を身に付けるとか、文法の窓など言葉・文法・漢字などの学びを深めるコラムがあります。そして、全学年を通じて、各教材に私の本棚コーナーというのがありまして、その教材に関係する本を紹介しており、大変便利な配慮がなされています。

最期に「小さな図書館」では、まとめて各学年で50くらいの作品が紹介されています。資料編としましては、思考の方法、読み方を学ぼうの一覧があります。結論的にはA者が新指導要領の精神を一番よく表した編集がされているじゃないかというふうに感じましたので、国語の1位をA者に推します。

○矢下教育長　続いて、垣内委員お願いをいたします。

○垣内委員　今回の教科書採択に当たりまして、全教科を通じて基礎・基本の知識・技能を確実に習得させ、活用すること、それから主体的に学習に取り組む態度を養うこと、多様な人々との協働を促す、そういうものであること、この三つに応じて、新指導要領の目標とともに教師側の教えやすくかつ教師の方の経験や力量で余り差が出にくいような教材、そして学ぶ生徒さん側が学習しやすく、そしてまた構造化されているというんでしょうか、全体像がより分かりやすい、そういう教材を選ぶという観点から、今回は検討させていただきました。

特に国語の場合は社会生活に必要な人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養うということと共に、言葉がもつ価値を認識し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うということが求められております。いずれの教科書も非常に教材も豊かですし、重なっている部分もあります。ただ、その教材の使われ方といいますか、どういうふうに教育に生かしていくかというところに若干の差異があるように思われました。

結論から言いますと、第1位が私はA者です。第2位がC者になります。

A者に関しましては、もうほかの先生方もおっしゃいましたように、この全体像を通して非常に構造化が図られていて、特に豊かに想像するとか、分かりやすく伝えるといったようなことから、情報を関連付けるあるいは読みを深め合う、視野を広げるといったような各分野に沿った形で教材が配置されているということは非常に望ましいものだろうと思いました。また、学びの道しるべというところで、イントロダクションだけではなくて学んだ後に、それをどういうふうに分析しながら自分に身に付けていくのかというプロセスもきちんと提示しているということが、ほかの者より活きているのではないかというふうに思いました。また、説明文の読解の基礎・基本、確認できるようにしているといったよ

うなことも評価につながりました。

さらに、教材に関しては、各者重なってはいるのですけれども、どちらかというとA者はそれぞれを整然として、さらに構造化して、相対的に少ない教材ではありますけれども、確実に生徒さんが必要な能力を身に付けることができるようにイントロダクションの中に、そして振り返り、しかもそれぞれに関して教師の方々に対しての教え方に関するヒントが用意されているという点で大変好ましく思いました。なので第1位はA者です。

第2位のC者に関しましては、こちらも非常に良くできていまして、学習の見通しを持つということで、「思考の地図」といったようなものもご用意されておりますし、また本の世界を広げようということで400冊を超える図書を掲載するなど非常に情報量が豊かなすばらしい教科書ではあろうと思いましたけれども、やはり国語が苦手なお子さんもいらっしゃいますし、バランス感覚をもって、精選した教材を構造化してきちんと基礎・基本を身に付けようという点でA者が一歩進んでいるかなというふうに思いました。以上です。

○矢下教育長　続いて私です。今回の教科書採択に当たっては、調査研究委員会などの報告書ですとか、あるいはたくさんのアンケート、ご意見等いただいておりますので、そういったものも参考にさせていただいております。それから、全てに共通した見方をしていますので、少しだけ最初にそれをお話させていただきます。

今回の改訂で、教科書は学習指導要領にある主体的・対話的で深い学びが十分に反映されているものと考えております。その点から教科書を見ていきますと、その考え方を実現する、あるいはそのことを助けるためにどのような工夫が教科書で工夫されているのかということを主として見ております。さらに、そのために教科書において、その教科、科目の全体の構成ですとか、進め方、取り組み方が分かりやすいか、あるいはまた教科書の内容において、その進め方がしっかり取り入れられて示されているかといったことも見ております。各教科書を通して学ぶことで、一定の学習の仕方ですとか、学び方を身に付けることができること、学習の仕方や進め方を生徒や児童が獲得していることが主体的・対話的で深い学びをより進めていくことにつながると考えているからであります。

また、教科書の知識や情報の量といったことからは、昨今のインターネットの展開から知識や情報をただ獲得して増やすというより、どの様に正しい情報を得るのか、その情報をどのように活用するのかといったことも見ております。今年のような授業の休業なども考えますと、教科書の内容の精選は今までもそうだったでしょうけども、より進められるべきだと改めて考えております。できる限り内容は絞られたほうが良いと思っています。したがいまして、精選という観点から考えると、必ずしも内容の全ての部分が丁寧に記されていることを良いというふうには考えておりません。

さて、国語科ですけれども、国語は全ての教科の基本となる科目ですので、読む・書く・聞く・話すといったことがきっちりと取り上げられていることがまず第一と考えております。全体どの教科書も鑑賞が多いのではないかという印象がいたします。文化的な側面、他の教科や社会に出てから必要なことは分かりやすく書いたり話したり、逆に文章を

理解することが大切だというふうに考えていったときに、鑑賞的な面が若干少なくなって、他の分野に増やしていただけないかなというのは個人的な思いであります。

教材の内容としては、現在の国語につながる文学的な小説や詩歌、説明文等に加えて、例えば古典の短歌ですとか俳句ですとか、もちろん十分に取り上げられていってほしい。

それから、もう1点大事なことですが、読書へいざなうということも国語の大きな役割でありますので、本への関心を高める、図書館の利用といったこともしっかり教科書で扱っていってほしいと思って見ております。

そういったことから1位はC者、2位にA者を挙げたいと思います。

その理由ですが、教科書で学ぶこと、その構成を示す、さらにそこで何を学習するのか、そして課題、問題解決の方法を身に付けることを目指すということですが、C者は目次の後で「学習の見通しを持とう」で1年間でどんな学習をして、どんな力をつけるのかを見通そうというふうに最初に示しております。

次のページの「思考の地図」で、課題学習に際して思考を広げる・整理する・深める思考法・考え方の一覧を、そしてさらに、その後の「この教科書で学習する皆さんへ」で、教科の学習に役立つ機能を具体的に最初に示しています。ここでは教科書で何を学ぶのか、どう考えて学ぶのかが示されておりまして、こうした点が非常に分かりやすいと考えました。

A者は目次の後で、学習を進めて、付けたい力を確かめようということで領域別教材一覧表があります。ここでは、例えば話す・聞くということであれば、付けたい力は情報の扱い方ですとか、思考力・判断力・表現力などの、どのようなことと関連するのかということ。そしてそれが教科書のどのような言語活動と、あるいは教材例と関連しているかを一覧にしております。そうしたことも分かりやすい。その後のこの教材の使い方のページで全体構成、各教材での学習、資料編の活用を含めて、学び方を丁寧に改めて示しております。

どちらもしっかりしているのですけれども、見やすさ、分かりやすさ、そこから実行しやすい、そういったことを考えてC者、この点ではC者と指定しております。

読書推進の面では、教材の内容に応じて本を紹介する、関連する本をまとめて紹介すると様々ですが、A者は本文中では教材の内容に関連した書名のみを掲載し、読書の広場という章立てをしております。そこで、小さな図書館として短い紹介文と共に多くの本を挙げております。私の読書体験という内容のエッセイもございます。読書への関心をそういった形で高めています。

C者も本文中で各章に関連した書物を紹介した上で、読書を楽しむという章立てをして、本の紹介合戦をしよう、読みたい本のリスト作りなど、いろいろな読書生活の仕方、読書との関わりを紹介しております。さらに読書に関する本とコラム、本の世界を広げてみようという分野別の紹介欄で構成をしております。どちらも芥川賞作家で現役である又吉直樹さんが出てきているのですけども、これが今若い人を意識して作っているのでしょうか。

幅広く読書へいざなおうとしているというのは、どちらの点も優れているということで、この2者を選ばせていただきました。私からは以上です。

○矢下教育長　ただいま各委員から、推薦する発行者について、ご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いをします。

（集計）

○矢下教育長　ただいまの集計結果につきましては、1位にC者を挙げた方が3名、A者を挙げた方が2名、2位にA者を挙げた方が2名、C者を挙げた方が2名、B者を挙げた方が1名、3位にB者を挙げた方が1名でございます。

結果として、1位にC者を挙げた方の数が3名と最も多く過半数を超えております。このことにより、国語については、C者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、国語についてはC者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、国語についてはC者に仮決定いたしました。

それでは、C者の発行者名について、指導課長、お願いをします。

○指導課長　それでは、仮決定のC者についてでございます。

発行者名は、光村図書出版。書名は、国語。

以上でございます。

書写

○矢下教育長　続いて、書写について、ご審議願います。発行者は4名となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけて、ご発言願います。

今度は、議席番号2番の神田委員から順にお願いをいたします。

○神田委員　書写指導については、文字を正しく整えて速く書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てることに配慮することと学習指導要領に書かれ、硬筆、毛筆指導を各学年で行うことになっています。また、毛筆は硬筆の能力の基礎を養うよう指導することにもなっております。

このような視点で教科書を検討させていただきました。その結果、私は1位をD者に推したいと思います。冒頭に書写指導の目的や意味が詳しく示されるとともに、学習の進め方が提示されております。毛筆で学んだことを硬筆に生かしていく。そして振り返りをするといった、この学習の流れが明確でになっております。

教材の数や内容も豊富で、教員が選んで指導できると思いました。硬筆、毛筆のお手本も書体が形よく美しいです。ノートの書き方が見開きで掲載され、その他、新聞、レポート、手紙、ポスターなどの書き方が示されていて、日頃の学習や生活に生きる指導ができ

ると思います。

巻末には3年間の学習成果を、身の回りの多様な表現活動に生かせるようにお手本がたくさん掲載されております。また、書写の基礎・基本にも関係しますけれども、姿勢、用具の使い方などが冒頭に掲載されておりますが、その写真や説明が大変分かりやすいと思います。

日本の伝統文化でもある、筆、墨、硯、紙の作り方が、また日本建築と書、古典の鑑賞など、豊富に掲載されておりまして、日本の伝統文化を尊重されていると感じました。

2位はB者とします。B者もバランスよく教材を配置して、内容もいいですけれども、D者に比べますと、教材の数や内容・資料、特に二次元コードなどの数が若干少ない点で2位とさせていただきました。

○矢下教育長　末廣委員、お願いをいたします。

○末廣委員　私は、書写は2位をA者、1位をB者といたしました。

A者もB者もとてもよかったと思うのですが、特にB者がよかったというのは、一つは、書写を何のために学ぶかという問いがあり、その答えとしては、自分の文字をよりよくするということですが、それは社会生活に生きる自分の書く文字がきれいな文字であれば自分の一生の宝物になると、私は個人的にはそういうふうに思っています。そういう社会生活に生きる書写の力をつけようというのが、この書写の時間の大きな目的だと思います。

やはり毛筆を書くことがまず基本ですよね。毛筆で筆の送り等がはっきり書き方が分かるということで、それを基本にして硬筆を書いていく。現代社会では、毛筆を書くというのはほとんど普段の生活ではないのですが、やはり硬筆を書く上でも毛筆というのは大事だということです。学習のはじめに書く姿勢とか構え方とか、あるいは大きな筆、小筆の持ち方の違いとか、筆の運び方とか、いろいろとあります。もちろん毛筆だけじゃなくて、硬筆も姿勢と構え方、それから鉛筆の持ち方ですね。今、一般的に生徒や学生が硬筆を書いているのを見ますと、その持ち方が、それぞれ癖があるといいますか、もっとちゃんと持てばきれいな字が書けるのになといつも思います。

B者がよかったのは、毛筆で習ったその後に、また硬筆で書くというのが出てきます。繰り返し、毛筆で習った後、硬筆で書いていく。それが、学びが確かなものになるということだと思います。その生徒の将来にわたって、一つの財産ですね、自分の字がきれいなんていうのは。それを養成するということで、その姿勢がより出ているのはB者ではないかというふうに思います。

それから、楷書、行書とありますけども、大人になってくると、行書を書く割合が多くなってくるということで、A者でもありますけれども、B者は筆順が楷書から行書になると変化する場合があるということとか、そういうことが分かりやすく書いてあります。

以上、書写は、1位がB者とします。

○矢下教育長　続いて、垣内委員、お願いをいたします。

○垣内委員　書写に関しましては、日常生活に生かせる、分かりやすく正しい文字を書く

ということがコミュニケーションの基礎基本であるということから、きちんとした、そのスキルを身につけることと、共に伝統的な文字文化を継承するということも重要であろうというふうに思い、この二つのポイントに加えて、社会に役立つ様々な文字文化に関する知識・機能と理解、さらに文字を効果的に書く力を育成するという、この四つのポイントを中心に拝見させていただきました。

結論としては、第1位をD者と、第2位をC者と推薦させていただきたいと思っております。

内容面、教材に関しては、ほぼ同じような教材を扱っていて、また姿勢や筆記用具の持ち方、用具の使い方、それから点・画などの書き方、さらには学習の進め方といったようなものにつきましても、各者大変工夫がなされていて、内容面に関してはいずれも望ましいものであろうというふうに思いますけれども、第1位に推しましたD者に関しますと、書写を通して学んでいくことというような姿勢がより明確に出ていること。それから、非常に丁寧なご説明になっていて、特にいいと思ったのは、構造化されているということがあります。構造化の一例として、例えば10ページのところに、自ら考え文字を効果的に使う力を学ぼうということで、イラストで何を学んでいくのか、何を学ぶか、どのように学ぶか、身につける力、文字文化への広がりといったことを、非常にビジュアルで明確に示しているということを評価いたしました。

また二つ目として、例えば、学校生活に役立つ教材の中でレポートを書くところがありますけれども、書きながら思考を整理する。これも非常に重要な社会的な役割であろうと思いますけど、こういったところも非常に丁寧にきちんとご説明されているというところを高く評価をいたしまして、このD者が第1位。

C者に関しましては、いずれもちょっと甲乙つけ難いかなというふうに思ったところではありますけれども、やはりその社会生活に生かしていくという視点が若干D者に比べると薄いかなというところと、それからD者の場合は芸術としての書道という、最終的に大きな文化の中、広がりの中での書道の位置づけも示しているということもございましたので、D者1位、C者2位とさせていただきました。

○矢下教育長　続いて、私です。

書写については、日常生活で文字を書くということが少なくなっております。習字は書道にもつながり、伝統的なものの一つであります。また、時には書は人なり、書は心の鏡と言われることもあるように、書道としてマスターすることを目指すべきであるとは思いませんが、その基本を学んでいくことは必要であります。そのためには、字を書く時の姿勢や筆遣いの基本、正しい文字を書く知るために、字のはねや止めといったことを意識すること、伝統的なことをどのように生活に活かしていくか、そういうことがわかりやすい教科書が必要であると考えます。

そのためには、字を書くときの姿勢や筆づかいの基本、正しい文字を書いたり、正しい文字を知るためには、それぞれの字の「はね」とか「とめ」とかを意識することですとか、伝統的なことを、どのように生活に生かしていくかということが分かりやすい教科書が必

要であると考えております。さらには、たくさんの教材の文字があること、日常生活への応用例といったことが多いことが大切だと思っています。

今回は、精選という点からコンパクトにまとまっている感じがすること。さらに教科書の大きさや重さで2点を選んでおります。そして、1位をB者、2位をA者としております。

B者は、「この教科書で学ぶ皆さんへ」の中で、書写の学習を、それぞれの単元で学び、「自分の文字をよりよくする」で「社会生活に生きる書写の力」を目標としています。「自分の文字をよりよくするために、①学習したことを自分の文字に取り入れる②相手や目的・場面を考えて書く③文字文化への理解を深める、と示していることがいいと思いました。

A者は、学習の進め方で①考えようで、課題について考える②確かめようで、書き方を確かめて毛筆で書く③生かそうで、学習したことを硬筆で書いて、学校生活に生かそうと提案します。この進め方を実践するために、A者は別冊にして硬筆に特化して学習できるようにしている、こうした点がよいところです。

毛筆の筆遣いでは、B者がA者より、教材となったそれぞれの字の一画一画で詳しいし、わかりやすいくなっています。以上からB者、A者としました。

続いて、髙森委員、お願いをいたします。

○髙森委員　科目名「国語科」・種目「書写」については、書を学ぶ意義や態度、学習の進め方などの説明、書道における筆画や筆法の基本的解説、毛筆から硬筆への接続、書写の学びを活用する発展学習、デジタル教材の充実度・完成度などの視点で比較・検討し、私は1位にD者、2位にC者を選びたいと思います。

書写については、導入部分において、2者ともに、書を学ぶ意義、書に向かう姿勢や態度、書写の学習の進め方、書写の学びが何に活かされるか、といったことがしっかりと示され、学習者の内的動機を引き出す工夫が図られています。また、各題材・単元ごとに、標題の下部に「目標」が、各単元末には「振り返り」が、それぞれ設定され、目当て・振り返りが位置づけられているのも書写の教科書の特徴です。

次に筆法や点画の学習について、こちらも2者ともに充実していますが、各単元のポイントとなる筆遣いについては、一般的にはイラストを用いることが多い中、D者は写真と朱墨を活用して提示しています。点画のつながりについても、筆脈が分かるように点線で示すと共に、数字で筆順を示し、文字の中心線や余白部分も明記しています。特に、余白部分を白丸（○）を使って示すのが、D者の大きな特徴で、これは他者には見られません。調和のとれた美しい書を書くには、墨をつける黒い部分と同じだけ、墨をつけない部分、つまり白い部分に気を配ることが肝心で、言い換えれば、書道は、「白い部分を書いている」とも言えるそうです。書道用語で「計白当黒」と言うそうですが、筆と筆の間、字と字の間、行と行の間といった白い部分の間の取り方が作品全体の印象を変え、そうした余白の「ゆとり」や「間（ま）」を意識するだけで、字は上達するといいます。この点に着目したD者は、すばらしいと思いました。

次に、書写の学習を日々の暮らしに活かすコンテンツについては、D者は、第2学年78頁に学習活動や日常生活に活かす場面を設定し、ほかにもコラムや付録に分散して配置され充実しており、一方のC者も、第1・第2学年においてそれぞれ2回、3学年において1回、「生活に広げよう」の枠を設け、学習する機会を提供しています。

中学校で学習する書写の大きな目標のひとつとなっている、毛筆から硬筆への接続に関しては、最も学習内容が充実しているのがD者です。D者は、はじめに硬筆で課題を確認し、毛筆の学習をした後に、「生かそう」の活動の中で硬筆の練習を通した学習内容の再確認が行える仕組みになっています。

デジタル教材の活用については、今回、選考に挙がった4者の中でも、最も充実しているのがC者でした。書道における筆画・筆法・書体の指導については、教員の技量を問われるところですが、デジタル教材を活用することで、一律の学びを学習者に提供することができ、書道になじみの少ない若手教員の精神的負担も軽減することが期待されます。こうしたコンテンツは、今後益々受容が高まることが予測されますので、今後の展開を期待します。

以上、候補に挙げた2者は、一長一短はありますが、総合的に判断して、私は1位にD者、2位にC者を選びました。

○矢下教育長　ただいま各委員から、推薦する発行者について、ご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いをします。

（集計）

○矢下教育長　ただいまの集計結果につきましては、1位にD者を挙げた方が3名、B者を挙げた方が2名、2位にA者を挙げた方が2名、C者を挙げた方が2名、B者を挙げた方が1名です。結果として、1位にD者を挙げた方の数が3名と最も多く過半数を超えております。

このことにより、書写についてはD者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、書写についてはD者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、書写についてはD者に仮決定いたしました。

それでは、D者の発行者名について、指導課長、お願いします。

○指導課長　それでは、仮決定のD者についてでございます。

発行者名は、教育出版。書名は、中学書写。

以上でございます。

地理

○矢下教育長　続いて、地理についてご審議願います。発行者は4名となっております。

それでは各委員から、採択すべき発行者について、順位をつけて、ご発言願います。今度は議席番号3番の末廣委員から順次お願いをいたします。

○末廣委員　地理は、第2位にA者、第1位にC者を挙げました。

指導要領にもあるように、これから現代人は世界の地理の状況、日本の地理の状況をよく理解して、そして考え、行動していく。それが非常に大事ではないかとというふうに思います。

A者は小学校とのつながりを大切にし、第1編で小学校の社会で習ったことが、まず出てきます。導入としましては探究課題、「みんなでチャレンジ」、「見方・考え方を考えよう」として学習課題があります。本文があって、そして学習課題があります。また「スキルアップ」、「見方・考え方」、「地理のアクセス」、「みんなでチャレンジ」などのコーナーがあり、より深い地理的学びとなっています。

それから、「もっと地理」では、世界や日本のいろいろな課題、在り方というのを、詳しく説明するコーナーです。例えば、イスラム教徒の暮らしとか、アジアとヨーロッパにまたがるロシアとか、情報化がアフリカ社会を変えるとか、世界的な災害から守るのはどうしているかとか。そのような今現在、世界的に重要な問題を「もっと地理」というコーナーで取り上げています。それから「資料から発見」ですね。これも地理的考察には重要なコーナーになっています。

1位のC者は、地理という教科を全体的に持続可能な社会を作るための取組とし、SDGｓに関連して環境・防災・共生の重要性を説明しています。また地理的見方、考え方については位置や分布、その場所の特徴、人と自然の関係、ほのかの場所への影響、地球全体の傾向など地理的な考え方をする上での、より具体的な視点が必要であることを判り易く示しています。

また「声」という欄で、実社会に活躍している人々の具体的な話、これを聞くコーナーが18と数多くあります。また技能を磨く、では、生徒が統計資料をどのように扱うかとか、時差をどうやって調べる、あるいは地形図の使い方とか、いろいろと具体的な地理学的な知識、あるいは技能を磨いていく。用語の解説では、分かりにくい用語を50音順に分けて解説しています。それに「地理プラス」では、より深い地理的な学びのコーナーとなっています。

この地理という教科では、基本的には世界を見る、あるいは日本を見るとき、当然のことながら地理的に見ていくという、これが一つのスタンスですが、それから地球全体の傾向としては、どういうものが課題としてあり、どういうことを考えなければいけないのかと。それがまず必要だと提示し、非常に多角的で幅広い捉え方をしています。またその節、節の最後に、その地域のその問題に関して、では自分が住んでいる地域の在り方はどうなのか、あるいはこれからの地域の取組はどうなのかということも考えなさいというように、生徒が自分自身の問題と重ね合わせての地理的考察のあり方を提示しています。
このようにみて総合的に地理はC者が一番良いと思います。

○矢下教育長　続いて、垣内委員、お願いをいたします。

○垣内委員　地理に関しては、社会的な実証のうち地理的な見方を働かせて、課題を追求したり、解決したりするということが主たる目的であるというふうに理解しております。その上で広い視野に立って、グローバルな国際社会に主体的に生きる、そういう資質・能力を養うということだろうというふうに思っております。

またさらに、地域の事情、それから地域的特色を理解するとともに、様々な情報を効果的に自ら調べるという、そういう主体的な学習能力を身につけるということ。最後に、地理に関わる実証の意味・意義、相互の関連を様々な形から多面的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて公正に選択・判断したりする、そういう能力というものが求められるというふうに理解した上で、各者を拝見させていただきました。

いずれの教科書も非常に多様な教材、また学びに向かっての構造化が図られているというふうに拝見いたしました。課題をつかむ、それから課題を追及する、解決する、まとめといったような構造化はいずれの教科書もできている、十分にできているというふうに思いました。

この上で、さらに詳細を見たときに、結論として私は、第1位をB者、第2位をC者と推薦させていただきたいと思っております。

まず第1位のB者ですけれども、これはほかの教科書も同じですが、教科書の使い方について、きちんとした記述があること。先ほど申しました学びに関しての構造化ができていること。特に課題解決型という観点で、どのような特色があるのかとか、どのように工夫してきたかといったような問いかけをして、生徒の主体的な学習意欲を促す学習課題をたくさん用意しているということがまず一つ挙げられます。

それから二つ目は、課題解決型のアプローチをするとしても、最低限必要な重要事項の説明というものも盛り込まれていることが望ましいであろうというふうに思いました。この点に関していうと、例えば、B者の場合にはヨーロッパのEUの成り立ちについて、ECの時代から、要するに戦争を避けて、このEUというものが少しずつ歴史的に形づくられてきたという相互の関連性を含めて非常に丁寧に正確に説明するとともに、そういう国家を越えた連携をすると、いろいろな課題、メリットもあれば課題も出てくるというところをきちんとEU内外の移民の問題にまで触れて、一つの事象ですけれども、全てを構造的に理解できるような形で提示している。最も正確でバランスがよい配慮があったと。それによって各事象の全体像が十分に理解できるのではないかというふうに思いました。こういうことを経験することによって、そこのプロセスで得たスキルを次の何か社会的事象を考えるときに応用することができるのではないかというふうに思いましたので、B者が第1位。

第2位のC者に関しましては、B者と同じように教科書の使い方についても、きちんとした説明があり、構造化されていますし、特色とか工夫とかいったようなことに関する問いかけもきちんとなされているということも評価に結びつきましたし、また資料が非常に多様で多角的で、様々な事象を扱って盛り込んでいるということによって、学ぶ側の生徒さ

んの興味関心に合わせて様々な形で使い勝手はいいかなというふうに思いましたので、第2位とさせていただきました。

以上です。

○矢下教育長　続いて私でございます。社会科の各分野は、社会的な見方・考え方を働かせて課題解決をしていくということが前提になっていると考えます。地理では、地域や国土、時には地球規模での地理的な環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統文化を通して社会生活を理解し、情報を適切に調べ、まとめる技能が望まれております。

そうした地理的な見方・考え方とそれをどのように教科書として示しているかといったことを中心に１位にC者、２位をA者としたいと思います。

C者は、表紙の裏で、「地域のよりよい発展を目指して」として、SDGｓとそれにかかわる日本の例を挙げています。目次のあとの「この教科書の学習の仕方」で主体的、対話的、深い学び方を簡潔に説明しています。その後の「地理的な見方・考え方について」では、「位置や分布」「その場所の特徴」「人と自然の関係」「ほかの場所への影響」「地域全体の傾向」といった地理学習の際のヒントとなる視点を示しています。「地理的分野の学習の全体像を見通そう」では、「地理的分野で学ぶ事柄」は「第１部世界と日本の地域構成」「第２部世界のさまざまな地域」「第３部日本のさまざまな地域」「第４部地域の在り方」を通して学習が行われること、それは歴史的分野で学ぶ事柄とともに公民分野の学習につながっていくことが書かれている。学習者が何を学んでいくかということが明確に示されていることを評価しました。

A者は、表紙裏のページ「かけがいのない世界の自然」を世界自然遺産を通して紹介しています。続くページで「持続可能な社会の実現に向けて」世界をながめる、として、「平和でより良い社会を創り、持続可能な社会を実現することは、私たち人類の共通の願いです。地球の自然を知り、世界の人々を理解し、人類が共存していく方法を考えるために、地理的学習を進めていきましょう、としています。目次の後の「この教科書の使い方と学び方」では、教科書が「課題をつかむ」「課題を追究する」「課題を解決する」「基礎・基本のまとめ」という大きな構成となっていることを示している。「課題をつかむ」では、導入の活動として、あたらしい編や章の学習をつらぬくテーマに対して、小学校やそれまでの学んできたことを参考にしながら学習課題をたてること。「課題を追究する」では本文や特設ページの内容・構成やその取り組み方を説明している。「課題を解決する」では、課題のまとめに際しては、思考力、判断力等もいかして取り組むことが述べられる。「基礎・基本のまとめ」では、このページで学習をしてきた各章の内容を確実に理解したかを確認して次に進むことが明確になっています。こうして各章の理解をしっかりして本文を進んでいくこと、それが充実していることを評価しました。

さらに見やすさといった点ではA者、C者ともに見やすく、以上から１位をC者、２位をA社としたいと思います。

続いて、髙森委員、お願いをいたします。

○髙森委員　科目名「社会科」・種目「地理」については、教科書の導入において、地理を学ぶ意義、学習の方法論・アプローチがどのように示されているか、各編・各章の構成が統一されたフォーマットになっているか、デジタル教材は実効性があるか、社会科の歴史・公民の分野をはじめ他教科への科目横断的関連性が示されているか、実践的・実習的学習や現代的課題を考察するコンテンツが用意されているか、などの多角的視点から比較・検討し、私は1位にC者、2位にA者を選びたいと思います。

地理学習の意義、地理的な見方・考え方・調べ方などの基本的態度について、C者は巻頭4ページを割いて提示がなされますが、A者は4・5頁にコンパクトにまとめられています。一方、基礎的・基本的技能の学習としては、C者の「技能を磨く」23項目に対し、A者では「スキルアップ」32項目を用意しており、こちらではA者のほうが充実しているように見受けられます。また、A者は、日本の地理編の140頁以降16頁に亘って、「地域調査の手法」について重点的に学習するなど、実地調査や資料活用の実践法・実習法がしっかりと学べるつくりになっております。

教科横断的内容については、C者は巻頭ガイダンスの8頁、および多くの偶数ページのノンブルの脇に歴史や公民への関連が提示されているばかりでなく、本文中においても、例えばC者のアジア州53頁、ヨーロッパ州70頁、九州地方183頁、北海道地方276頁などと、A者のそれぞれの該当頁の説明を比較すると、C者はA者に比べ、歴史・文化・宗教について充実した説明が見られるなど、明らかに優位性が認められます。特に日本の領土について学習する場面では、C者では20頁に北方領土の歴史的変遷を地図を用いて説明している点など、よくまとめられていると感じました。

デジタル教材の活用について、A者は「D」のアイコンを使って提示しておりますが、例えば9頁のように図版や写真が多い本編中では探し出すのが困難なほどの埋没してしまっており、またDマーク掲載頁からダイレクトに閲覧したいサイトにジャンプできず、わざわざ巻頭5頁の2次元コードからアクセスしなければならないという欠点があります。内容については、独自の教材としてクイズ形式のゲームを取り入れるなど、生徒の興味・関心を引くコンテンツも用意されています。ただし中には外部へのリンクも含まれ、リンク先は多種多様なサイトになっています。一方のC者は、本編の要所に2次元コードが印刷され、ダイレクトにサイトへアクセスできる工夫が魅力的です。内容については、NHKで作成された特定のコンテンツへ誘導するものがほとんどのようですが、内容は教科書の一部のコンテンツの補足程度となっており、使用頻度はそれほど期待できないと思います。なお、Web版「i地球儀」は、タブレット端末やスマートフォン非対応の仕様になっているので、授業での活用は注意が必要です。

全体の学習内容の配分について気付いたことですが、日本の地理について、C者は113ページ用意されているのに対して、A者は84ページと少ないことが指摘できます。単純にページ数で比較してはいけないのかも知れませんが、全体的にA者は文章のテキスト量も少

な目に設定されているようで、これを無理のない学習が展開できる工夫とみなすか、情報量の不足とみなすかで、判断が分かれるところです。

なお、A者の良いところは、各章・各編のフォーマットが首尾一貫しているところで、例えばA者58頁のアジア州、76頁のヨーロッパ州、90頁アフリカ州の見開きと、C者50頁のアジア州、68頁のヨーロッパ州、84頁アフリカ州の見開きを比較すれば、A者はいずれも統一のフォーマットで資料類がレイアウトされているのに対して、C者には統一感がなく、これは使い勝手に影響するのではないかと思います。例えば、各州の気候や人口密度を比較したい場合などに、必要な情報へアクセスしやすいのは明らかにA者になると思うのです。

また、現代的課題について考えさせる教材についても、両者ともに最終章の「地域の在り方」で学習するスタイルをとっている部分は共通していますが、A者はこれ以外にも、例えば139頁に「地球的課題をふり返ろう」などのコーナーを設けて、学習内容のまとめの中で全体を俯瞰して巨視的に考えることの重要性を学ばせている点が興味深いです。

以上のように両者とも一長一短はありますが、全体的にC者の完成度が高いというところで、私は1位はC者、2位にA者を選びました。

以上です。

○矢下教育長　続いて、神田委員、お願いをいたします。

○神田委員　地理ですけども、地理の教科書選定の視点として、①資料の量とその活用の仕方が明確か②主体的・対話的で深い学びの視点が取り入れられ、学び方を身に付けられる内容か③基礎・基本の習得が可能であるかという視点で選びました。加えて、地理ということで、日本の領域や領土をめぐる問題等についてもその記載内容を比較させていただきました。

緯度と経度や地球儀と世界地図の違いのところを比べてみました。Ｃ者の資料が若干多かったです。量だけでなく、内容も大切です。授業で活用できる資料が適切な箇所に掲載されています。「技能をみがく」のコーナーで地図帳での調べ方などはこれから学ぶ上で活用します。その他、地球儀での距離の測り方や時差の調べ方など様々な技能を身に付けられるように工夫されています。このコーナーは、２３か所に設けられ、様々な技能を身に付けることができ、基礎基本の定着が図れます。

また、地図に表記されている文字が大きくはっきりしていて見やすかったです。単元の中に二次元コードがあり、動画や問題の答えを見ることができます。

本文の説明が分かりやすく内容を理解しやすかったです。文字の大きさや太さなどもあり他者に比べて見やすく感じました。章ごとの問いに加え、学習課題が多く設定されていて、生徒が自学自習できますし、授業でも主体的な学びを進める上で活用できます。
学び方を身に付ける上では、Ｃ者は導入の資料、学習課題、本文、コラム、確認しようの流れで学習を進めることができます。

コラムでは、「未来に向けて」で持続可能な社会をつくるための取組の紹介、実社会

の人々の話の紹介があり、対話的な学びに活用することができるように工夫されています。特に、ＳＤＧｓ関係のコラムは４４か所にもあり、力を入れていることを感じました。

深い学びのために「特設ページ」が設けられています。各章で学んだことを「知識・理解」で確認したり、「思考力・判断力・表現力」の育成を図ったりすることができます。

Ａ者は巻頭で教科書の使い方と学び方を見開きで書かれています。これからは学び方を身に付け、学習課題を深めていく力を付けていくことが必要です。そういった意味からもＡ者の教科書の構成や編集の意図は優れていると思います。課題を追究し深める工夫として、「みんなでチャレンジ」「スキルアップ」「見方・考え方」「地理にアクセス」など充実したコラムは魅力的です。日本の領域の特色や領土をめぐる問題について、Ａ者、Ｃ者ともに、資料とともに分かりやすく述べられていると思いました。

私は、１位をＣ者、２位をＡ者に推したいと思います。

以上です。

○矢下教育長　ただいま各委員から、推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局、お願いします。

（集計）

○矢下教育長　ただいまの集計結果につきましては、1位にC者を推した方が4名、B者を推した方が1名、2位にA者を推した方が4名、C者を推した方が1名でございます。

結果としては、1位にC者を挙げた方の数が4名と最も多く過半数を超えております。

このことにより、地理については、C者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、地理についてはC者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、地理については、C者に仮決定いたしました。

それではC者の発行者名について、指導課長、お願いをします。

○指導課長　それでは仮決定のC者についてでございます。

発行者名は、帝国書院。書名は、社会科中学生の地理　世界の姿と日本の国土。

以上でございます。

歴史

○矢下教育長　続いて、歴史についてご審議願います。発行者は7者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけて、ご発言願います。今度は議席番号4番の垣内委員から順にお願いいたします。

○垣内委員　歴史分野、大変重要な分野だというふうに思います。社会的事象の歴史的な見方・考え方に立って、広い視野を持って、グローバル化する社会に主体的に生きる。そ

ういう主体的な市民をつくるという意味で非常に重要なものであるというふうに理解しております。

特に日本の歴史の大きな流れを世界の歴史を背景にして、各時代の特徴を踏まえて理解するということだけではなく、様々な資料から歴史に関する情報を効果的に調べてまとめる、そういった技能を身につけるということが一つの大きな眼目になろうかと思います。課題解決型といいますか。

もう一つの重要なポイントは、それぞれの事象の意味とか意義、特色といったものを時代や年代の推移、そして比較、相互の関連、現在とのつながりなどに着目して、多面的、多角的に考察すると。そういう能力も求められているというふうに理解いたしました。

その上で、各者、教科書を拝見させていただいたところです。いずれの教科書も、教材についても、そしてまた教科書の使い方、あるいは課題、学習課題、本文を振り返り、学習まとめといったような内容構成であるとか、それから単元の終わりに振り返りが用意されていること。さらに、その学習を深めるための様々なコラムとかといったような教材を用意しているという点では、いずれも優れた構成になっているかというふうに思いました。

ただ、そうはいっても比較しますと、やはりかなり構造的に理解をさせるということ、課題解決型ということであれば、課題は何か、その課題意識、あるいは問題意識というものを十分に理解した上で、それに対する解決策を考えていくという非常に主体的で深い学びが必要とされている科目であろうというふうに思いました。

その観点からいうと、第1位は、私はB者、第2位がD者を推薦したいというふうに思います。

B者に関しましていうと、教科書の使い方については約2ページにわたる丁寧な記述がございます。また、学習課題、本文振り返り、学習まとめという丁寧な内容構成であって、生徒さんの学ぶ側の主体的な学習を促すのに非常にいいのではないかというふうに思いましたし、また単元の最初に単元の探究課題、最初に何を考えるのかというようなことに対するヒントがあり、そしてまた、課題解決のための探求のステップといったようなことを明確にしている。特にウェブリングとかマトリックスなどを使いながら構造的に、その社会的な事象を理解しようとする。そういう姿勢が育まれるのではないかというふうに思いましたので、大変高く評価をさせていただきました。また、単元の終わりに関しましては、学習を振り返ろうということで、基礎・基本のまとめ、それから、まとめの活動というものも設定しているというところです。

二つ目に、このB者がいいなと思ったところですけれども、こういう学びを補完するためのコラムをたくさん用意しています。課題の追究を深めるためのコラムとして、「みんなでチャレンジ」であったり「スキルアップ」といったようなことを準備しているということだけではなくて、本文を深めるコラムとして、もっと歴史とか、地域の歴史を調べようといったような様々な多角的なアプローチの糸口を用意することによって、このたくさんの資料の中から、生徒さんの興味関心に沿って学習が組み立てやすいのではないだろう

かというふうに思いました。

また、仕様上の便宜としては、ほかの教科書もほぼ同じですけれども、見開き2ページで、学習課題、それから本文学習、コラム、チェックイン・アンド・トライなどという形で掲載されていて、1時間の授業で十分に学習できる、過不足なく学習できるかなというふうに思いました。また、デジタルに関しましても、専用のウェブページから様々な情報が得られるというところも評価いたしました。

もちろんほかの教科書でも、いろいろなデータもご用意はされていますけれども、B者が一番丁寧で、小学校の勉強の流れも踏まえて中学校での課題解決型、深い学びに入っていく、スムーズに入っていくことができるのではないかというふうに思いましたので、B者が第1位。

第2位のD者、こちらも調べ方、まとめ方、それから発表の仕方といったようなところに工夫を凝らしておりますし、対話的な学びを促すコラムというようなものもご用意されております。また、二次元コードによるデジタル資料もご用意されておりますけれども、丁寧さと構造的な学びという観点からB者のほうがやや優れているのかなと、読みやすいのかなというふうに思いました。

以上です。

○矢下教育長　次に私です。

歴史的な見方・考え方を通して現代の社会問題の解決に生かしていくということを、生徒が理解していくことが大切であると思います。こうしたことを教科書がどのように対応して、生徒あるいは子供たちに理解をさせていったり力を入れているかを特に見ております。その点から判断して、1位にB者、2位にD者を挙げさせていただきます。

B者は、表紙裏のページで日本の国宝・重要文化財をあげ、日本の歴史的、芸術的、学術的に価値の文化財があることを述べ、この見開きをそうしたことから歴史に誘うページとなっています。なるほどこんなものがあるのかということが概観できます。関心を持てば次の段階へ進んでいけると思います。さらに、続くページ、「持続可能な社会の実現に向けて歴史に学ぶ」で、現代の社会が直面するたくさんの課題に歴史が役立つと述べています。それは、「歴史は、人々が過去にどのようにして課題を克服しようとしたのかを教えてくれるからです」と歴史学習の意義を述べております。

「この教科書の使い方と学び方」では、全体の構成と、その各構成の説明をして、教科書全体の流れを簡潔に説明しております。そして、この流れで本文が進んでいくわけです。第１章は「歴史への扉」です。この章では、歴史的な見方や考え方、歴史の流れのとらえ方、自分の住んでいる地域を題材に、テーマを設定し、調査し、考察をしてまとめ発表するという内容が丁寧に具体的に書かれてわかりやすくなっています。この後、本文を通じて行われていく課題解決の学習を進めていくことをしっかりサポートしていく期待が持てたことを評価しております。

D者は、表紙裏の見開きでは、「日本各地の伝統行事とまつり」が紹介されていて、そ

の一つ一つに簡単な説明と本文の関連するページが示されていて、それぞれが歴史的な関心を高める、そんな工夫を感じております。「この教科書の学習のしかた」は、学習の見通し・振り返りの流れ、本文ページの学習のしかた」「コラムやその他のページ」が主体的、対話的、深い学びにどうつながっているのかわかるように簡潔に示されています。

第１部は「歴史のとらえ方と調べ方」で、「歴史の流れと時代区分」と「歴史の調べ方・まとめ方・発表のしかた」になっています。キャラクターや漫画を使って親しみやすくなっていますが、内容は充実しています。特に地域の歴史を調べ発表する内容は、少々詳細過ぎる、細か過ぎるかとも思いましたが、実際にそのようなことを生徒が行っていくときには資料の作り方など非常に参考になるのではないかと思いました。さらに、課題解決学習を具体的に理解できるいい教材であるというふうに考えられると評価しました。

以上のことから、B者を1位、D者を2位というふうに推薦をいたします。

○矢下教育長　続いて、高森委員、お願いいたします。

○高森委員　科目名「社会科」・種目「歴史」については、教科書の導入部分において歴史を学ぶ意義や学習の方法が分かりやすく示されているか、課題を追究し学びを深める活動が充実しているか、資料を分析する能力を育むコンテンツが用意されているか、資料の見せ方に工夫があるか、デジタル教材の使い勝手はどうか、などの視点で比較・検討し、私は1位にD者、2位にB者を選びたいと思います。

まず、全体的に両者を俯瞰すると、D者はテキストの文章量も多く、扱う題材や話し合い活動も高い水準に設定され、限られた時間内ですべてを消化するにはハードルが高いような気がする一方で、B者は、文章量も適切におさえ、学習に無理のない設計になっているといった印象を受けました。

教科書のガイダンス的位置づけにある導入部分について、歴史を学ぶ意義が明確に示されているのはB者の1頁でした。D者には管見限り確認できません。その替わりに、学習の方法について、D者は6～12頁の「歴史の調べ方・まとめ方・発表のしかた」で丁寧な説明が用意され、B者の14～17頁に比べて充実しています。特に、D者10頁下段の「技能をみがく」のコラム欄「レポートのまとめ方、発表のしかた」は、人文社会科学系の学術研究の基礎となるような内容が示され、ハイレベルであると思います。人文社会科学の科学的アプローチは、物事を調査・整理し、新たな知見を得て、その正しさを立証していく過程をたどります。そこでは、対象を観察し、考察し、考察した結果を表現するというプロセスをとり、このプロセスが独りよがりにならずに他者も理解・合意できるようにするために、論理整合性、事実立脚性、主観的客観性が要求されます。D者の教科書では、そのことを中学生にも分かりやすい表現で説明している点が優れています。

対話的な学びにつながる活動が充実しているのは、D者です。「未来に向けて」と題した43点のコラムを用意し、環境・交流・人権・平和など、今日的課題を歴史に学んで解決するという態度を、教室で学べる工夫がなされています。一方のB者は、「みんなでチャレンジ」のコーナーを設け、同様の活動を想定していますが、テーマ別設定はありません。

資料の分析能力を育むコンテンツについては、D者・B者それぞれによいところがあります。B者の「資料から発見！」の特設ページは、時代を代表する絵巻物・屏風絵・浮世絵・錦絵などを通して、そこに描かれた情報を読み取るスキルの重点的学習を用意しているばかりでなく、教科書の随所に「集める」「読み取る」「まとめる」のアイコンを駆使して、歴史を学ぶ上で必須となる基礎的・基本的な技能を繰り返し学習する場面が設定されています。一方、D者では、B者のような特設ページはありませんが、替わりに例えば37頁の「系図の見方」、52頁の「絵巻物の見方」、249頁の「新聞の意図を読み解く」など、「技能をみがく」のコラム欄が充実しており、このほかにも各章各節に掲載された写真・資料の多くにキャラクターの吹き出しで問いを設け、資料から情報を読み取る活動を取り入れております。D者の場合、これらすべてを限られた時限の中でこなすのは困難かもしれませんので、事前の予習の一環として持ち帰らせ、毎時の冒頭で意見を集約するという展開も可能かとは思います。

資料の見せ方で優れていると思ったのは、ひとつには都市の鳥瞰図があります。D者39頁の藤原京、40頁の平城京、52頁の平安京、66頁の鎌倉など、イラストではありますが、実に細かく描写されており、都市の景観をイメージしやすいと感じました。同じ教材を扱うB者の39・40・46・68頁は、鳥瞰図ではなく復元模型や空中撮影などの写真を用いているためピントが甘く、鮮明ではありません。

また、D者は「歴史を探ろう」の見開き特設ページもテーマに一貫性があり、72頁では中世の博多、142頁では近世の江戸、176頁では近代の横浜、228頁では大阪と神戸というように、その時代に特に発展をみせた都市の実際を学習できる教材が用意されております。これらは知識の幅を広げるという意味でも効果的だと思いました。同様の教材は、B者では「地域の歴史を調べよう」の56頁に福岡と200頁に神戸が紹介されるにとどまります。

デジタル教材について、D者は発行者独自のコンテンツとNHK作成の外部コンテンツで構成され、それぞれのサイトのレイアウトが統一され、内容も充実しており、使い勝手がよいと感じました。一方、B者は、デジタル教材の箇所を「D」マークを使って提示しますが、本編中のアイコンが小さいため、埋没して判然としないのと、アクセスすめるためには、いちいち5頁の2次元コードを開かないといけない部分が不便です。内容は、他の教科や分野への接続、穴埋め形式のシミュレーションやクイズ形式の練習問題といった独自の教材が用意されているなど工夫がみられますが、さまざまな外部コンテンツへアクセスする項目が多いのは、リンク先のフォーマットが多種多様であるため、使い勝手はあまり宜しくありません。

なお、これは蛇足となりますが、D者・B者の一方にあって、他方にない特色ある教材として、D者には、69頁に鎌倉仏教の祖師たちの活動期間を比較できる年表、250頁に沖縄戦の記憶、252頁に終戦の日の体験談、253頁に広島の原爆で亡くなった少女の日記の紹介などが、一方のB者には54頁に古事記・日本書紀の紹介、77頁に文永の役・弘安の役の進軍経路、223頁にブロック経済の世界地図、244頁に東京大空襲の聞き取り活動などがありま

す。また、領土問題については、両者ともにしっかりと紙面を割いており、D者は179頁および266・267頁の見開きを使い、B者は178～181頁の4頁にわたり、それぞれ詳述されています。

以上の比較・検討をふまえ、全体の学習量の多さや水準の高さは気になるところではありますが、私は1位にD者を選び、2位にB者を選びました。

以上です。

○矢下教育長　続いて、神田委員、お願いをいたします。

○神田委員　歴史の教科書を選定する観点として、①学習のねらいが明確であるか②主体的・対話的で深い学びにつながる内容か③知識・技能の習得が可能か④客観的事実を基に分かりやすい説明がなされているかなどを比較させていただきました。

どの教科書も冒頭で教科書の使い方や学び方が示されていました。導入、課題、本文、コラムなどの資料も充実しています。歴史はその捉え方が様々あります。公教育で指導する際には客観的な資料を多く掲載し、学習者がその資料を基に多面的な思考ができることが大切だと考えます。

B者は冒頭に教科書の使い方が丁寧に示され、自学自習も可能な教科書でもあると思います。また、歴史を捉える見方・考え方が２Ｐ使って説明してあります。ここで歴史を学ぶ上で大切な考え方を示しています。

この教科書は見開き２頁を１時間で学習する構成になっています。毎時間の学習課題が示され、本文の説明が分かりやすい、文字の大きさや色彩もよく見やすいです。また、資料も多く、その資料を基に様々な視点から考えを深めることも可能です。文化遺産の資料は１４６点に上ります。ページ下には時代スケールが掲載され、時代の流れやつながりを常にチェックすることもできます。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けての工夫が多いと感じます。章のはじめに「みんなでチャレンジ」があり、対話的な学びを促しています。また、「テーマを決めて調査・考察しよう」「まとめと発表をしよう」では探究学習のやり方が４頁で掲載されています。

基礎的・基本的事項の定着については、導入と振り返りが意識された構成となっています。各ページに「チェック」「トライ」が設けられ、「チェック」で基礎的・基本的な内容を確認し、「トライ」で発展的な学習ができるように工夫されています。章ごとに課題型のまとめとテストも用意されています。技能的な面でも各学習過程でスキルアップが図られるようになっています。

ＳＤＧｓに関しても巻頭の２頁で扱っており、歴史学習との結びつきを意識しています。また、Ｄマークや二次元コードから専用ウェブページを閲覧でき、情報を得ることができます。他に地域性としまして、東京に関する歴史を多く取り上げられ、東京大空襲では台東区の歴史も掲載されています。

その他、Ｄ者は小学校で学ぶ事項、地理や公民で学ぶ事項がページ下に掲載されていて発達段階や小中との連携を意識したのは評価できます。また、章や節の最後に知識・技能と

歴史的な見方・考え方の振り返りを丁寧に扱っており、学習の成果をまとめることができます。「多角的・多面的に考えてみよう」「技能をみがく」などのコラムも充実しています。全体的に様々な観点からの工夫が見られる教科書ではないかと思います。
このような理由により私は、第１位はＢ者、２位をＤ者に推したいと思います。　以上です。

○矢下教育長　続いて、末廣委員、お願いをいたします。

○末廣委員　私は、歴史は第2位がA者，第1位がB者を推します。

歴史教育の在り方というのですかね。それは今まで先生方も仰っていたのでカットしますが、一言だけ言えば、歴史という教科は、試験のとき歴史的事実を暗記するだけの教科になってはいけないということです。まず2位のA者が一番良かったのは、章があって節があって項がありますね、その項目の立て方が非常に良いといいますか、生徒に何これって関心を持たせるような項目がずっと並んでいます。生徒に興味と関心を持たせるそれだけで、とてもいい項目の立て方だと思います。例えば、古いほうから行きますと、全ての道はローマに通ずですね。その後、楽浪の海中に倭人あり、望月のかけたることもなしと思えば、祇園精舎の鐘の声、このごろ京にはやるもの、教会とコーランの教え、太陽の沈まない国、東南アジアに広がる日本まち、連判状にまとまる人々、読み・書き・そろばんの習い、王は君臨すれども統治せず、散切り頭をたたいてみればと、こういうような結構有名な言葉、その事件をほうふつとさせるようなテーマの立て方、これは他者にはない非常にユニークなもので、この点だけでも私は2位に推しました。

それから、1位がB者です。歴史への扉といいますかね、中学生になって歴史を習うというとき、本題に入る前の導入としていろいろなことが設定されています。1年生の第1章第1節、まず時代とか年代の表し方、まだ小学生はあまりよく分ってないと思いますね。それから歴史の流れの捉え方、ここで小学校で学んだ人物とか文化財とか出来事、こういうのが出てくると1年生も歴史に親しみやすい感じになってくると思いますね。第2節には「まずテーマを決めて調査しよう」とあり、これは身近な地域の歴史ですね。それを調査しましょうと、そしてそれをまとめて発表をしましようと。第2章になりますと「古代までの日本」ということで、平城京が創られた背景に迫ろうというのが導入のまず活動なのですね。このように1年生が歴史に親しみを持ち、自然と学びに入っていく工夫がなされています。

あと章・節の立て方は、このB者は今の「歴史への扉」があって、その次に「古代までの日本」、「中世の日本」、「近世の日本」、それから「開国と近代日本の歩み」、「二度の世界大戦と日本」、「現代の日本と私たち」とあります。それで、基本的には、日本の歴史があり、同時にその時代の世界の在り方を説明し、考察している。もちろんこれは他者でもこの姿勢はありますが、特にB者はその世界の在り方の説明が非常に詳しく、ページ数を取って説明しています。昔は日本史は日本史、世界史は世界史で習いましたけれども、今は世界史の中の日本、あるいは日本史の中で見る世界史、そういうような感じで

考察する、それをはっきりとB者は表しているのではないかと思います。また「資料から発見」、というコーナーがあり、例えば絵巻物から古代の人々の姿を捉えていく、2番目にびょうぶ絵から中世の人々の生活、3番目に浮世絵から近世の人々、そして明治の錦絵から文明開化の様子を見るなど、このような一つのテーマで各時代を追っておりますね。非常に面白いと思います。それから、「みんなのチャレンジ」では、みんなで一緒に研究していく。それから「スキルアップ」あるいは「歴史にアクセス」等、それぞれ歴史の面白さ幅広い知識を得ることで深い学びにつながるコーナーがあり、私は歴史はB者が非常に充実しているということで、第1位に推します。

○矢下教育長　ただいま各委員から推薦する発行者について意見を頂きましたが、集計した結果について、事務局、お願いします。

（集計）

○矢下教育長　ただいまの集計結果につきましては、1位にB者を挙げた方が4名、D者を挙げた方が1名、2位にD者を挙げた方が3名、A者を挙げた方が1名、B者を挙げた方が1名です。

結果として、1位にB者を挙げた方の数が4名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、B者に仮決定をさせていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等はございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、歴史についてはB者について仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、歴史についてはB者に仮決定いたしました。

それでは、B者の発行名について、指導課長、お願いします。

指導課長。

○指導課長　それでは、仮決定のB者についてでございます。

発行者名は東京書籍。書名は、新しい社会　歴史。

以上でございます。

公民

○矢下教育長　続いて、公民についてご審議願います。発行者は6者となっております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について順位をつけてご発言を願います。

今度は、議席番号5番の私から順に発言をいたします。

公民ですが、地理、歴史の内容を踏まえて、民主国家、平和国家、グローバル国家の公民としての資質、能力を育成すること、地域社会への誇り、愛情、一員としての自覚、国土と歴史への愛情、国民としての自覚、世界の人々と生きていく自覚を育成するといったことが大切ではというふうに考えております。こうしたことから、1位にはE者、2位にA者を挙げさせていただきます。

E者は、表紙見開きで、「持続可能な社会の実現に向けて　これからの社会を考える」というページで様々な視点を挙げたうえで、「公民では、現代社会の様々な課題について、それを解決し、持続可能な社会を実現するにはどうしたらよいのか学習していきます」と述べています。続く、「公民学習のはじめに」では、「地理と歴史で学習してきたことをもとに公民の学習を進める」ということで本文、各章を概観しています。
「この教科書の使い方・学び方」では、章の構成と各構成の内容を簡潔に述べた上で、そして「本文ページの構成と学び方」で各ページの内容の見方を示して、対話的な活動のページや学習を進める上での基礎・基本的な技能を身につける点の説明などをしております。さらに、本文に出てくるキャラクター紹介をして、使いやすさ、親しみやすさを出しております。さらに、ページも見やすく、こういった点を評価させていただきました。

A者は、表紙あるいはその裏の見返しで「よりよい社会を目指して」と始めております。見返しでは、「地球上に暮らす誰もが心豊かに人間らしく心豊かに生きていける社会をつくるために、私たちは何ができるでしょうか。」として、様々な分野や活動している人々を紹介しております。「この教科書の学習のしかた」は、学習の見通し・振り返りの流れ、本文ページの学習のしかた、コラムやその他のページ、が主体的、対話的、深い学びにどうつながっているのかがわかるように簡潔に示されています。

つづく「公民的分野の学習の全体像を見通そう」で、小学校で学んだ事柄、地理的分野で学んだ事柄、歴史的分野で学んだ事柄を生かしながら、公民的分野の学習を進めることを示しています。さらに本文の内容に入る前に、「学習のはじめに」というページを設けて、「夢に向かって」として、様々に学んだ、学ぶことを通して、社会についての一つ一つの理解や経験を積み重ねて自分の夢の実現につなげる」としています。この教科書で、学ぶこと、学んでいくこと、そういうことが丁寧に述べられていることを評価しました。以上の点で、この2者を選んでおります。

続いて、高森委員、お願いをいたします。

○高森委員　科目名「社会科」・種目「公民」については、教科書の導入部分において公民を学ぶ意義や学習の方法が分かりやすく示されているか、課題を議論し掘り下げる対話的・深い学びにつながる活動があるか、デジタル教材は有効に活用されているか、などの視点で比較・検討しました。特に公民の分野は、同じ社会科の地理・歴史分野と大きく異なる点として、「答えのない課題をみんなで考える」という特色が比較的強い教科と思われますので、対話的・深い学びについては、時間的制約のある中で無理なく効果を上げられる工夫がなされているかどうかに特に重きを置いて比較しました。結果、私は1位にE者、2位にA者を選びたいと思います。

まずガイダンスの充実度について、A者は巻頭6頁ならびに全4部の冒頭において、E者も巻頭2頁および全5章冒頭において、それぞれ丁寧に説明されています。全体の構成は、両者それぞれ特徴があり、A者は現代社会・政治・経済・国際の4章で、E者は現代社会・憲法・政治・経済・国際社会・SDGsの6章で構成されておりますが、特にSDGsに関しては、A

者は国際社会を扱う第4章の中で学ぶ一方で、E者は別途第6章を設けている点が特徴的です。

課題をみんなで考える対話的・深い学びについて、A者は要所に「未来に向けて」「よりよい社会を目指して」「Yes No」「アクティブ公民」「技能をみがく」「公民プラス」の特設ページやコラムを用意し充実していますが、これらすべてを限られた授業時数で消化するのは困難ではないかと思います。一方、E者は、「みんなでチャレンジ」「スキル・アップ」「見方・考え方」「公民にアクセス」の活動に絞り、分量的には無理のない授業展開が望めます。

活動の内容で比較しても、A者は、44頁に死刑制度、54頁に18歳選挙権、90～92頁に裁判員制度、187頁に難民問題などなど、考えさせられる内容が多いこと、また91頁では裁判員裁判に裁判員として判決を迫られる状況の疑似体験、111頁には航空機事故で無人島に漂着したことを想定したシミュレーションなど、日常・非日常で判断を迫られる事案を想定した学習ができるのも、生徒には興味をもって取り組める題材ではないかと思います。一方、E者にも、34頁に自転車ルール、63頁に尊厳死問題、106頁に模擬裁判、122頁には自治体の首長となって条例を作る活動など、興味深いテーマが見えます。全体の活動数については、ここでもE者は、A者に比べて適量で、無理のない授業展開が期待できます。公民分野で大切にしてほしい対話的・深い学びについて、ひとつのテーマに時間を掛けて取り組めるのがE者ではないかと思います。

次に、デジタル教材について、A者は、各部の標題や各章の見出しに2次元コードを配置し、視認性と利便性を高めています。内容は、NHKの教育コンテンツほか外部リンクに誘導するものが多いのが特徴です。一方、E者は、デジタル教材の箇所を「D」マークを使って提示して2次元コードからアクセスするかたちをとり、内容的には、外部コンテンツも含まれる一方で、他の教科や分野への接続、シミュレーションや練習問題といった独自の教材で存在感を高めています。動画コンテンツは少なく、これは、デジタル教材をあくまでも補助的役割と位置づけて、公民では対話的・深い学びの活動を主軸に据えて授業を展開することが重要との判断だと思います。

以上の比較・検討をふまえ、私は1位にE者、2位にA者を選びました。

以上です。

○矢下教育長　続いて、神田委員、お願いをいたします。

○神田委員　公民の教科書を選ぶに当たって比較させていただいた点について述べさせていただきます。

まず、公民とは、何を学ぶのかといった学習の意義や狙いを導入に明確に示しているか、それから、広い視野に立ち現代社会の見方・考え方を働かせて課題を追究したり解決したりすることができる内容や資料が盛り込まれているか、そして、その内容や情報を基に効果的に調べたりまとめたりする技能が身につけられるか、また、様々な事象を自分のこととして主体的に社会に関わろうとする態度が育成できるのかといった視点から拝見させて

いただきました。

学習するのは3年生であるとはいえ、公民という学習の意義を理解するのはなかなか難しいと考えます。そこで、導入部分をまず比べてみました。

E者は、持続可能な社会の実現に向けてこれからの社会を考えることを「人権・平和」「環境・エネルギー」「防災・安全」「情報・技術」「伝統・文化」などの様々な視点からとらえ、公民の学習の意義について簡潔に分かりやすく説明しています。そして、教科書の使い方、学びの流れ、コラム等の特徴についての説明があります。第１章への導入にあたり２頁を使って資料と課題提供があります。そこには対話的な学びや思考の可視化におけるツールの提供などもあります。１章の展開も持続可能な社会について学び、現代の課題、情報化へとつなげています。生徒にとって公民の学習への導入の流れが大変スムーズなのではないかと考えます。Ｅ者は他の社会科の教科書全体に言えるのですが、課題をつかむ→課題を追究する→課題を解決する→まとめの活動といった学び方が明確に示してあるので、生徒は主体的な学習を進めることができます。

また、内容については、現代社会、憲法、基本的人権、政治、暮らしと経済、国際社会などのしくみや課題がバランスよく分かりやすい説明で書かれており、公民の学習の基礎基本を身に付けることができます。また、自分のこととして考え学ぶことができる工夫が随所に見られます。先ほどは１章の導入について述べましたが、各章の導入でも様々に工夫された資料を基に自分なりに考えてみる形がとられ、本題に入ることができます。章末には学習を振り返る問題があります。「探究のステップ」ではさらに学習を深めることも可能ですし、まとめの活動では自分の考えを自分の言葉で述べたり書かせたりして学習の定着や発展を図ることができます。「もっと公民」では興味深い資料が提供されています。コラムが大変充実しているので現場の先生方がいろいろな指導法の工夫で学習を深めることができると考えます。

また、A者も内容や構成がしっかりしている教科書であると思います。学習課題の提示、本文、振り返り、まとめという流れで主体的に学習を進めることができます。A者は、小学校の学びや地理・歴史での学びと関連付けたり、本文に解説を細やかに入れたりして、生徒の学びを助ける工夫がしっかりなされています。

これらのことを考えて、私は、1位をE者、2位をA者として推したいと思います。

以上です。

○矢下教育長　続いて、末廣委員、お願いをいたします。

○末廣委員　公民は、第2位がE者、それから第1位はD者です。公民というのは、簡単に言えば、個人としての人間の在り方、それから社会に生きる人間としての在り方、私と公という両方を勉強する教科だと思います。

その点において、E者は、まず持続可能な社会というのがいわれていますが、それはどういうことなのか、そこから始まりまして、それがまず「探求のステップ」、そして内容的にはグローバル化が出てきますね。その中で、グローバルの社会で国際競争とか国際分

業とか、そういう説明が入ります。その後、第3節には、社会的な集団の中で生きる私たちはどうあるべきかということで、具体的に２年前の学校でのトラブルについて考えよう、それから1年前のやはり学校でのトラブルについて考えよう、それから現在の学校でのトラブルについて考えようと、この三つのトラブルに対して生徒たちはどう考えるか。学校の中の集団の生活の中で決まり事はやはり必要だとなると、それをどう評価して、見直すのか、そこから共生社会という在り方を目指そうではないか。そういうつながりで本文があります。それからE者のいいところ、いろいろとありますが、「みんなでチャレンジ」とか「スキルアップ」とか「公民にアクセス」と、そういうコラムがあり、それから「もっと公民」ですと我々が知りたいことがいわゆるテーマになっています。例えば新しい情報技術で社会が変わるとか、誰もが暮らしやすい共生社会、東日本大震災からの復興と防災、この場合は仙台市を例に挙げていますね。このように総合的に考えて、E者を2位に挙げました。

1位のD者ですが、まず序章でいわゆる「現代日本の自画像」というものが出てきます。それで、今の日本はどういう国なのかということで、やはりグローバル化、情報社会、少子高齢化、文化の継承と創造というように現代日本の特徴が示されています。そこのところで「もっと知りたい」というコーナーがあり、日本人の精神というものはどういうものか、科学というのは何だろう、芸術というのは何だろう、宗教とは何だろうと、この四つが「もっと知りたい」に出てきており、やはりこれは現代人として考えなくではいけない問題だと思います。それから、家族の問題、家族と個人、民法と家族、そういう観点で家族というものを考えていく。また、地域社会と個人、国家、共同社会、利益社会、そういうものはどういうものか。更に立憲国家ということが出てきまして、歴史的に世界の立憲民主主義の誕生というのを捉えています。

その中でグローバル化というのがありましたが、既に今のコロナのことを予想するような記述もあります。「一地方で発生した新型インフルエンザが短時間で地球全体に広がり、多数の人々が感染し死亡する事態も発生し」と、一国で生じた危機が瞬時にグローバル化するという問題がある。ですからグローバル化というのはいい面だけではなくてマイナスの面もあるという説明があります。他者にもいいことばかりではなくてマイナスの面についいての記述がありますけれども、これだけはっきりと指摘しているのはこのD者ぐらいだと思います。また情報社会もいい面と悪い面、情報のセキュリティの問題とか、利便性があるけれどもプライバシーが侵されるというような問題点もはっきり記述があります。

更に「日本の自画像」では、一般的にいわれることですが犯罪が比較的少ない国で経済が疲れてきているが経済大国とか技術大国といわれている。文化をしっかりと継承して、そしてなおかつ創造していく。今までの日本の歴史の中でも伝統文化の上に様々な異文化を受け入れてきた。和の精神を大切にする、日本人は勤勉であり、あるいはものづくりにこだわる文化・伝統、そういうものがあるなど、日本人の自画像が描かれています。

そして、最初に家族のこと、家庭科でも家族のことを詳しく扱っていますが、やはり家族が非常に大事だということ、民法と家族、私たちと地域社会、家族愛から一般的な社会につながっていく、あるいは国際社会の平和と発展へつながるものだという見解です。

「国家と私たち国民」では、国民主権、自主独立の立場が最も大切なものであるという説明があります。この国民主権であって自立独立の立場とはどういうことかというと、我々個人が自ら判断し、自ら自分の行動を決めるということであり、人々が自主的に物事を判断し行動する力がなくなってくると、これは非常に危ないことだと、一人の人間として、あるいは社会としても国としても危ないことだということが書かれています。このように最初に日本人の特徴が示され、そこから公民が始まっています。

また、アクティブに深めようというコラムがあり、例えばグローバル化によって私たちの生活がどう変わったのか考えてみようとか、それから新聞を読み比べてみようということとか、いろいろと提案がされています。「もっと知りたい」のというコーナーも現代のリアルなテーマ、例えば、実際に今、日本で行われている裁判員制度というものとか、それから地方自治と防災、企業は誰のものか、近隣諸国の人権問題など、現代日本社会における種々な課題や近隣諸国に起きている国際的事件もとり上げられています。このように公民として考えなくてはいけないことが、明確に示されているという点で、D社が1位であると推します。

○矢下教育長　続いて、垣内委員、お願いをいたします。

○垣内委員　公民に関しましては、個人の尊厳と人権の尊重、特に自由・権利、責任・義務との関係を理解するということで、民主主義の意義といったようなことを理解するとともに、様々な資料から情報を効果的に調べまとめる技術・技能を身につけること、そして最終的には公正に判断する、あるいは考えることができる、そういう力を身につけるものであろうというふうに思います。いずれの教科書に関しても、内容面、それから構造化についてはかなり工夫が凝らされているというふうに拝見いたしました。ただ、以下述べるような理由で、私は、第1位をF者、第2位がC者を推したいというふうに思います。

いずれの教科書も、教科書の使い方、それから学習課題、本文の振り返り、まとめといったような内容構造になっていて、さらにその学習を多面的に可能とするような素材も十分用意されているというふうに理解いたしました。ただ一方で、F者の場合は、例えばその本文の中に様々な問いを盛り込んでいて、確認をしようとか表現をしよう、自分なりの考えを表現しようといったようなことが盛り込まれていたり、その多様なテーマ、それから課題理解を別の角度から考えるための素材として「公民の技」とか「公民の窓」といったようなものも用意されているという点、高く評価いたしました。

また、単元の学習を振り替えって整理するというところには、それぞれその単元の整理のための各問いも設けられていますし、資料からその問いに答えるとか、単元のテーマについて以下の問いに答えるといったようなことで、学習が深まりやすいのではないかというふうに思ったことと、それから、教える側の教員の方々の経験、なかなかこの経験値が

意外に重要な科目なのかもしれないというふうに思いましたので、そういう教員の方々にも使いやすいのかなというふうに思いました。そうはいっても一番良かったなと思うのは、実はテキストの一番最初に教科書の使い方、公民の学習を始めるに当たってということでSDGsについて記載されているんですけれども、ここに「すぐに答えが見つからなかったり複数の答えが出てきたりすることもある。本質的な問いということに着目させる。」というようなことが書かれているのと、グローバルな社会、情報化もそうですけれど、つながりへの気づき、つまり探究性に配慮させるというような導入部分があり、そして何度も出てくることですけれども、自分なりの答えを探し続けていきましょうということで、この公民の考え方にどういうふうに自ら向き合っていくのか、そういうようなことを明示しているという点も高く評価させていただき、第1位がF者になります。

第2位、C者ですけれども、C者も大変工夫がされておりまして、深い学びのためのアクティビティーとかチャレンジとか様々なものも用意されていて、こちらもよくできた教科書であろうというふうに思います。

また、もう一つ、正しい記述というか、正確な、公民を考える上で不可欠な概念のきちんとした説明も重要かというふうに思いました。一つはシビリアンコントロールであります。シビリアンコントロールについてきちんと説明されているのがF者でありました。なので、第1位はF者とさせていただきます。

以上です。

○矢下教育長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局、お願いをします。

（集計）

○矢下教育長　ただいまの集計結果につきましては、1位にE者を挙げた方が3名、D者を挙げた方が1名、F者を挙げた方が1名、2位にA者を挙げた方が3名、C者を挙げた方が1名、E者を挙げた方が1名でございます。結果として、1位にE者を挙げた方の数が3名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、公民についてはE者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、公民についてはE者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、公民についてはE者に仮決定いたしました。

それでは、E者の発行者名について、指導課長、お願いをします。

○指導課長　それでは、仮決定のE者についてでございます。

発行者名は、東京書籍。書名は、新しい社会　公民。

以上でございます。

○矢下教育長　ただいま議事進行中ではございますが、ここで一時中断し休憩を挟みたい

と思います。なお、再開は午後1時45分といたします。よろしくお願いをいたします。

それでは、これより休憩といたします。

（休憩・12：45～13：45）

地図

○矢下教育長　休憩前に引き続き、会議を再開いたします。続いて、地図についてご審議願います。発行者は2者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位を付けてご発言願います。

高森委員から順にお願いします。

○高森委員　科目名「社会科」・種目「地図」については、地図帳の凡例や活用法の示し方、地図の表現上の洗練度、情報量のバランス、資料や統計等の充実度という4つの視点で比較・検討し、私はB者を選びたいと思います。

推薦の理由ですが、凡例および地図の使い方については、A者は冒頭の3頁に対しB者は冒頭の5頁に亘り丁寧に説明がなされていること、また地図帳の有効な活用法が「確認しよう」「使いこなそう」「やってみよう」などの囲みで具体的に提示されている点など工夫が見て取れます。地図帳は、学習の質を高めるための「道具」としての意味合いが濃厚な教材となりますので、他の教科と異なり、まずは地図帳の活用法が具体的に示されているかどうかが重要です。いかに有効に地図帳を活用して情報を読み取るかを学習の導入部分で学ぶことは、地図帳に触れる楽しさ、地図や統計に隠された情報を発見する喜びを知る機会になると思います。

地図帳の基本となる地図の部分に関しては、たとえば世界地図ではA者の53頁とB者の47頁のヨーロッパ中央、日本地図ではA者の121頁とB者の119頁の関東地方を比較いただければ一目瞭然で、文字量・視認性ともにB者のほうが優れており、一方A者は判型が小さいため、情報量が削減・圧縮されているという印象があります。日本列島全体図に至っては、A者は見開き2頁であるのに対して、B者は判型が大きい上に折り込み3ページの大きさで展開します。

また地図帳は、単に地図から地形や地名を読み取るだけではなく、資料図・統計表などの資料編のボリュームも重要となります。A・B２者とも、世界地図では大州（だいしゅう）ごと、日本地図では地方ごとに、要所要所に詳細な資料編が組み込まれ、内容も地理の分野にとどまらず歴史の分野に及ぶなど、たいへん充実しています。ページ数だけで分量を比較すると、A者は世界27頁・日本23頁の計50頁に対し、B者は世界29頁・日本25頁の計54頁と、若干B者のほうが充実していることがわかります。

また、巻末の付録も、2者いずれも充実していますが、見せ方の工夫で、例えば、A者は、日本の火山と海溝の図が147頁、火山と地震の分布が151頁とで分けられて提示されていますが、B者は、大陸プレート・火山・地震の分布図が49頁に見開きで大きく提示されてお

り、頁をまたがずに一望できる点で評価されます。そのほか、見せ方の工夫という側面からも、B者は優れていると思います。

以上の比較・検討をふまえ、私はB者を選びました。

○矢下教育長　続いて、神田委員、お願いいたします。

○神田委員　地図は地理の学習はもとより、歴史や公民の学習でも活用するものであり、生徒が使いやすいものが求められます。また、教員が指導に活用できる資料が豊富であることなども選定の理由となります。

２者ということで同じ場面で比べてみました。私は、１位をＢ者、２位をＡ者で推したいと思います。

巻頭に地図の見方や使い方が説明されていますが、Ｂ者では、地図記号が折込みに、地図の使い方が見開き４頁で詳しく説明されています。Ａ者も同じように地図記号が折込みで、活用の仕方が２頁で説明されています。

Ｂ者はＡ４サイズで、Ａ者のＡ５版幅広サイズより縦長で紙面が大きくなっています。そのせいもあり、同じ国や地方の地図を比べると情報量がＢ者の方が多いです。また、見開きの地図の側面にも解説や簡単な資料が載せることも可能となっているのではないでしょうか。

Ｂ者は地図の色合いがくっきりと濃く、また立体的な表現でもあり、見やすくなっています。一方Ａ者は淡い色調です。地図は他の社会の分野でも活用することが多いので、見やすい、分かりやすいという点は重要な視点ではないかと思います。

両者ともに鳥瞰図が掲載されていますが、Ｂ者のものは色合いもはっきりとし、見開きで大きく扱っています。その中に書き込みもあり生徒の興味関心を引くと思います。Ａ者はインターネットの活用や学習に活用できる資料の掲載など魅力的な点も多いです。

以上、ご説明したとおりですが、私は、１位をＢ者、２位をＡ者で推したいと思います。以上です。

○矢下教育長　続いて、末廣委員、お願いいたします。

○末廣委員　地図は社会科のみならず、他の教科や更に日常生活においても使用する機会が多いと思います。それ故に地図に要求されることは、第一に使いやすさ、見やすさ、そして地図に関する情報量が多いことなどだと思います。

そのような観点から私は地図の１位にB者を推します。B者は先ず他者A者と比較して４㎝ほどタテ長になっており、これは情報量を多く記載するには大変プラスになっております。また見やすさにおいても、特に鳥瞰図では、例えばアジア州、ヨーロッパ州、北アメリカ州などにおいては立体的かつ色合いが濃くて判りやすく、また鳥瞰図に、歴史的、文化的遺産、各民族、固有の動物、農業、現代の諸施設等の絵が入っていて、一目で各地域の特徴がわかります。また情報量の多さに関しては、他者との比較でみると、各種地図の種類が多く、また索引に記載されている地名数が４３１６で、A者より約８００多くなっています。

１０７頁の本州中央部と五街道では、現代の地図に、東海道、中山道、日光道中、奥州道中、甲州道中の五街道や、北国街道越後路、越中路、伊奈街道、水戸街道などの街道、また主な関所などが組み込まれていて、歴史を学習する上でも便利な地図となっています。１８７頁の日本の領土とそのまわりの国々では、日本の排他的経済水域が明確に描かれていて、これが日本の領土であると明示しています。そして７９頁の尖閣諸島、８９頁の竹島はそれぞれ島の地図が載っており、尖閣諸島は沖縄県に、竹島は島根県に属することがはっきりとわかります。このようなことから、私は地図はB者を1位といたします。

○矢下教育長　続いて、垣内委員、お願いいたします。

○垣内委員　発行者を推薦する。

○矢下教育長　続いて、わたくしでございますが、私は、B者を推したいと思います。地図帳の活用の仕方については、B者が説明の頁数も多く、より丁寧になっております。取り上げられている地図等の種類を比較するとかなり数が多くなっています。そういうことで情報量にも差があります。しかし、情報量が多い割には、全体に見やすく感じるということで、B者を推薦いたします。以上です。

○矢下教育長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いします。

（集計）

○矢下教育長　ただいまの集計結果につきましては、1位にB者を挙げられた方が5名となっており、過半数を超えております。このことにより、地図については、B者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、地図については、B者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、地図についてはB者に仮決定いたしました。

それでは、B者の発行者名について、指導課長、お願いします。

○指導課長　それでは、仮決定のB者についてでございます。

発行者名は、帝国書院。書名は、中学校　社会科地図。

以上でございます。

数学

○矢下教育長　続いて、数学についてご審議願います。発行者は7者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位を付けてご発言願います。

神田委員から順にお願いします。

○神田委員　数学は、数や図形などの基礎的な理解と技能を身に付けること、論理的に考察する力数学的な表現を用いて表現する力などを身に付けることが大切です。また、数学

的な活動を通して学んだことを生活や学習に生かそうとすることが必要です。数学というと小学校の算数を学んで進学した１年生にとって難しい教科というイメージをもってしまうのではないでしょうか。どうしても抽象的な思考が中心になる数学の指導で、１年生の入門期の指導がどうなっているのかは重要なので比べてみました。

台東区の中学生の実態として、基礎的・基本的事項の確実な理解が図れる内容であるか、また３年生では高校進学における学力の向上に向けた指導にふさわしい教科書であることも大切な視点であると考えます。結論から申し上げますと、１位はC者、２位はF者で推したいと思います。

Ｃ者、Ｆ者は数学を学ぶ意義やねらいが明確に示されていて、「なぜ学ぶのか」が理解しやすいです。特にＣ者は、巻頭に「教科書に使い方」が、「学習にあたって」では課題解決の方法や話合いの仕方、ノートの書き方まで丁寧に掲載されています。学習指導要領の目標にもある「数学的な見方・考え方」についても複数ページを割いて具体的に説明されています。そこには小学校での学びを生かして説明がされています。数学へと滑らかに接続できるのではないでしょうか。この考え方は１章にも生かされています。「数学を勉強して何に使うことができるのか」という疑問が芽生えてくるものです。扉では、自然界や歴史、文字にも生かされていることなど興味をもってスタートができる工夫がなされています。そして、小学校での学びを振り返り、学習課題に入るという構成になっています。数学に苦手意識をもっている生徒には抵抗なく学習に取り組みことができます。本文では絵や図を使って分かりやすく説明されています。目を引いたのは側注です。ここに大切なことの解説やヒント、補充問題などが示され、戻って確認したり、章のつながりをつかんだり、自学自習に活用したりと大変便利です。

２年の連立方程式の学習のところでは、一次方程式の方法で考え、２文字を含む二元一次方程式を作ってから連立方程式を作る流れになっています。丁寧な指導が期待できます。

実際のノート例が載っていて指導に生かすこともできます。学びリンクからウェブサイトに接続できます。Ｃ者はこの教科書もＣＵＤに配慮し、見やすいです。

Ｆ者は課題解決型の学習の仕方を身に付けることに力を入れて編成しています。数学の学び方や教科書に使い方が丁寧に説明されています。扉にはこれからの学びの目標が示されていることも分かりやすさにつながっています。単元末に基本の問題や振り返りの問題、補充問題などが設定されており、自学自習なども行いやすいです。全体的に様々な点からの工夫が感じられるよい教科書です。

以上のことから、１位はC者、２位はF者で推したいと思います。

○矢下教育長　続いて、末廣委員、お願いいたします。

○末廣委員　私は数学の第2位をF者、第1位にC者を推します。今、数学では問題の答えが判ればそれでよいという教科ではありません。答えがでるそのプロセスそのものが大切です。そのためには、出会うさまざまな問題を、まず自分でよく考え、式や図などを用いて

表現することが必要になります。自分の考えを発表するときは他の人にわかり易く伝えること、更には他の人の考えをよく聞いて、自分の考えと比べて新しいことに気づいたり、自分の考えを見直したり、深めたりして問題の解決に導くこと。そしてこのプロセスをふり返って、学んだことを、整理する。また特に大切だと思った考え方や、疑問に思ったことなどは自分のことばでまとめる。数学では以上のようなプロセスを大切にします。それは数学では一つの章、あるいは一つの節でも、よく理解できないまま先に進んでしまうと、その一つの「つまづき」が積み重なって、数学は難しい、よく判らない、嫌いだということになってしまうからです。

今は他の教科でもみなそうですが学習のあり方は、自分の考えを他の人に判り易く伝える（そのためには自分の考えを、自分が明確に理解していることが前提になる）こと。そして他の人が発表するときは、常に自分の考えと比較しながらよく聞くこと、このような学習のプロセスが思考力、判断力、表現力を養うとされています。このプロセスを確実にクリヤーしていけば、判らないことがそのままになるということが避けられるはずです。

第2位のF者もこの手順を勿論踏んでいますが、全体の傾向として、基本を確実にマスターするとともに、応用や、より深い学びにも重点を置く姿勢がみられます。それは生徒自ら進んで取り組むためのコラム、ページが多くあり、例えば節初めの「深いまなび」、節末の「数学のまど」、章末の「章の問題B」、そして巻末の「大切にしたい見方・考え方」（「深い学び」をふり返ろう）、数学の自由研究（思考力、表現力を高めよう）などが、数学を得意とし、また好きな生徒にとってはよりプラスになる項目だと思います。

第1位に推すC者は、一年の[学習するにあたって]では「問題の答えを求めることだけが数学の学習ではありません。内容をただ暗記するだけでなく、学習の途中で「どうして、そうなるのかな？」などの疑問を大切にして、それを解決することができれば、数学の楽しさや良さを一層感じることができるでしょう」と数学の魅力をアピールしています。そして数学的な考え方のプロセスとして、①具体的にいくつか調べて、きまりを見つける。②知っている形にする。③知っていることと同じように考える。④ほかの条件で考える。⑤ほかの方法で考える。⑥ほかにいえることがないか考える。⑦範囲をひろげて考える。⑧特別な場合を考える。⑨単純にして考える。⑩より簡潔に表現する。⑪ほかの視点で考える。⑫分類するとあり、一つの問題をあらゆる角度から考えてゆくことが求められています。このような考え方が中学三年間で身に付けば理想的なことでしょう。またCでは、各章の最初に[その章を学習する前に]があり、その章に関連する既習内容（例えば一年なら小学校で習ったこと）のふり返りをしています。そしてその章の学習の終わりには[学習のまとめ][章の問題]があり学習をふり返り、まとめています。そして各節の要所要所のページには[もどって確認][数学的な考え方][補充問題]等の側注ががあり、生徒の注意を喚起しています。またC者は既習事項を再度取上げている箇所が１２３と他社の約40から70に比べて断然多く、また巻末には各学年通じて、前学年に学習したことをあらためてふり返る[学びのマップ]があり、ふり返りを重要視していることがよく判ります。

本区中学生の数学の学力は、残念ながら都平均よりもいくらか低くなっており、このためふり返りをしっかりとやり、確実に学習を進めてゆく方針のC者は、本区の生徒にふさわしいと思ったので１位に推したいと思います。

○矢下教育長　続いて、垣内委員、お願いいたします。

○垣内委員　数学の目標である数学の基礎的な概念や原理法則などの理解、事象の数学的な解釈、表現、数学を活用して事象を論理的に考察する力、総合的発展的に考察する力とともに数学的な表現により事象を簡潔的確に表現する力を養うという観点と、数学を生活や学習に生かそうとする態度、問題解決の過程を振り返って評価改善する態度を養うという観点から、特に課題解決を導くだけでなく検討プロセスを重視し、新たな問いに向き合う姿勢を養う点に焦点をあてて比較検討しました。

数学はほかの教科学習の基礎にもなる理論的な思考とそのプロセスを修得するものです。内容面での精選や基礎基本を着実に身につけることが重要だと考えております。

本区では、特に中学において数学の正答率が必ずしも高くないことも念頭においてシンプルでわかりやすい教科書がいいと思います。

いずれの教科書も学習の進め方やノートの取り方を示して、学習のポイントを示すなど工夫がみられており、内容的にも遜色ないのですが、C者は、特に導入部が丁寧で生徒の関心を引く具体的な問いかけがあると思います。単元ごとに「基本の問題」「章の問題」を掲載して、特に章の問題は難易度がわかるようになっていることから、教える側、生徒ともに学習到達度を理解しやすいと思われます。

また、「数学の広場」が設けられ、日常社会生活や実社会に関連する話題を掲載するなど、数学への興味を引く試みが有効です。さらにですが、すでに習ったことを再度取り上げている個所も多くて、繰り返しによる基礎基本の定着を図る本教科書はとりわけ本区の生徒にとって優しい造りになっていると思います。

各章の最初に「その章を学習する前に」として関連する既習内容を振り返って、「戻って確認」することもできるようになっています。積み重ねが重要な数学ではこういう丁寧な学習が可能となる点を評価して第1位をC者としました。

F者も、各章のゴールもわかり、問いかけで日常生活に密着した課題が盛り込まれるなど工夫されたものではありますが、シンプルで丁寧という点ではC者が一番かと思います。以上です。

○矢下教育長　続いて、わたくしでございますが、数学では、数学的な考えを身につけることが大事です。ですが、中学校になって算数から数学に変わっているので、小学校で学習してきたことにどのように接続して、対応しているかといったことにも配慮して教科書を見ました。私は、１位にC者、２位にB者をあげさせていただきます。

C者は、ページ構成は、統一的で見やすくなっています。目次もメリハリがあってみやすい。目次の後に「学習するにあたって」というページがあります。「疑問を大切にする」「問題を見出して、解決し、さらに振り返ったり深めたりするプロセスを大切にす

る」「話し合いの進め方」「工夫してノートを書くこと」の４点があげられています。これらの項目で、問題を見出して、把握する、自分の考えを持つ、話し合い、友達との考えとの比較といったプロセスを通して、数学の学習を深めていく流れをわかりやすく説明している。そのあとに続く「数学的な考え方」で小学校の学習を振り返りながら、中学校で使っていきたい数学的な考え方を、例を伴いながら、説明をしています。この「数学的な考え方」は各章の始めにある、具体的な小学校の学習の振り返りと連携をしています。さらに巻末９ページにわたり小学校の学習してきた内容が掲載されています。数学的な考え方、小学校の学習の振り返りは丁寧で、充実しているということを評価しております。

B者は、本文の文字の大きさ、ページの構成、色彩等が統一的で極めて見やすくなっております。目次も主な内容とその他が一目でわかります。「この教科書を使った数学の学び方」も、どのように学習を進めていくかを具体的に説明しながら、「主体的、対話的で深い学び」とどのように関係するのかもあわせて説明をしています。そして、本文の学習、さらに巻末の発展的な学習につなげています。小学校との接続については、７章中4章で「算数から数学へ」というページを設けて接続に配慮する。「保護者の方へ」という欄では、家庭学習での活用や小学校指導要領の関連等について直接保護者に向けて説明しております。こうしたことを評価しています。

以上のようなことからC者１位、B者２位としました。

○矢下教育長　続いて、髙森委員、お願いいたします。

○髙森委員　科目名「数学科」・種目「数学」については、導入部分のガイダンスにおいて、数学を学ぶ意義・目的・方法が示されているか、具体的な学習の進め方・学習記録のとりかた・レポートの書き方などが提示されているか、本編において、物事を筋道立てて考える論理的思考の大切さが示されているか、身の回りの問題解決にも数学的思考が役立つことが示されているか、問題、補充・発展学習、ふりかえり、まとめが適切に用意されているか、デジタル教材が効果的に活用されているか、などの視点で比較・検討し、私は1位にF者、2位にC者を選びたいと思います。

推薦の理由ですが、まず導入部分のつくりについて、F者は「大切にしたい数学の学び方」の中で、類推・帰納・演繹という数学的思考に基づいて、つかむ・見通す・解決する・ふり返る・深めるのそれぞれの過程を重視して学習を進めることが提示され、これとリンクするかたちで「ノートのつくり方」がアドバイスされています。特に、この学習スタイルを身につけるために、中学数学の最初の学習となる1年生の「整数の性質」では、10頁に第0章を設けているのも特徴的です。また、学習の記録については、「ノートのつくり方」とは別に、各学年の第1章にも「数学マイノート」のコーナーが設けられ、具体的説明が見られます。なお、各学年巻末の「数学の自由研究」では、レポートのまとめ方も学ぶことができるようになっています。

一方、C者の導入部分は、教科書で使用するアイコン類の説明文的ガイダンスとなっており、ノートの活用法の説明も、各学年巻頭6・7頁に集約するシンプルなかたちとなって

います。

小問題や章末問題では、例えば、中学2年で学習する「確率」の章末問題について、F者174・175頁とC者の170・171頁などを比較しますと、C者は類似問題を繰り返し練習する傾向が多く、一方のF者は問題のバリエーションが豊富であることが分かります。

補充学習・発展学習・ふりかえり・まとめについては、F者は、章末に「深い学び」「学びをひろげよう」のコーナーを設けて補充・発展学習を用意します。具体例を挙げれば、2年85頁に二次方程式を利用して畑に道路を作る方法、3年201頁に三平方の定理を活用して富士山頂を地上から確認できる最も遠い場所を特定する方法などなど、身の回りの問題解決に数学的思考が役立てられることを実演形式で学ぶことができます。また、各学年の巻末には、「深い学びをふり返ろう」のコーナーを設け、1年間の学習のうち、特に数学的見方・考え方で大切にしたいものをピックアップし、再掲しています。なお、教科書の巻末には折り込みで、既習事項の総まとめがあり、公式や定理もすぐさま確認できる工夫がなされているのも好感が持てます。

一方、C者は、身の回りの問題解決に数学的思考が役立てられることを学習するコラムとして「数学ライブラリー」を用意しています。F者にも見られた三平方の定理と富士山に関しては、「数学ライブラリー」ではなく本編の3年213頁に組み込み、F者とは逆の視点で、富士山山頂から見渡せる範囲を求める内容となっています。各学年巻末に版組の異なる付録的教材「自分から学ぼう」を用意しますが、こちらは発展学習の色彩が強く、総まとめ・総仕上げという位置づけではありません。F者のような公式や定理のまとめは用意されていません。

デジタル教材に関しては、F者は本編中にDマークを設置し、各学年4頁の２次元コードからアクセスできます。２次元コードは、端末のブラウザなどにブックマークしておけば、いちいち教科書の4頁を開かなくても済みます。コンテンツの数はさほど多くはないのですが、内容は、図形を実際に動かすシミュレーション、実験の映像などか見られる動画、教科横断型のリンクなど多岐に亘り、特に3年10・11頁のドミノ倒しの映像などは、生徒の関心を引く工夫がなされ着眼点としては実に優れていると思いました。

一方のC者は、問題の解き方や教科書の設問の解答などが中心で、F者のような特色あるコンテンツは少な目です。

最後に両者の特徴を最も端的に顕していると思われる、各単元における学習の進め方について付け加えたいと思います。ここでは具体的に2年生の「証明」を例に挙げ、F者116頁「証明のすすめ方」とC者117頁「証明の進め方」の単元をそれぞれ比較してみますと、F者は、どのフェイズも「考えてみよう」を基本的スタイルとして、生徒が主体的に「学び、そして気付く」ことを促すのに対して、C者は「考える」「整理する」「結びつける」という表現で、課題を解決するための模範的な視点を「教える」ことに重点を置いていることが分かります。これは、「証明」以外の他の単元でも同様の傾向が見て取れます。例題の解を導く最短ルートを最初から教えるのがC者、例題から考えさせ思考の過程を生

徒自身が納得することを重視するするのがF者であるという印象をもちました。

以上の比較・検討をふまえ、私は1位にF者、2位にC者を選びました。。

○矢下教育長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いします。

（集計）

ただいまの集計結果につきましては、1位にC者を挙げられた方が4名、F者を挙げられた方が1名、2位にF者を挙げられた方が3名、B者を挙げられた方が1名、C者を挙げられた方が1名となっております。

結果として、1位にC者を挙げた方の数が4名と、最も多く過半数を超えております。このことにより、数学については、C者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、数学については、C者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、数学についてはC者に仮決定いたしました。

それでは、C者の発行者名について、指導課長、お願いします。

○指導課長　それでは、仮決定のC者についてでございます。

発行者名は、教育出版。書名は、中学数学。

以上でございます。

理科

○矢下教育長　続いて、理科についてご審議願います。発行者は5者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位を付けてご発言願います。

末廣委員から順にお願いします。

○末廣委員　私は、理科はC者を２位、A者を１位に推します。まずC者は理科の学習の進め方として、学習の見通しをもとう、課題をつかもう、観察や実験をしよう、結果をもとに考えようとあります。そして「理科室のきまり」があって、実験の心構え、火を扱うときの注意、地震のときの注意と安全のための注意を喚起する内容が続いています。

また、単元の最初には、「これまでに学習したこと」、「これから学習すること」が見開き２頁に示されていて学習の見通しが判り易いようになっています。本文中には「やってみよう・思い出そう・つながることは・安全・注意・コツ」などのコラムが適宜入っているのがいいですね。単元の終わりには、探究活動、まとめ、単元末問題、読解力問題があり、生徒自らの学習に活用できるようになっています。

１位のA者ですが、まず一年生の最初４頁に「ある中学生の一日を見てみると」とあって、一日を時間ごとに追って、その生活の中でふとした瞬間に気になることはないか疑問

が示されていて、その中に科学が隠されているかもしれない、としています。日常生活のなかにある科学を気づかせる面白い企画です。「科学で調べていこう」では、問題発見、課題、仮説、構想、観察、実験、分析解釈、検討改善、結論、ふり返り、活用として学習の流れが示されています。そしてポイントになる考察は「ここをおさえよう」として、実験の目的は何だったか、結果と仮説、予想はあっているかをチェックして、目的は解決できたか、言葉でまとめようとあります。

また[科学はこんなに便利]では「不思議な現象も解明できる」、「だれでも再現できる」などで科学の面白さを説明して理科への興味や関心を持たせる工夫をしています。またA者でも、考えが異なったら考えを言葉にして議論しよう。伝わる言葉にしようとして、みんなの前で発表するときも、順序立てて、論理的に簡潔に話そうとあり、考察した自分の考えを言葉にし、論理的に話すことを目標としています。これは従来の日本の教育では希薄であった点であり、他者もそうですが、特にA者はこの方針が強くでています。

またA者も、「理科室のきまり」を設け、理科室の心得として、みんなが安全に、安心して実験ができるように心がける。やってはいけないことの三原則があるとして、実験前・実験中・実験後の注意事項を細かく示しています。また事故のときの応急処置、実験中に地震が起きたときどうすればいいかなどの説明もあります。

またコラムとしては器具の使い方などの[基礎操作]。[Before＆After]では章の初めと末に問いかけがあって、他にも[どこでも科学][科学のミカタ][これまでに学んだこと][学んだことをチェックしよう][発展]など、観察・実験のときの安全のための注意事項が６つほど、例えば保護眼鏡を使用するときは眼鏡のマークがつきます。このようにA者も安全に関しては十分な配慮が認められます。また[つながる科学]では「科学の歴史」、「自然のふしぎ」、「防災と科学」などが扱われていて、[From Japan　世界につながる科学]では、日本の科学研究の成果が世界と密接につながっていることが、具体的な研究の取材と、研究者、技術者へのインタビューを通して紹介されています。これらは生徒たちへの科学の素晴らしさを直接アピールする題材ですし、このことをキッカケとして将来の「科学技術の日本」を背負う人材がでてくることを期待するのも楽しみです。

よってA者を１位とします。

○矢下教育長　続いて、垣内委員、お願いいたします。

○垣内委員　理科の大きな目標は自然の事物・現象を科学的に探究することが大きな目標であると理解しております。そのうえで、自然事象について理解を深めるための基本的な技能を身につけ、観察実験などを通して科学的に探究する力を養い、自然事象に進んで関わり科学的に探求しようとする態度を養うという観点から比較検討を行いました。

内容、スタイル、デジタル資料の活用等各者ともに工夫が凝らされていて、拮抗していると思われるのですが、科学的な探求への配慮という点から、第１位にB者、第２位A者を推したいと思います。第１位に推したB者ですが、例えば地震についての説明にあたっては、プレートテクトニクスという学説で事象をよく説明できている記述になっていると

思います。こういった学説と事実を峻別して、謙虚に自然に向き合うことは科学的な探求の基本となると思います。また、教科書の構成も、巻頭で探求の過程を示し、単元末の「学習のまとめ」において全体の確認や整理ができるようになっています。さらに、「つながる学び」というマークによって、小学校や下学年などのすでに習った内容を振り返ることができるようになっていますし、同一学年内の別単元での用語を確認できる「つながるページ」マークなどの工夫もあって良いと思います。解説も丁寧です。

A者もよくできた教科書で、特に導入部分は何をするのか明確に示されているのが特に評価できます。ですが、観察や実験を通して仮説を導き、この仮説を検証することで真実に迫るという科学のエッセンスをなす謙虚な姿勢がみられる点でB者がより優れていると思いますので、B者を推したいと思います。

○矢下教育長　続いて、わたくしですが、理科は、理科的な考え方・学び方を授業で学ぶことから将来にわたってどのように示しているのか、生徒に何を身につけてもらいたいのか、教科書の各単元でどのように具体化しているのかという点を中心に見ています。

この点と、理科的な考え方を実践する観察・実験の取り上げ方やその数、教科書の大きさや重さといった使いやすさから、１位にA者、２位にC者を推薦したいと思います。

A者は、目次の前に探求の流れと教科書の使い方として「科学で調べていこう」で科学的な考え方の流れを示して、それが、この教科書ではどうなっているか、さらに、検証に必要な「考察はここでおさえよう」で実験の目的や結果の判断について取り上げています。

「科学はこんなに便利」で、この科目を学ぶ意義を、学習を進めていく上で、「考えが異なったら、考えを言葉にして議論しよう」ということで「議論の進め方」、「議論のポイント」を示して、さらに観察や実験の結果を発表するために、「伝わる言葉にしよう。発表の仕方」として明らかにしています。こうした科学的な考え方、そのための教科書の使い方、さらに、学習の進め方、結果の伝え方を目次の前で十分に示している。理科で何を学び、何をしていくのかが非常にわかりやすくなっております。

C者は、目次のあとに、「理科の学習の進め方」があって、「この教科書を使って、自然の事物・現象を科学的に探求していこう」としています。その内容は、「学習の見通しをもとう」で、各単元の初めにある文章を読んで、その単元のテーマをとらえることとされていて、１で課題をつかもう、２で観察や実験をしよう、３で結果をもとに考えよう、という流れが示されています。１の課題をつかもうは、①問題の発見、②学習の課題に、２の観察や実験をしようは、③予想、計画、④観察・実験、⑤結果に、３の結果をもとに考えようでは、⑥考察、⑦解説などに対応して、取り組むべき方向がわかりやく示されています。こうしたやり方で理科的な考え方を身につける工夫がされていることを感じました。以上のことから、１位にA者、２位にC者といたします。

○矢下教育長　続いて、髙森委員、お願いいたします。

○髙森委員　科目名「理科」・種目「理科」については、理科学習の意義や方法についての概説、観察や実験時の安全面への配慮、器具・薬品の使用法の説明、単元毎のまとめや

応用の工夫、資料類やデジタル教材の充実度などに着目しつつ、化学・生物学・物理学・地球科学の各分野の学習内容を比較いたしました。検討の結果、私は1位にA者、2位にD者を選びたいと思います。

導入部分のガイダンスについて、今回選考に上がった全5者のうち、最も充実していたのは私が2位に選んだD者です。中学理科を最初に学ぶ1年生に対して「理科のトリセツ」が16ページにも亘って用意され、「なぜ学ぶか」「何を学ぶか」「学ぶとどうなるか」「どうやって学ぶか」の4本立てて組み立てられ、特に「どうやって学ぶか」についてはガイダンスの半分にあたる8ページを使って、詳述しています。これに対して、A者は、4ページ程度の分量にとどまり、内容も、D者の表現を借りるならば、「どうやって学ぶか」「学ぶとどうなるか」の2点の説明に始終しております。生徒の興味関心をかき立て、学習に向かう意欲をかきたてるのは、D者のほうではないかと思いました。台東区での当該教科の図書の採否はわかりませんが、D者が採用されなかった場合でも、生徒の学習意欲向上のために各教員には参考にして欲しい部分ではあります。

なお、「どうやって学ぶか」の部分で、私が着目したいのは、科学における探求の進め方、つまり科学的アプローチの方法についての概説です。他の発行者ではそれぞれのプロセスに出入りがあるのですが、A者・D者は、それらの全てのプロセスが過不足なく網羅されております。具体的に、A者では1年生の2・3頁に「問題発見」「課題」「仮説」「構想」「観察・実験」「分析・解釈」「検討・改善」「表現」「振り返り」「活用」の順で、D者では1年生6・7頁に「気づき」「課題設定」「仮説」「計画」「観察・実験」「結果」「考察」「振り返り」「発表」「新たな気づき」の順に整序され、ほぼ同内容の説明となっています。このプロセスは、教科書の本編中にもバナーやアイコンを駆使して提示され、自分たちの学習や活動が、今どの段階にあるかが分かるように工夫されています。

観察や実験時の安全面への配慮については、A者の1年生では8・9頁に、D者は10頁に記載があります。特にA者は、実験中の事故対応も図入りで説明があり、直感的にわかりやすい工夫になっています。一方、D者は文字情報のみとなります。また、A者は、本編に安全のための注意事項を換気・保護眼鏡などのアイコンで表示し、D者はストップのアイコンやデジタル教材で注意喚起を促しています。なおD者の場合、デジタル教材は、事前に見て覚えておかなければならず、実験中では確認する余裕はないと思います。A者は更に2年生以降でも、巻末資料で「理科室のきまり」「主な薬品のとりあつかいの注意」など安全面の確認事項を再掲している点で、好感が持てます。

器具・薬品の使用法の説明については、A者・D者とも、1年生では顕微鏡やガスバーナーなどの使用法は本編に、その他は巻末にまとめられております。なお、A者に関しては、顕微鏡やガスバーナーの取り扱い説明が、2年生の巻末にも集約され、復習できるるようになっているのは魅力的です。

単元毎のまとめや応用、資料類やデジタル教材について、今回選考に上がった全5者のうち、最も充実していたのはA者です。特に各章毎の「章末」のまとめ、単元毎に用意さ

れた「学習内容の整理」はよくまとめられ、図版を多用し、キーワードの出典頁も明記されるなど、他者にない工夫が見られます。また、問題集となる「確かめと応用」も、中間・期末考査のテストを想定したようなつくりになっています。また、A者のデジタル教材は、外部リンクばかりに頼るのではなく、発行者独自で作成したコンテンツが用意されています。

紙媒体の教科書ではなく、デジタル教材の活用を前提として編集されたのが、D者です。D者は、教科書のCan-Do List自己チェックの2次元コードから、デジタル教材へとアクセスすることができ、単元のまとめや応用問題も、このデジタル教材だけに用意されています。このことは教科書の冊子本体だけを比較していたら、気付かない点でもあります。こうしたスタイルの教科書の登場は、近い将来、紙媒体での教科書づくりの時代は終わりを告げ、デジタル教材メインの時代へと移行するのではないかという予感さえ抱かせるのですが、インターネット環境が必須となるデジタル学習は、万が一の事態に即応できないことも予測しなければならず、デジタル偏重に陥るリスクを常に念頭に置いて、いかなる状況下においても一定の水準の教育活動が展開できるよう柔軟な体制を構築しておく必要はあります。D者のデジタル教材は、そうした不安定さをはらんでることは認識しておかなければならないでしょう。やはり、今日の環境下では、しばらくはA者のように、デジタル教材はあくまでも補助教材として活用するにとどめるのが、堅実だとは思います。

なお、学習の発展性について、A者は「つながる科学」、D者は「学びを日常にいかしたら」のコーナーを設け、学習の拡張・発展・展望について実例を挙げて紹介しています。両者ともガイダンスで触れた「学ぶとどうなるか」の具体例となります。

最後に、内容について、両者の違いで気付いた点を二、三指摘したいと思います。

化学の分野のうち、2・3年生で学習する化学変化について、参考資料として活用される元素周期表が、A者では2年生10・11頁、3年生7頁に掲載され、そこにはランタノイドとアクチノイドも全て網羅され、また2年80頁の113番元素ニホニウムの説明へ誘導する工夫もみられます。一方のD者は、2年生の巻末に周期表が一回掲載されるだけで、3年生に繋がらず、ランタノイドとアクチノイドは示されません。なお、D者デジタル教材の「ガクトイオンカード」のアプリは、化学反応式をアプリで操作できる学習として用意され、注目に値します。

地学の分野の気象学の領域について、恐らく中学理科で最初につまづく単元が、2年生で学習する飽和水蒸気量の周辺ではないかと思います。数学的な公式の活用が求められる上に、専門用語の意味するところの理解、グラフや表の読み取りができないと、解を求めることが難しいからです。例えば、「気温A℃、湿度B％の空気中で、気温をC℃まで下げたときに生ずる水滴の量を求めよ」という問題があったとすると、答えを求めるために「気温A℃・湿度B％の時の空気中の水蒸気量を湿度の公式を使った方程式で求め、そこから気温C℃の飽和水蒸気量を引く」という作業が必要になります。そこでは、条件として示された「気温と飽和水蒸気量」の表で、情報を読み取る力も必要となります。このあた

りの説明を丁寧に行っているのがA者2年192～194頁です。B者は234・235頁の見開きで解説しますが、デジタル教材で補っても、理解の深まり、応用の広がりには繋がりにくいと思います。

また、地球科学のうち地震学の領域で興味深く感じたのは、震源分布の資料の見せ方についてです。D者は、1年241頁に平面図と断面図を活用して、震源の広さと深さを提示し、併せてデジタル教材を活用し、PDFデータを透明の素材に印刷して立体模型を実際に工作して3次元の展開図を確認する仕組みになっています。一方、A者は、立体視のテクニックを使って、視覚的に震源分布をイメージできる工夫がなされています。立体視には、若干訓練が必要ですが、専用のスコープを自作する方法もありますので、生徒の関心を引き寄せる上では興味深い取り組みだと感じました。また、立体視は、ぜひ地理の学習などでも導入してほしいところです。

はなはだ余談が過ぎましたが、以上の比較・検討をふまえ、私は1位にA者、2位にD者を選びました。

○矢下教育長　続いて、神田委員、お願いいたします。

○神田委員　理科の学習は、見通しをもって観察や実験を行うことを通して、自然の事象や現象を科学的に探究する力を付けることです。東京都などでも１０年程前から理科教育の充実に力を入れてきました。理科観察・実験の充実、関心・意欲の向上、指導力の向上、基礎学力 の定着を図ることが大切だと言われています。台東区でも理科の学力の定着に力を入れてきました。理科嫌いの生徒を少なくし、興味をもって学習の取り組めるという視点が大切です。他には実験や観察の指導がしやすい、実験や観察の指導では実験の仕方や安全面での指導が十分なされているかも重要です。科学的に探究する力を付けることができる、思考力・判断力・表現力の育成にも力を入れているかなどという視点から比べさせていただきました。

私は、１位はＡ者、２位にＣ者を推したいと思います。

Ａ者は、新学習指導要領に示された趣旨を盛り込んで構成された新しい感覚の教科書です。本文、全編にわたって探究型の学習を意識して編成されています。主体的な学びとして「問題発見」「レッツ！スタート」、対話的な学びの具体例、深い学びに導く「科学の見方」や「学びを生かして考えよう」などのコーナーやコラムも充実しています。

実験や観察の指導については、絵や図、写真も豊富で、ステップを踏んで分かりやすく説明されています。結果の記録の仕方、レポートの書き方などもノート例を示されています。

実験や観察の仕方も丁寧な説明があり、安全面での記述も巻頭や巻中に適切になされています。

最後に、理科好きな生徒にするために興味関心をもたせるための工夫です。Ａ者の教科書の表紙の美しい写真と斬新なデザインには心を奪われました。表紙だけでなく、紙面の写真やイラストなども色彩も豊かで美しいです。特に理科は自然や植物・動物などを扱

うのでビジュアルは大切です。文字の大きさにも工夫があり、レイアウトが魅力的です。Ａ４版の変形ですが、縦長の形状ですが、机に置きやすくしかも内容が充実しているところがいいです。ビジュアルだけでなく、文章は短めで簡潔な表現が特徴です。分かりやすいということも生徒の意欲的な学びにつながります。

２位のＣ者ですが、図版の使い方もよく、全体的によくまとまっていますが、サイズの影響もあり、やや資料や写真が小さくなっています。

以上のことを総合的に判断し、１位はＡ者、２位にＣ者を推したいと思います。

○矢下教育長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いします。

（集計）

ただいまの集計結果につきましては、一位にA者を挙げられた方が4名、B者を挙げられた方が１名、二位にC者を挙げられた方が３名、A者を挙げられた方が１名、D者を挙げられた方が１名となっております。

結果として、一位にA者を挙げた方の数が4名と、最も多く過半数を超えております。このことにより、理科については、A者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、理科については、A者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、理科についてはA者に仮決定いたしました。

それでは、A者の発行者名について、指導課長、お願いします。

○指導課長　それでは、仮決定のA者についてでございます。

発行者名は、東京書籍。書名は、新しい科学。

以上でございます。

音楽一般

○矢下教育長　続いて、音楽一般についてご審議願います。発行者は2者となっております。それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位を付けてご発言願います。

垣内委員から順にお願いします。

○垣内委員　音楽一般は、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる能力を育成することが目標と理解しております。その為、音楽の多様性への理解を養い必要な技能を身につけ、音楽表現や音楽の美しさを味わえるようにすること、ひいては豊かな情操につながることが重要だと思っております。

いずれの教科書もわかりやすい導入部分、学習の狙いや流れを用意していますが、A者では、まず情報量が非常に豊富で、ページ数も多く、歌唱、創作、鑑賞教材いずれもB者よりも多く、丁寧な説明ぶりとなっています。これにより、生徒の関心や興味に寄り添っ

た学習が可能となると思われます。さらに、巻末の楽典事項「音楽の約束」などは基礎的基本的な内容の確認や反復学習が可能となるもので、評価できます。

この点から、私はA者を第一に推薦したいと思います。

○矢下教育長　続いて、わたくしでございますが、音楽一般の音楽では、A者を推薦します。

「伝統をつなぐ」では、わからないことは、おもしろさにつながる一歩という文を載せています。学校で学ぶ教科は様々あって必ずしも全員が強く関心を持っていない科目でも意味があることを説いています。おもしろい教科書の始まりだと思いました。続いて、「音楽ってなんだろう」というページがあります。１年の教科書であれば、音楽を単に好き嫌いで判断するのではなく、別の軸を持つことで音楽だけではなく、人のこと、ことばのことを尊重できるのではないか、といった問いかけがあります。この問いかけが、音楽から始まる様々な可能性を示していていいなと思っています。国歌「君が代」については、他の音楽の教科書にあるように歌詞の意味の説明だけをするのではなく、国歌というものの国際的儀礼としての説明もあって感心しました。

以上からA者を推させていただきます。

○矢下教育長　続いて、髙森委員、お願いいたします。

○髙森委員　科目名「音楽科」・種目「音楽一般」については、一点目として、導入部分のガイダンスで音楽を学ぶ意義・目的が明記されているか、年間を通じた学習内容の見通しが概観できるかについて、二点目は、発声法、旋律法、指揮法、楽譜記号の解説などの学習資料の充実度、三点目は、使用された楽曲・曲目のジャンル別バランスという三つの視点で比較・検討し、私は1位にA者、2位にB者を選びたいと思います。

推薦の理由ですが、一点目の音楽を学ぶ意義・目的、学習内容の見通しに関して、A者は教科書冒頭4・5頁の「音楽ってなんだろう？」、および目次を挟んで8・9頁の「学習内容」において、それぞれ詳述され、教科書がどのようなコンセプトのもとで編集されたかを読み取ることができる点で評価できます。一方のB者では、4・5頁の「学びのユニット」において目次に統合させるかたちで年間の学習内容が提示されますが、音楽を学ぶ意義・目的についての記述は、管見の限り見当たりません。

二点目の学習資料の充実度については、A者は発声、リズム、指揮、音楽の構成要素などのカテゴリーごとに実践的な学びのプログラムが設定されています。特に興味深いのは、1年20頁に男女ともに迎える変声期についての学習が設けられている点で、思春期を迎えた生徒たちの学びにおいて、この着眼点は大切だと思います。一方、B者は、多彩な学習資料を用意してはいますが、おのおのが系統立てられていないため、学習者はポイントを絞りにくいのではないかと思われます。

三点目の楽曲のジャンル構成については、2者とも童謡、唱歌、交響曲、映画音楽、歌謡曲、雅楽、民謡、日本の古典音楽など幅広いジャンルから選曲がなされ、それぞれ学習のめあてに応じて配当されていることが理解できます。特にB者は、A者に比べて曲目の数

が多く、生徒たちに様々な音楽ジャンルに触れる機会を提供するばかりでなく、選択肢が豊富にあるため、教師が年間を通して意図的かつ計画的に授業を組み立てやすい構成になっていると思われます。

以上の比較・検討をふまえ、私は1位にA者、2位にB者を選びました。

○矢下教育長　続いて、神田委員、お願いいたします。

○神田委員　音楽は表現と鑑賞などの活動を通して学習することになると思います。そして、学んだことを生かし、生活や社会の中で音楽を楽しみ、親しんでいく態度を育成することが大切かと思います。そこで、このような視点で教科書を選びました。

私は、Ａ者を推したいと思います。

Ａ者、Ｂ者ともに歌唱、創作、鑑賞がバランスよく配置されていると思います。古典的な曲と新しい曲、日本の曲と海外の曲なども多様に取り上げられています。

Ａ者は各教材の目標が明確で、指導者も生徒も学びやすいと思います。「深めよう！音楽」では思考力の育成を意識した発問や活動が掲載されています。また、歌唱、創作、鑑賞の内容とその系統については発達段階を考慮した無理のないものとなっています。取り上げている教材数は歌唱、創作、鑑賞ともにＡ者が多いように思われます。

音楽を作ったり、指揮をしたりする活動が多く盛り込まれ、音楽を楽しみながら学ぶことができると思います。

Ｂ者は、学びのユニットで分かりますが、教材を比較する活動が多く設定されています。共通する部分や違いを感じる活動を行うことで論理的思考力の育成を図ることを狙っている点が評価できます。以上です。

○矢下教育長　続いて、末廣委員、お願いをいたします。

○末廣委員　私は、音楽一般はA者を１位とします。A者はまず「音楽によって生活を明るく豊かなものにし、音楽に親しんでいこう」とし、学習内容は表現（歌唱・創作）と鑑賞とに分け、表現は学習内容、各教材を思考力、判断力、表現力、知識、技能と関連づけて示していて、また鑑賞では曲や演奏に対する評価、社会における意味、役割、表現の共通性、固有性について、１年は自分なりに考え、味わって聴くとし、２年、３年はこれらについて考え味わって聴く、として段階を設けています。また鑑賞する上では、曲想、音楽の構造、背景となる文化、歴史、日本やアジアの音楽の特徴、多様性などの知識が必要であるとしています。

また１年のMyVoice、自分の歌声をみつけようでは、姿勢と呼吸、歌声づくり、コラムで声の出る仕組みがあり、また変声期では、変声期に歌声はどうなるの、どうして声を出しづらいの、などこの時期の中学生にとって切実な問題が判り易く説明されています。また[２、３上]では自分の思いを歌声にのせよう、鼻濁音があり、［２、３下］では豊かな歌声で、気持ちをこめて歌おうでは「気持ちや意図を伝えるという点においては、歌声と話し声は同じです。」とあり、歌うときの大切な心構えが示されています。

また全学年通じてあるコラム、指揮をしてみよう、特集、では生活や社会の中の音楽、

社会を映し出す音楽、ルールを守って音楽を楽しもうなど。［資料］では音楽を形づくっている要素、音楽の約束、また（１年）（２・３上）では「リズムを楽しもう」などがあります。

また全学年にわたって、日本の伝統芸能、雅楽、能、謡、歌舞伎、長唄、文楽、義太夫節などが、更にはオペラ「アイーダ」等が美しい写真と共に紹介されています。更には郷土の祭りや芸能、郷土に伝わる民謡、世界諸民族の音楽、ポピュラー音楽など、いずれも音楽に関する教材として魅力的で楽しいものになっています。

また歌唱、創作、鑑賞の教材は他社より多く掲載されて充実しており、A者を１位として推します。

○矢下教育長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局、お願いをします。

（集計）

○矢下教育長　それでは、ただいまの集計結果につきましては、1位にA者を挙げた方が5名、2位にB者を挙げた方が1名でございます。結果として、1位にA者を挙げた方が5名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、音楽一般についてはA者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、音楽一般についてはA者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございますか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、音楽一般についてはA者に仮決定いたしました。

それでは、A者の発行者名について、指導課長、お願いします。

指導課長。

○指導課長　それでは、仮決定のA者についてでございます。

発行者名は、教育芸術社。書名は、中学生の音楽。

以上でございます。

器楽合奏

○矢下教育長　続いて、器楽合奏についてご審議願います。発行者は2者となっております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について順位をつけてご発言願います。

私から順に発言をさせていただきます。

演奏に関わるというのは、情操を豊かにすること、感性を利発すること、ひいては楽しく生きていくためには極めて大切なことであるというふうには考えております。この教科書2冊はどちらもある意味見やすく理解しやすいと感じましたが、楽器のほうは演奏すること、そういったことに関わるとなりますと、人には得手・不得手があるので少しでも抵

抗なくトライをしてもらいたいなというふうに思っております。そういうふうに考えますと、何か本文に入りやすそうな楽しそうで手に取りやすい、それが演奏につながってもらいたいという気持ちを込めて、私はB者を推薦させていただきたいと思います。

以上でございます。

続いて、高森委員、お願いをいたします。

○高森委員　科目名「音楽科」・種目「器楽合奏」については、一つ目は、教科書の導入で器楽を学ぶ意義がどのように示されているか、二つ目は、具体的な楽器の特色・奏法についてどのような記述がなされているか、三つ目は、実践的な楽器による表現法についてどのような記述がされているか、という三つの視点で比較・検討し、私は1位にB者、2位にA者を選びたいと思います。

まず、導入部分の比較では、B者では4・5頁の見開きの「音楽って何だろう」の中で、人類と大自然とを結びつける楽器の価値・存在理由（レーゾンデートル）・魅力について語り、8・9頁見開きでは、目次とは別に教科書の学習内容が明示されています。楽器のもつ意義に気付かせ、学習の道筋を見通せる、こうした工夫はA者にはない特色と言えます。

具体的な楽器の特色・奏法についての見せ方の工夫では、2者ともに写真入りで丁寧に解説されており遜色はないのですが、例えば中学生が最も活用するであろうリコーダーの説明では、B者は18頁に扱いのよくない事例が示されるなど、A者にはない特徴がみられます。なお、太鼓以外の打楽器について、A者は98頁に簡単に紹介するに止まるのに対して、B者は70～74頁にわたって使い方にも言及するなど充実しています。

最後に、実践的な演奏の内容・表現法について、リコーダーを例に比較すると、B者はLESSON1～3というように段階を追って展開するのに対して、A者はタンギングやサミングなどテクニック主体の学習になっているという特色がありますが、学習のステップをふむかたちのB者は、教員にとっても学習者にとっても取り組みやすいという利点があるのではないかと思います。

以上の比較・検討をふまえ、私は1位にB者、2位にA者を選びました。

○矢下教育長　続いて、神田委員、お願いをいたします。

○神田委員　器楽指導は自分が演奏したり、様々な器楽についてその音色を感じるなどして知識を身に付けたりすることが大切かと思います。演奏する楽器に関しては演奏のポイントなどが分かりやすく示されているかということ、演奏が難しい楽器については写真やイラストなどで分かりやすく紹介されているかということが大切なってくると思います。

結論から申し上げますと、私はＡ者を推します。

Ａ者、Ｂ者ともに発達に合わせた演奏しやすい曲が採用されていて使いやすい教科書であると思います。

Ａ者は楽器の演奏について、持ち方、指使いなどが大きな写真、または部分をアップにした写真や図で分かりやすく説明されています。また、「何が同じで、何が違う？」というコーナーで「吹く楽器」と「弾く楽器」の共通性と固有性について比較しながら考え

させ、考えを記入することもできる工夫がされています。

以上のことから、私は、１位にＡ者に推したいと思います。

○矢下教育長　続いて、末廣委員、お願いいたします。

○末廣委員　私は、器楽はB者を推薦いたします。A者とB者、いろいろと比べてみて、それほどの違いはあまり感じられなかったのですが、とにかく今の子供たちはもう小学校時代からいわゆる器楽を扱っている生徒が多いと思います。特にリコーダーあたりは触れたことがある生徒が非常に多いのではないかと思います。リコーダー、あるいはギターなど、いずれにせよ昔に比べると今の子供たちは器楽を扱うチャンスが非常にあるということで、そういう意味では音楽に親しんでいる、より親しんでいるということだと思います。

特に器楽を扱う場合には、その音楽を形づくっている、かたどっている要素、例えば音色とかリズム、速度、旋律、強弱、形式構成と、そういうものがいろいろと混じって一つの曲ができてくるわけですけれども、それが音楽と器楽との共通点もあると思います。そういうものも踏まえていわゆる器楽を楽しむということ、それでより音楽に親しむということで、2者にそれほど差はないのですが、B者のいいところはその楽器の種類の紹介が非常に多い、特に打楽器に関してはA者の倍ぐらい紹介されています。世界にはいろいろ楽器があるのだということを子供たちが分かることはいいことだと思います。そういうことで、全体的に見まして、器楽はB者を推薦いたします。

○矢下教育長　続いて、垣内委員、お願いをいたします。

○垣内委員　器楽に関しましては、楽器、特にその音楽と連動しながら実際の音を出すというスキルとその音楽の多様性というものを学ぶのではないだろうかというふうに思っております。結果的に、A者、B者、いずれもよくできた教科書だと思いますが、私はB者を第1位に推薦したいと思っております。

いずれも、内容、スタイル共に、工夫がなされた非常に良い教科書ではないかというふうに思います。学習の狙いとかまとめの曲、それから各楽器の基礎的な奏法などについて非常に分かりやすく提示されている、また、発達段階に合わせた演奏しやすい曲が教材として使用されているという点はいずれも同じなのですけれども、B者のほうが、例えばイントロダクションのところがピアノで語るということはどういうことなのか、楽器が自分の生活の中でどういう意味があるのかとか、それからコミュニケーションの一部であるといったような、4頁から5頁ですかね、様々なその意味づけというものが語られた後にこの学びの中に入っていくというようなイントロダクションが非常に好感が持てるというふうに思いました。ハードルが低い導入部分というふうに言っていいかと思います。

また、情報量も非常に豊富でして、各楽器の基本的な姿勢、それから各部の名称なども細かく示しておりますし、非常に多様な楽器が紹介されていると。バンド活動といったようなことも含めて、今の生徒さんたちの多様な興味に応えられる、そういった内容になっているのではないかと思いましたので、B者を第1位に推薦いたします。

以上です。

○矢下教育長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局、お願いをいたします。

（集計）

○矢下教育長　ただいまの集計結果につきましては、1位にB者を挙げられた方が4名、A者を挙げられた方が1名、2位にA者を挙げた方が1名でございます。結果として、1位にB者を挙げた方の数が4名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、器楽合奏についてはB者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、器楽合奏につきましてはB者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、器楽合奏についてはB者に仮決定いたしました。

それでは、B者の発行者名について、指導課長、お願いをいたします。

指導課長。

○指導課長　それでは、仮決定のB者についてでございます。

発行者名は、教育芸術社。書名は、中学生の器楽。

以上でございます。

美術

○矢下教育長　続いて、美術についてご審議願います。発行者は3者となっております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について順位をつけてご発言を願います。

高森委員から順にお願いをします。

○高森委員　科目名「美術科」・種目「美術」については、ガイダンスの導入部分で美術を学ぶ意義が明確に示されているか、学習の進め方が3年間を通して体系化されているか、各単元の学びの目標設定が妥当か、教材のバリエーションや生徒作品の具体例が豊富か、デジタル教材が適切に活用されているか、学習者の興味・関心引き出す工夫がみられるか、技法・図法など学びを支える資料が充実しているか、といった複眼的視点で比較・検討し、私はC者を1位、A者を2位に選びたいと思います。

まず第一印象として感じたのは、この3者のうち、私が2位に推薦するA者においては、紙面構成の美的センスが秀逸であるという点でした。教材の配置や見せ方そのものが芸術的で、教科書というよりも、写真集や雑誌のデザインを取り入れたような構成になっており、手に取る楽しみがあります。ただし、教科書としてはいささか馴染まないのではないかという気持ちも致します。一方、C者は、従来の教科書に見られるスタンダードな構成でインパクトにはやや欠けますが、奇をてらうことなく落ち着いた雰囲気を醸し出しており、いかにも教科書らしい作りだと思いました。美術の教科書ですから、A者もいいのか

もしれませんが、採択に当たっては、単なる見た目ではなく、やはり内容で優劣を検討すべきであると思います。

教科書の導入部分に関しては、2者とも数ページを割いて、美術という教科の存在価値、学習の意義と道筋について丁寧に説明がなされています。また、各題材の冒頭には、「学習の目標」あるいは「学びの目標」といった目当てが提示され、観察・表現の態度や視点を意識させる工夫がみられます。この部分に関しては、A・B・C3者とも遜色はありません。

とりわけC者が優れていると評したいのは、他教科とのリンクです。今回、用意された3者のうち、2者は、道徳科の学習と関連する題材に限りリンクが貼られているのですが、唯一C者だけが、国語・数学・理科・社会・技術・家庭・道徳・特別活動（学級活動）など複数の教科との関連性が、ほぼすべての偶数ページ下欄に提示されているという点です。

美意識ないし美的感性は、美術だけではなく、多くの教科の底流に横たわる学習でもあるという意識をもって、本書が編集されているということは、すばらしいことだと思います。

なお、デジタル教材の活用について、C者は本編・資料編ともに偶数ページの標題近くのほぼすべての箇所に2次元コードが示され、必要に応じてデジタル教材へアクセスできるようになっています。特に、巻末資料の図法や技法に関しては、動画で実際の動作・作業の様子が見られるデジタル教材は、効果的な活用が期待されます。一方、A者は2次元コードの活用が少ないばかりでなく、実際にスキャンしようとすると、2次元コードが小さい上にコート紙の反射に阻害され、識別に困難をきたすという症状が発生しており、これでは、授業に支障がでるのではないかと感じました。これは大きなマイナスポイントです。

以上の比較・検討をふまえ、私はC者を1位、A者を2位に選びました。

○矢下教育長　続いて、神田委員、お願いをいたします。

○神田委員　美術は、表現と鑑賞の活動が中心となる学習です。表現では、創造的な表現方法を工夫させるために多くの質の高い作品や身近な生徒作品が多く掲載されていることが大切かと思います。また、発想を豊かにできるような指導のヒントが掲載されているかなどを考えました。また、鑑賞では、生徒の見方・感じ方を広げることのできる美術作品を掲載しているかなどが重要になるかと思います。そして、美術を愛好し感性を豊かにしていくことのできる情操教育につながるものであることが大切かと思います。このような視点で教科書を見させていただきました。結論から言いますと、私は、1位をA者、2位をB者で推したいと思います。

美術の教科書は、やはり写真や絵の色彩やデザインが美しいことが挙げられます。A者は表紙がまず美しいです。3冊が、洋画、日本画、建築とそれぞれ違う分野であり、世界や日本を代表する名作が紙面いっぱいに美しく掲載されていて目を引きました。もちろん表紙だけではなく、中の写真や絵の色彩やデザイン性がすぐれていると思いました。学びの目標が明確に示されておりまして、生徒も意識して取り組めるし、教員も指導に生かすことができると思います。

そのほか、鑑賞教材の問いの質が高いと思います。造形的な視点を与えていますけれども、生徒に考えさせる部分への、この場合、言及を避けていますので、自由な発想が生まれやすいんではないかと思います。また、学びを支える資料として様々な道具や材料、使い方を紹介しています。彫刻刀やペンチなどの安全な使い方なども細やかな配慮がされていると思います。

使いやすさの面で考えると、表現と鑑賞を一体的に学習できるように題材の工夫も見られます。掲載作品が大変多いこともA者の特徴ではないでしょうか。特に生徒の作品が多く掲載されており、生徒の表現活動に生かすことができます。二次元コードで360度回転鑑賞も可能です。地域性としても、日本の伝統文化に関わる題材や作品が掲載されていることも魅力の一つです。

B者もバランスよく構成された教科書だと思います。色彩もきれいで掲載された作品も多い。目標、振り返りも示されていて、大変取り組みやすいと思います。学習を支える資料も多く、知識、技能面での育成にも活用できます。作者の思いや解説動画も多く、この中には質の違った紙で作品を掲載しているところなども魅力的です。

以上のようなことで、先ほど述べたように、1位をA者、2位をB者で推したいと思います。

○矢下教育長　続いて、末廣委員、お願いをいたします。

○末廣委員　美術に関しましては、B者を2位、A者を1位といたします。B者もなかなかいいのです。最初の出だしのところで「美しい」という谷川俊太郎の詩があります。その後に写真があって、全国の中学生が美しいと思ったその瞬間とか風景を撮ったものに生徒のコメントが寄せられている。その生徒のコメントが生徒としては美術という世界に入りやすい導入になっています。例えば絵を描くのは苦手なんだけど美術って楽しい時間になるのかなとか、美術作品をどう見ればいいのだろうとか、そういう疑問を出してそれに答えているというところも、非常に分かりやすいと思いました。

1位のA者ですが、3冊になっています。当然A者は全体のページ数が非常に多くなっています。取り上げている題材も、表現、鑑賞と分けたときに、特に鑑賞の題材が例えばB者と比較しても非常に多いです。また、全体的に紙面の構成が非常に美しい、私の主観的なものでもありますけど美しいと感じました。

やはり美術というのはいわゆる造形的な見方を豊かにする、それから技能に関する目標というのもあります。それから、発想とか構想、鑑賞に関する目標もあります。最終的には主体的な学習ということに行き着くわけですけれども、それぞれのタイトルが生徒に訴えるものもしっかりあるように感じます。またA4のワイド版ですから鑑賞の作品を非常に大きく大胆に載せることができています。このように、いろいろと良い点がありまして、A者を1位に推薦いたします。

○矢下教育長　垣内委員、お願いをいたします。

○垣内委員　美術に関しましては、造形的な見方、それから創造的な表現、さらには完成

を養うというような重要な目的があるかと思います。このテキストに関して言うと、まずその美術に抵抗なくスムーズに入っていける導入部分があるかどうか、それから必要な多様なメニューが用意されているのかどうか、特にその表現、それから創造に関しての資料が十分に盛り込まれているのかどうかという3点を中心に拝見させていただきました。結果から言うと、A者が1位、2位はB者とさせていただきます。

A者に関しては、もう既にほかの委員の先生方もおっしゃっていましたけれども、まず非常に美しい構成になっているという、美術ですからやはりそういう美的なセンスというものは非常に重要な部分を形成しているのではないかというふうに思われます。

それから、二つ目は表現と鑑賞を一体的に学習できるような題材を配置しているというようなこと。そして、三つ目といたしましては、生徒作品も含めて非常にこの素材を用意していると、美術、非常に幅広い分野をカバーできる科目ですので、こういった情報量が多いということも生徒さんの関心に寄り添って教師の方が工夫されることができるのではないかというふうに思われます。

また、同じような教材が各者用意されていますけれども、例えば2・3年で扱っているゲルニカに関しては作品の大きさの比較ができるような工夫もされているといったようなこともありまして、美的なセンス、造形的な見方、そして創造的な表現といったもの、いずれの観点からしてもA者がいいかなというふうに思われます。

B者につきましても同じようにいずれもよくできているものなんですけれども、A者に比べますと、先ほど言いましたような生徒さんとの親和性というんですかね、そういった点で若干A者のほうがすぐれているというふうに思われます。

以上です。

○矢下教育長　美術では、感情や情操を育てる、美術の活動、表現する力を伸ばしていくといった観点に、美術を学ぶ考え方といった点にも力点を置いて見ています。私は、A者を推薦します。

1年の「中学校美術の世界へようこそ」で、小学校から中学校3年間の成長地図を示しています。1年「美術との出会い」が、2、3年の「学びの実感と広がり」「学びの探求と未来」につながっている。これは「新しい美術との出会い、新しい見方と感じ方との出会いこそが美術との出会い」であるというこの教科書の考え方です。こうした考えは、「鑑賞との出会い」では、ただ見る、鑑賞するということではなく「美術文化や伝統から学ぼう」「作品から感じ取ろう」「生活の中の形や色彩から感じよう」と書かれていることにも現れています。さらに「美術館へ行こう」というページで、作品を楽しむコツより前に、美術館の役割の説明があることにもつながっています。また、たとえば、２、３年上では、ジャポニスムを通して考える」を「文化の出会いがもたらしたもの」と説明しています。こうした考え方で全体がまとまっていることをよしとしました。以上のことから、A者を推薦します。

○矢下教育長　　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、

集計した結果について、事務局、お願いをいたします。

（集計）

○矢下教育長　ただいまの集計結果につきましては、1位にA者を挙げられた方が4名、C者を挙げられた方が1名、2位にB者を挙げられた方が3名、A者を挙げられた方が1名でございます。結果として、1位にA者を挙げた方の数が4名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、美術についてはA者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、美術についてはA者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、美術についてはA者に仮決定いたしました。

それでは、A者の発行者名について、指導課長、お願いをします。

指導課長。

○指導課長　それでは、仮決定のA者についてでございます。

発行者名は、日本文教出版。書名は、美術。

以上でございます。

○矢下教育長　議事進行中ではございますが、ここで一時中断し、休憩を挟みたいと思います。なお、再開は午後3時50分といたします。よろしくお願いをいたします。

それでは、これより休憩といたします。

（休憩・15：30　～15：50）

○矢下教育長　休憩前に引き続き、会議を再開いたします。

保健体育

○矢下教育長　続いて、保健体育についてご審議願います。発行者は4者となっております。それでは、各委員から、採択すべき発行者について順位をつけてご発言いただきます。

神田委員から順にお願いをいたします。

○神田委員　保健体育の指導となると、心と体を一体と考え、生涯にわたって心身の健康を維持しながら、スポーツライフを実現していく能力を育成することが大切です。

教科書を選ぶ視点としまして、まず、①何を学ぶのかが明確に示していること、②健康を維持するための知識や技能を分かりやすく説明しているか、③生涯にわたって実践的な力をもつことを意識している内容かといった点を考えました。

私は１位にＣ者、２位にＤ者を推したいと思います。Ｃ者は、冒頭に学びの意義について、教科書の使い方、学習方法などを丁寧に説明しています。また、見つける、学習課題、課題の解決、思考・判断・表現、知識・技能→広げるという流れで学習が自主的に取り組めるように構成されています。

教科書が作られたときはコロナが流行する前ではありましたが、Ｃ者は感染症についての資料が豊富であり、感染経路まで丁寧に説明されています。

見開き２頁で１時間の授業展開になるように構成されていて、資料を使って考える課題が多く、授業の深まりが得られると思います。他教科とのリンクも考えられています。また、「広げよう」では授業で学んだことが生活に生かせるようになっている点も、評価されます。

Ｄ者も学習目標から考えたり調べたりする活動を通して深く考えることができる構成になっています。全章の扉に「最前線を知る」というコーナーがあり関連する人のインタビューがあるなど随所に工夫が見られます。

先ほども申し上げたように、1位はC者、2位はD者を推したいと思います。

以上です。

○矢下教育長　続いて、末廣委員、お願いをいたします。

○末廣委員　私は、2位がD者、1位がC者を推したいと思います。

保健体育というのは心と体の問題ということで、人間にとって非常に大事な教科になってきます。D者のほうは、1時間の流れが明確で、まず目標があって課題をつかんで、それを考え調べる、そしてまとめ、また深めるということで、その学習方法もいろんな学習方法があるということで、ディスカッションとか、あるいは実習・実験、それからその課題を学習する、コンピューターなどを活用する、あるいはいろいろと調査をするということで、保健体育はいろいろ学び方があるということが示されています。1年の巻末には、健康と社会のつながりとか、みんなの健康を守るためにどうすればいいか、そして社会の中で支え合い共に生きるというテーマが出ております。やはり最終的には人間として豊かな生活、そして人と一緒に生きる、社会の多様性を認めていく、そのようなキーワードがあります。各章の終わりには「探求しよう」、より深くより広くという、そのあり方が示されております。

1位のC者ですけれども、やはり1時間の流れというのは、まず課題を見つけてその解決を探る、そして解決のための知識・技能を習得する、あるいは活用する、そして広げていくということが示されています。情報の収集とか、あるいはディスカッション、ブレーンストーミー、意見・考えを出し合う、それからロールプレイングというのは役割を分担、演技をしていく、あるいは実習実践と、いろいろな学習方法があるということがわかります。

それから、保健、健康のため例えばスポーツをやる、運動をやる、あるいは食事を考えるといろいろとあると思いますが、社会全体が支え合って生きているということが強調されます。健康とかスポーツとかそういうものに関わっているいろいろな職業がありますが、例えば医師とか、あるいは歯科医師、薬剤師、それから防災・減災のための方々もいらっしゃるし、保健師とか介護福祉士、更には気象予報士とか地震学者、消防隊員、警察官、自衛隊員、こういう方がお互いに活動し合って社会全体で支えていくと、そういう在り方

が明確に示されています。そういうことで、保健体育の分野は社会的な広がりがあるのですが、基本的には人と人とが最終的には共生していく、共に生きていく、支え合って生きる、それが保健体育の教科の本来の趣旨であるということが分かるように記されています。そういう点から保健体育はC者を1位として推薦いたします。

○矢下教育長　続いて、垣内委員、お願いをいたします。

○垣内委員　保健体育に関しましては、生涯にわたって心身の健康を保持・増進するということ、それから豊かなスポーツライフを実現するための能力を養うという重要な目的があると思っています。そのための基礎的な技能、それから合理的な解決に向けて判断し、そして他者に伝える力を養う、また、健康の保持・増進と体力の向上を目指して明るく豊かな生活を営むという非常に重要な、また幅広い事象を扱う分野であろうというふうに思っております。この観点から教科書を拝見させていただきましたが、いずれの教科書もコンセプト、そして学ぶ目的も分かりやすく明示されておりまして、教科書の使い方についても明らかにされておりますし、内容についても様々な工夫がなされているところではありますけれども、この中で少しずつ差がありまして、第1位を私はD者とさせていただきます。第2位がC者であります。

第1位のD者に関しまして言うと、心身のその健康ということを中心に「保健体育を学ぶ皆さんへ」ということで、最初の扉のページからきちんとしたメッセージを、コンセプトを明らかにしているということと、それから口絵の部分で例えば口絵の3、いつでも話せる相手がいますというメンタルな部分についても十分な目配りをされていると、様々な学習方法も明示されているというところを評価いたしました。

また、この教科書の場合は、それぞれの章の巻頭のところ、イントロダクションもきちんとその学ぶ目的というものも示されておりますが、「学習の終わりに」というところでそれぞれの最後のページに、何を目的としてどのようなことを学んだのかということをまたきちんと振り返るという構造化ができているというふうに思われます。

また、その教科書の使い方に戻りますと、方法論としてもディスカッションやブレーンストーミング、それから調査など、様々な手法も盛り込まれていて、非常に丁寧に作られた教科書であろうというふうに思っております。

そのほか、若干ほかの教科書にない部分としまして、例えば43ページにはLGBT、ほかの教科書にも若干書かれていますが、LGBTの方が顔出しでコラムを書かれていたり、感染症に関しましては人権への配慮といったようなことも記されております。

いずれの教科書も非常にバランスよく構成されていると思いましたけれども、より丁寧で、かつ、コンセプトをはっきりと打ち出しているというところで、D者1位と、またC者2位とさせていただきます。

以上です。

○矢下教育長　私は、保健体育は1位にC者、2位にD者を推薦させていただきたいと思います。

C者は、表紙裏で、「保健体育を学ぶ皆さんへ」として学ぶ目標を明確に示しております。「保健体育科は、体育や保健の味方・考え方を働かせ、豊かなスポーツライフを実現することを目標としています。」という内容を説明するために、このあとに続く口絵を「オリンピック・パラリンピックのメッセージ」「人と人をつなぐスポーツ」「支えあって生きている」といったことにして、健康、防災、減災について、自分で取り組む、周囲の人と支えあう、社会全体で取り組む、と自助、共助、公助を概観しながら説明をしていきます。さらに、この教科書の使い方では、教科書の扉から各時間の学習、巻末資料、学習のまとめ、というページの進め方と、「1時間の主な流れ」が簡潔に1ページに収められていていいることが理解しやすく扱いやすいというふうに感じております。本文の色や文章、図の配置も見やすくなっております。

D者は、表紙の裏に「保健体育を学ぶ皆さんへ」で体育編と保健編で記述する内容を簡潔に述べております。その後の口絵の中では、「保健体育　行って、見て、学ぼう」で保健体育の様々な分野にかかわる博物館やセンター等を紹介していることが、他とすこし違っています。「この教科書の使い方」では、「教科書の構成と学習の流れ」を教科書の章の扉、各時間の学習（探求しよう）、章のまとめ、というように示して、さらに「1時間の主な流れを」は、学習の目標、課題をつかむ、考える、調べる、まとめる、深めるという説明して1ページに収めて理解しやすくしています。　C者、D者共に今挙げたような点がいいのですが、C者のほうがより内容的には精選されているという点を考えて、1位をC者、2位をD者とさせていただきたいと思います。

以上でございます。

続いて、高森委員、お願いをいたします。

○高森委員　科目名「保健体育科」・種目「保健体育」については、導入部分において当該教科の学びの目的・意義、学習の方法論などが的確に示されているか、学習の課題とまとめが生徒の知識・技能の定着につながっているか、教科の特性上、学習者が常に自分の身に引き当てたり、日常生活に照らし合わせて考られる工夫が見られるか、デジタル教材は有効に活用されているか、などに主眼を置いて比較・検討しました。同時に、個別的内容として、保健の領域では、性の問題、心の成長と葛藤、コミュニケーショントラブル、ストレスなど、生徒達が日常的に向き合うであろう思春期特有の悩みや不安に対する学習課題について丁寧に説明されているか、事故・防犯・防災などのリスク教育、医療・薬品による病の治療法など基礎的な知識を効率よく学習できる構成になっているかを分析し、また体育の領域では、運動やスポーツをする際の注意点、事故や障害を防止する安全教育についても、記述の内容を確認しました。以上の観点から、私は1位にC者、2位にA者を選びたいと思います。

推薦する2者は、全体の構成がたいへん似通っており、学習内容や資料が過不足なく配置され、レベルの高い教科書に仕上がっているという印象を受けます。

例えば、表2すなわち表紙見返しの目次では、両者ともに冒頭に保健体育の学習の意義

が簡潔にまとめられ、目次のあとには保健体育の教科を俯瞰したトピックを8頁ほどの口絵として紹介、次いで、教科書の使い方、保健体育の学習方法へと段階を追って展開していきます。特に、C者の場合、2～3頁の保健体育の学習方法を説明する部分において、小学校でも導入されて久しいブレインストーミングやロールプレイングの具体的内容を再確認できる項目が設けられ、学習の手引きとして充実した内容になっていると思いました。

学習の課題については、C者は大単元に「章の扉」、小単元に「学習課題」、A者は大単元に「章の扉」、小単元に「課題をつかむ」「きょうの学習」などを配置し、学習のつかみ所を提示します。一方、学習のまとめについては、C者は各章末にドリル形式の「学習のまとめ」を、A者は各小単元末に「学習のまとめ」、各章末にドリル形式の「章のまとめ」が、それぞれ設定され、振り返りを担保しています。目当て・振り返りの充実度は、A者の方が充実しているように思われます。

デジタル教材の活用について、C者は要所要所に「D」マークを設けて、教科書の1頁に印刷された2次元コードから、発行者が作成したサイトのコンテンツにアクセスできる環境を整えています。一方、A者の場合は、インデックスはA者のサイト上に設置されていても、リンクされているデジタル教材のほとんどが外部リンクになっており、実際に開いてみるとサイトの書式・フォーマットが異なるなど、使い勝手に課題がみられます。特に、外部サイトは、将来URLが変更になったり、サイト自体が閉鎖された場合、閲覧ができなくなるのではないかという不確実性が心配されます。

また、他教科との関係性について、C者では、各ページの随所にアイコンを使って「をも見よ参照」を設け、当該教科書の関連する学習内容へつなぐ工夫がとられていますが、そればかりでなく、デジタル教材を活用して、当該発行者の他教科の教科書の該当ページを閲覧できるというアイデアも興味深いところです。ただし、これについては、リンク先の科目の教科書が、台東区の中学校で採用されていない場合、学習者が違和感を感じたり、混乱したりするのではないかという心配もあり、あくまでも参考として活用する程度にとどめる必要があるかも知れません。

以上の比較・検討をふまえ、私は1位に位にC者、2位にA者を選びました。

なお、蛇足となって恐縮ですが、感染症の記述に関しては、今日的課題となっているコロナウイルスへの直接の言及は2者ともに見られませんでしたが、A者には人類と感染症の戦いの歴史が150頁の特集資料として紹介されている点が興味深いと思いました。

以上です。

○矢下委員長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局、お願いをします。

（集計）

○矢下教育長　ただいまの集計結果につきましては、1位にC者を挙げた方が4名、D者を挙げた方が1名、2位にB者を挙げた方が3名、A者を挙げた方が1名、C者を挙げた方が1名です。

結果として、1位にC者を挙げた方が4名と最も多く、過半数を超えております。これに

より、保健体育については、C者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、保健体育については、C者に仮決定させていただきたいと思います。これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下委員長　ご異議ございませんので、保健体育についてはC者に仮決定いたしました。

それでは、C者の発行者名について、指導課長お願いをいたします。

○指導課長　それでは、仮決定のC者についてでございます。

発行者名は東京書籍。書名は、新しい保健体育。

以上でございます。

技術

○矢下教育長　次に、技術についてご審議願います。発行者は3者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。

末廣委員から順にお願いをいたします。

○末廣委員　技術に関しましては、まず、第2位がＣ者、第1位をＡ者とします。

まず、2位のＣ者ですが、生活や社会における技術の役割。技術の見方とか考え方、技術と生活産業、技術とエネルギー環境、そして受け継がれて発展する技術、そのような流れがまず載っております。

次に、技術の時間における、学習における問題解決ということで、実際にまず問題の発見、課題の設定、そして物を作るときの設計ですね、あるいは試作、それから製作、そして精査の評価と改善ということで、実習例が示されております。それから、異分野との融合とか、身の回りの変化とか、いろいろと工夫したり想像していく、その力が技術を支えていくということですね。そして、技術というのは、人間の夢をかなえるためにある。それは技術の歴史を見れば分かるということで、歴史が書かれています。

そして、技術の見方、考え方ですけれども、要するに、社会からの要求として、こんなのがあればいいなとか、こういう機械があればいいとか、いろいろとあります。その要求に応えていく。そして、それとともに安全性を目指す。環境への負荷を考える。あるいは、経済性を考える。そういうところから、技術の最適化ということですね。最も最適な在り方はどうなのかということも考える。それが現代の技術、あるいは未来の技術の発展につながるということですね。

ですから、各編においても、まず最初に技術の見方、考え方が出てきて、そして、ここで考える技術の最適化は何なのだろうと考えていく、それがどの編にも最初にあります。そして、問題解決のプロセスとしては、まず問題がどういうところにあるか、それに基づいて計画を立てる。製作をしていく、そのできたものを評価、改善していく。それで、ま

た新たな問題を発見していく。技術というのは、その繰り返しだと、そういう視点があります。

A者のほうでは、最初の材料を加工してという編では、詳しい説明があります。例えば、身の回りの材料で加工していく、教室で作れるもの、あるいは家庭で作れるものというのは限られてきますが、木材とか金属とかプラスチック、それを使うとなると、その特性を考える。そして、その材料に適した加工法はどういうものがあるか。丈夫な製品を作るためにはどういう工夫をするべきかという、そのステップがあり、そして問題解決というのは、実際にそれを作っていこうということですね。それで課題を設定する。製作品をまず構想して、どういうものを作るか設計しようと、その作った製図をちゃんと読み取れるかどうか、自分のアイデア、考えたことをみんなに伝えられるかどうか。そして作業手順を考えて製作しようと、そういう製作までの段階が詳しく書いてあります。

実際に作っていくということですが、そうすると、どうしても技術が必要になるわけですね。それが例えば、切断とか穴開けとか、そういう全部で九つの技術がそれぞれ出てきまして、それを組み合わせて製品を作っていく。それが問題解決ということですね。実際にできたものというのは、リモコンラックとか戸なしボックスとか、全部で8製品で、これが具体的に写真に載っております。

その手順で最終的にちゃんとした製品ができる。それが問題解決ということになるわけですね。それで、ほかのところでもそういう手立てをして、最終的にはいいものを作っていくと、そういうものが技術の世界であるということですね。

結論的には技術の1位がA者で2位がC者ということです。

○矢下教育長　続いて、垣内委員、お願いをいたします。

○垣内委員　この技術に関しては、課題解決ということと実践的な態度、この二つが大きな目的であろうと思います。この観点から、それぞれの教科書を拝見させていただきました。結論から言いますと、第1位がA者、第2位、C者とさせていただきたいと思います。

いずれの教科書も目的がはじめに示されて、導入部分を工夫されておりますし、内容に関しても、それぞれ分かりやすく提示されていると思われます。学習の流れやコンピュータ操作、必要なものは過不足なく入ってはいるんですけれども、このA者に関しましては、技術分野のガイダンスというのが最初にありまして、これは技術分野の目標というところがあって、ここに、ようこそテクノロジーの世界へということで、技術というものがどういうものなのかということをまずイメージさせ、その後、教科書の構成、学習方法、学習方法についても、様々な手法についてきちんと目配りがされています。その後に技術分野のガイダンスというのがありまして、これが非常に分かりやすくて、丁寧なご説明になっていていいのではないかというふうに思います。このガイダンスの後に、一番最後のところに総合的な問題解決という項目を一つ立てて、学んだことを社会に生かすとか、技術分野の学習を終えてどんなことを考えているのかということを実際に考えさせるというセクションを設けております。こういう構造的な学びによって、より深い理解が進むのではな

いかというふうに思われます。

また、随所に技術の巧みであったり、技術の工夫といったような、様々な情報を盛り込んでおりまして、非常に分かりやすく、かつ何を学ぶかが明確になっている、よくできたテキストであろうということで、第1位をA者にさせていただきました。

C者も実践的で非常によくできた教科書であろうかと思いますけれども、第1位はA者、第2位はC者とさせていただきたいと思います。

○矢下教育長　続いて、私です。技術家庭、技術分野については、私はA者を推薦したいと考えております。A者は、目次で１年次から３年次に学ぶ内容を概観しています。続く「教科書の構成」は、編の導入から基本ページ、基本ページから学習のまとめとなっています。それぞれに具体的にページのイメージをつけて説明をして、学習の流れがわかりやすくなっています。「技術分野の学習方法」では、通常の思考ツール、ブレーンストーミング、フィールドワーク、まとめと発表の仕方に加えて、技術分野の学習の流れや技術を読み取る活動を簡潔に説明しているのがわかりやすくて良いと思います。続く「技術分野のガイダンス」は、五つの内容からなっていまして、この五つは、１工夫・創造の力が技術を支える、２技術は夢をかなえるためにある、３技術の最適化って何だろう、４未来を創る問題解決、５技術分野の学習を見てみようで、あらたに学ぶ技術分野の見通しをもつために、これらの内容を様々な例やマンガを使ってわかりやすく説明しています。これが技術を理解して学習しやすくしていると評価しました。

技術を理解して学習に取り組んでいく、そういった姿勢を非常にしやすくしているということを評価して、A者を選ばせていただきました。

以上です。

続いて、髙森委員、お願いをいたします。

○髙森委員　科目名「技術家庭科」・種目「技術」については、技術分野を学習する意義と目的、ならびに教科書の使い方や学習の進め方などがガイダンスにおいて明確に示されているか、教科書を開きながら学習する工作・栽培・情報など実習例は見やすい構図になっているか、実習時の安全面への配慮がなされているか、デジタル教材は有効に活用されているか、技術分野における現代社会の諸課題について考える教材が用意されているか、などという多角的な視点から比較・検討し、私は1位にA者、2位にC者を選びたいと思います。

今回選考に上がったB者・C者は、それぞれA者と同程度に充実している部分もある反面、A者に比べて物足りないと思われる部分が、B・C者それぞれの教科書には互い違いに散見されることが指摘できます。これに対して、A者は、いずれの項目においても、概ね内容が充足していると実感しました。

教科書冒頭のガイダンスの内容について、A者は「技術は夢をかなえるためにある」の中で技術分野を学習する意義や目的、「技術の見方・考え方」および「技術分野の学習方法」で学習の方法論や進め方を、それぞれ概観するつくりになっており、充分な内容に仕

上がっています。この部分の充実度はA者同様、C者も優れていますが、B者は消化不良の感があります。

また、安全面への配慮については、A者は本編に「安全」「衛生」のアイコンで提示するほか、冒頭4・5頁の見開きを使って、作業の安全確保につい詳しくまとめられている点も、高く評価できます。この点に関しては、A者同様、C者も充実しており、他方B者は具体性に欠けることが指摘できます。

内容の部分では、ものづくり、生物育成、エネルギー、情報技術の各分野で、各者それぞれ特徴があります。

具体的に、ものづくり分野の木工で比較しますと、A者は、例えば40頁において、材料を購入する際の検討事項を提示するなど、他者にない特徴があります。木工・金工の工作で最も難しいのは、設計図を作るよりも、実際の加工作業よりも、実はホームセンターなどで商品を購入する時だったりしますので、このあたりのアドバイスは充実させて欲しいところです。また、A者は、基礎的な製作工程・工具の取り扱いあるいは基礎技能の解説を主軸に据えて、見開きをうまく活用した見やすい紙面の構成になっております。更に、製図や設計図の説明が非常に詳しいのもA者の強みです。これらの点に関しては、B者もほぼ同水準の作りになっていますが、他方C者は製図・設計図に関して若干物足りなさを感じます。

情報技術の分野では、A者は、デジタル技術やプログラミングに関する基礎知識が非常に充実しています。情報モラル、知的財産、セキュリティ、個人情報などの記述も詳しいという特色があります。また、244頁以降には、問題解決の手段としての情報技術の活用事例が紹介されています。

そのほか興味を引いたのは、A者巻末付録の「プログラミング手帳」で、これはほかの発行者にはないアイデアです。C者には巻末に付録の「コンピュータの基本操作」というものがありますが、どちらも実用的な付録ではないかと思っております。

デジタル教材の活用については、各者ともに独自のコンテンツを用意しておりますが、これについては2次元コードからデジタル教材の目次のページにジャンプするA者よりも、2次元コードから所定の教材に直接アクセスできるB者・C者のほうが使い勝手がよいと思いました。また、各コンテンツの充実度もB者・C者は優れています。A者はデジタル教材の使い所に工夫が必要だと思いますが、ここは教員の力量に委ねましょう。

なお、A・C者にないB者の特色として、目次の構成が、ものづくり・生物・エネルギー・情報の4分野のほかに、ロボットや発電機の技術を学ぶ「夢を叶える技術」の章を設けていること、教科書の題材例と照らし合わせて活用できる別冊「技術ハンドブック」を用意していること、内閣府が進める科学技術イノベーションのうちSociety5.0を紹介していることなど魅力的なコンテンツが挙げられます。

以上、各者ともに一長一短がありますが、総合的に判断して、私は1位にA者、2位にC者を選びました。

○矢下教育長　続いて、神田委員、お願いいたします。

○神田委員　技術はものづくりの技術の知識と技能を身に付け、より良い生活の実現や持続可能な社会を構築する資質・能力を育成することに狙いがあります。この視点で考えていく必要があります。どの教科書も巻頭に学習の仕方や流れが説明されています。どの教科書も問題解決型の学習を意識した構成となっています。

私は、１位にＡ者、２位にＣ者を推したいと思います。

Ａ者は、問題解決カードが学習の過程に、Ｃ者は「問題解決の流れ」を冒頭に掲載されています。Ａ者は解決例が載せられていて、その説明も丁寧になされています。実習においても大きな写真や図で分かりやすく説明されています。設計図の書き方や制作の仕方なども詳しく丁寧に載せられています。

Ａ者は巻頭の技術を学ぶ意義、教科書の構成、学習方法、安全について、ガイダンスでは様々な視点から漫画も使って学ぶことができます。導入で興味関心をもたせることが考えると評価が高いと思います。その他、コラムが充実しており、学びのヒントや深い学びへと導かれる内容であると思います。ＳＤＧｓやプログラミングなども扱っています。Ｃ者のガイダンスや情報とコンピュータなども丁寧に扱っています。総合的に考えまして、先ほど申し上げたように、1位はA者としたいと思います。

○矢下委員長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局、お願いをいたします。

（集計）

○矢下教育長　ただいまの集計結果につきましては、1位にA者を挙げられた方が5名、2位にC者を挙げた方が4名でございます。

結果として、1位にA者を挙げた方が5名で全員でございます。このことにより、技術についてはA者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、技術については、A者に仮決定させていただきたいと思います。これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下委員長　ご異議ございませんので、技術についてはA者に仮決定いたしました。

それでは、A者の発行者名について、指導課長お願いします。

○指導課長　それでは、仮決定のA者についてでございます。発行者名は東京書籍、書名は新しい技術・家庭（技術分野）　未来をつくるテクノロジー、以上でございます。

家庭

○矢下教育長　次に、家庭についてご審議願います。発行者は3者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。

垣内委員から順にお願いをします。

○垣内委員　家庭科に関しましては、技術・技能を身につける、課題解決力を養う、そして実践的な態度を養うという、この三つが大きな目的であろうと思っています。いずれのテキストも内容面、そして目的、学習の流れ、また教材も非常に豊富で工夫されております。中でも、第1位として推薦したいのがC者になります。第2位がA者であります。

C者の場合は、教科書の構成として、問題を解決する道筋、見え方、考え方ということを非常に丁寧にご説明されていること、そして、いつも確かめようということで、基礎的な技能について、写真やイラストを用いて丁寧にまとめて掲載しているといったようなことを一つ評価のポイントとさせていただいております。丁寧なイントロダクションがあって、目標、構成、そして学習ガイダンスが充実しているということであります。

2点目といたしましては、このガイダンスの部分ですね、家庭分野のガイダンスということで、巻頭に中学校で実習する事柄、そして問題解決の流れというものを概観できるようにしているという点も非常に好ましいと思います。これはこの巻末に「学習を終えて」ということで、学んだことを社会に生かすというようなことと併せて、恒常的に学びを深めていくことができるのではないかと思われまして、高い評価をさせていただきたいと思います。

3点目は、Dマークでの資料がたくさんありますが、ほかのテキストも基本的には十分な教材が用意されていると思いますけれども、A者のほうがより資料が豊富であって、より丁寧な説明が付されていることから、学ぶ側の生徒さんたちの開始に寄り添って、教員の方々が様々な学習のやり方を工夫することができる、そういう教材ではないかと思われましたので、第1位はC者。

第2位がA者になります。こちらも各単元ごとに問題を発見、課題設定、そして計画、実践、評価といったようなプロセスも明記されているという点で非常に好ましいものでありますけれども、資料の豊富さ、それから丁寧さという観点からいって、C者を第1位とさせていただきます。

以上です。

○矢下教育長　続いて、私のほうは、技術・家庭、家庭分野は、C者を推薦いたしたいと思います。

「教科書の構成」は、編の導入から基本ページ、基本ページから学習のまとめとなっていて、それぞれに本文のページを引いて簡潔に説明をして、学習の流れがわかりやすくなっています。続いて「家庭分野のガイダンス」、「家庭学習の目標」として「自分の生きる目標に向かって、自分の生活をより良いものにしていく力をつけること」と明確にしています。ガイダンスは、続いて、「自立と共生を目指そう」、「問題を解決する道筋と見方・考え方」で、問題を解決する道筋として、１の課題発見、計画、実践、評価、改善、６の次の課題、といく流れを示していてわかりやすい。あわせて、生活の営みに係る見方・考え方の例として、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可

能な社会の構築という視点から見た様々な考え方を紹介しています。次の「中学校家庭分野の学習内容を見てみよう」で、衣食住の生活、消費生活・環境、家族・家庭生活の３分野から、３年間の学習内容を展望しているのが学習を進めていくうえで分かりやすくなっております。さらに、ガイダンスは「自分の生活をチェックしよう」「自分と家族の生活を見つめよう」「家族・家庭の基本的な機能」となっている。わかりやすいうえにきわめて充実した内容となっています。こうした点を考慮して、C者を評価させていただきました。以上です。

続いて、髙森委員、お願いをいたします。

○髙森委員　科目名「技術家庭科」・種目「家庭」については、家庭分野を学習する意義と目的、ならびに教科書の使い方や学習の進め方などがガイダンスにおいて明確に示されているか、教科書を開きながら学習する調理や裁縫など実習例は見やすい構図になっているか、実習時の安全面への配慮がなされているか、デジタル教材は有効に活用されているか、家庭分野における現代社会の諸課題について考える教材が用意されているか、などという多角的な視座から比較・検討し、私は1位にB者、2位にC者を選びたいと思います。

まずは、教科書の導入部分にあたるガイダンスについては、家庭分野を学習する目的、各領域を俯瞰する学習観、個別の学びの意義などが、B者・C者ともに詳しく解説され、良くまとめられていると思いました。

ただし細かな部分では相違も見られ、各学習における目標・見通し・活動・実習・振り返り・まとめといった「学習の流れ」については、2者ともに本編中で確認できるようになっている部分は同じですが、C者はガイダンス枠とは別に3・4頁の「教科書の構成」において、それらを概説しています。一方のB者に概説が見られないのは、実習も多い家庭分野において、学習の流れを一様に定めることは現実的ではないという意味で、敢えて設けなかったのかも知れません。その代わりに、B者は8・9頁に主体的・対話的・深い学びを主軸に据えた学び方・考え方の工夫などが具体的に示され、こちらはC者には見られません。

また、実習を安全に進めるための配慮に関しては、B者・C者ともに本編の中で「安全」「衛生」のアイコン表記をもって提示していますが、C者は、これに加えて、ガイダンスの2・3頁に調理・裁縫、および幼児や高齢者を対象とした実習面での安全についてまとめられております。

全体の構成について、両者には大きな違いがあり、B者は、A家族・家庭、B衣食住、C消費・環境の3部構成からなり、別途「生活の実践と課題」が巻末に設定されています。一方のC者は、自らの生活、消費者としての生活、家族・社会の一員としての生活の3部構成で、このうち自らの生活を衣食住の3編に区分した全5編からなっており、別途「選択」という枠組みの中で巻末に「生活の実践と課題」が組み込まれています。特に、身の回りの課題にスポットを当てた、巻末の「生活の実践と課題」は、学習者が家庭科の学びを自分事として実生活に活かすきっかけになることが期待されます。

デジタル教材の活用については、B・C者ともに自者作成のオリジナル教材を活用し、B者はQRのアイコン、C者はＤマークのアイコンで本編中に示され、内容もテキスト・動画ともに充実しています。特にB者は、実習系の学習を中心にほぼすべての奇数ページ下欄に2次元コードを設け、該当する教材のページにダイレクトにアクセスできるという利便性があります。一方のC者は、Ｄマークの記載された教材を見つけるたびに、教科書2頁の2次元コードを読み取り、そのサイトのインデックスから目当ての教材を探し出すという手間がかかるのが、若干不便です。ちなみに、候補には挙げませんでしたが、A者に関しては、デジタル教材に外部リンクが多用され、保健体育科の教科書でも指摘した通り、この場合は使い勝手に課題や不安がありますので、やはり独自の教材を用意しているB者・C者のほうが安心感・安定感があると思います。

次に、具体的内容について、2点ほど取り上げて比較したいと思います。まずは教科書を開きながら学習する実習の教材について比較します。その際、共通する題材を用いた実習例を比較の対象とする必要がありますので、調理実習のうち具材・付け合わせ・組み合わせ料理もほぼ同じ「さばのみそ煮」の例を比べてみます。B者では124・125頁、C者では82・83頁となります。一見すると、C者は文字情報や調理過程の写真が多く充実しているように思われますが、B者の場合は、デジタル教材を併用して学習することを前提としているためか、文字情報も写真も最小限に抑えている感があります。特筆すべき点として、B者は、アレルギー物質含有食材が一目瞭然にわかるように、該当する食材に黄色のマーカーがつけられている点です。C者では、「リンク」として49頁の食物アレルギーの学習を紹介していますが、個別の食材について具体的な指示がありません。

次に家族・家庭についての学習について比較しますと、B者は教科書冒頭で、C者は最終章にそれぞれ配置するかたちをとります。両者ともに家族・家庭の意義や機能に関する学びから、生業や社会との関わりにいたるまで簡潔にまとめられております。また、B者は24頁で、C者は266頁で、今日的課題として、家族のあり方や暮らし方に多様性があることに触れ、家族や家庭のあるべき姿を固定した価値観で決めつけない配慮もされております。特にB者は、21頁全面を使って、男女共同参画社会やワーク・ライフ・バランスにも触れ、女性の社会進出のみならず男性の育児進出にまで言及している点は、高く評価したいと思います。ちなみに、C者は巻末の索引でも調べましたが、管見の限りワーク・ライフ・バランスについては記載がなかったように思います。

以上の比較・検討をふまえ、私は1位にB者、2位にC者を選びました。

○矢下教育長　続いて、神田委員、お願いをいたします。

○神田委員　家庭は衣食住に関する理解とともに技術を身に付けることが狙いとなっています。そして、学習を通して課題解決を図り、よりよい家庭生活を実践する能力や態度を身に付けさせることが大切です。したがって、衣食住に関する内容が分かりやすく説明されているか、安全面の配慮なども含め、実習を通して技術を身に付けることができる内容か、課題解決を通して思考力や実践力を身に付けることができる内容かについて考えてみ

ました。

私は、１位はＣ者に、２位はＢ者を推したいと思います。

どの教科書も冒頭のガイダンスで家庭科の学習のねらいや取り組み方が掲載されています。実習に関しても写真や図で分かりやすく説明されています。

その中でも注目したいのはＣ者です。冒頭に教科書の構成、安全面での注意が掲載され、１６頁にわたるガイダンスがあります。Ｃ者の特徴でもありますが、学習への興味関心を持たせ、学習の進め方を身に付けさせ、課題解決型の学習を行うことで深い学びの実現を図るという考え方が明確に示されているところ優れていると感じます。また、自分の生活と結び付けて考えさせるために書き込み欄を設けていること評価したいと思います。それに、全体的に資料が多く、説明が分かりやすいところが評価できます。

調理実習の仕方などは写真を使って正確に安全に指導ができるようになっています。例えば皮むきなど手の位置も適切であり、細やかな配慮がされていると感じます。各者同じ調理自習で比較したのですが、Ｃ者は写真が鮮明で色彩もきれいなせいかおいしそうに感じました。生徒の自習への意欲を高めることにつながっています。実習の際、「いつも確かめよう」で基本的な技術を身に付けられること、学習のまとめで大切な用語にも触れることができ理解を確かにすることもできます。様々な工夫が感じられる教科書です。郷土料理や衣に関する伝統文化なども触れています。

Ｂ者は消費生活の中での課題解決や衣食住と家庭生活とのつながりを重視するなど身近な生活で学んだことを生かせることに力を入れています。

以上のことから、１位はＣ者に、２位はＢ者にさせていただきます。

○矢下教育長　続けて、末廣委員、お願いをいたします。

○末廣委員　私は、2位がB者、1位がC者です。

まず、2位のB者ですが、公民のところでも申し上げましたが、家庭の在り方、これがB者では非常に分かりやすく説明されています。家族家庭と地域社会とその外側に社会があって、三重の円といいますか、非常に分かりやすい図で家族・家庭の説明がなされています。

それで、この家庭科も主体的、対話的で学びをするという規定がありまして、主体的というのはどういうことか、ここで分かりやすく説明がありまして、それから、深い学びというのは、実際にどういうことかというと、学習を自分の言葉で振り返る、これは前のほかの教科でもありましたけれども、ここでそのような説明がなされています。

それで、とにかく総合的な課題にまず取り組むという、学習が自分の中に生きているか、自分で課題を発見し、課題解決に取り組む、それが具体的な深い学びのプロセスということを説明しています。

それから、自立と共生について、自立というのは、まず何を具体的に言うかというと、生活的な自立、精神的な自立、経済的な自立、これが自立ということであると。それから共生というのは、他者との共生、自然との共生、地域社会との共生、共に生きるというこ

とですね、家族の人でありながら、お互いに自立と共生ということが必要だということです。それでなおかつ家庭科の在り方としては、特に生活を見詰める時間が必要だと。それでは、その生活をどういうふうに考えるか、まず快適か、安全か、健康か。それから家族と地域の人との関わりがちゃんとあるかどうか。あるいは、その家庭の生活文化がどのようなものか。持続可能な社会とのつながり。B者の特色は、今、四つ言いましたが、この四つプラス将来を描く力、これを養うんだということですね。具体的に、調理の実習例は、B者ではどのぐらいあるかというと、13例あります。それから、衣のほうの、衣食住の衣のほうの制作実習例は7例あるということで、実際に家庭科の実習、生活ではこういうのをみることができるということです。

1位にしたC者ですが、C者は、やはり家庭分野のほうのガイダンスといいますか、目標というのをはっきり言っております。どういうことかと言うと、自分の生きる目標に向かって、自分の生活を進んでより良いものにする、そういう力をつける、そのことを目指す。よりよい生活ができるように、中学生のときにそういう力をつけていこうということですね。

それで、毎日の生活は、まず物事を判断します。どんなことでも一瞬でみんな大人は判断しているわけですが、そして意思決定をします。そして実践する。そういうものの連続で成り立っているんだと、毎日の生活は。これは今、具体的には家庭科の中では、いわゆる調理とかいろいろとありますけれども、まず、課題発見、それで計画を立てて実践して、それを自分で評価して、あるいは改善していくという。それで次の課題を発見すると、そういう繰り返しですね。

それから、自分と家族との生活をちゃんと見詰めよう。まず一日の生活、起きてから寝るまで、家族との間はどうなのかということですね。それから、家庭、あるいは家族の基本的な機能というのがどういうところにあるか。まず、生活を営む機能、子供を育てる機能、心の安らぎを得る精神的な機能、収入を得る経済的な機能、生活文化のロケーションをする機能ということですね。そういうものは、家庭にその機能が、本来なくてはいけない機能だと、そういう理念がまず言われます。

それで、具体的にB者のほうでもちょっと言いましたが、いわゆる調理、衣食住の食生活では、栄養素とか献立を作るとか、生鮮食品とか加工食品であるとか、いろいろとあります。それで、実習がありますが、その実習は割と多いんですね。野菜で10品、お肉関係で8品、魚が8品、それから健康クッキングとか、朝食を作る、あるいは弁当を作る、そういうことを学ぶと26ぐらいの例があります。

それから衣食住、衣のほうでは、12例のいろいろな作品が作られているということで、C者では実習例が豊富である。生徒たちが実際に作る上で大いに参考になるであろう思います。

それから重要だなと思うところは、防災です。防災とか減災、その検証ということで、食生活での備え、それから住、家庭地域災害時の情報重視等、いろいろと細かく出ている

ところがあります。これは、今、災害が非常に起こりやすい時代ですので、大いに参考になるのではないかと思います。

以上、総合的に見まして、家庭のCを1位といたします。

○矢下委員長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局、お願いをします。

（集計）

○矢下委員長　ただいまの集計結果につきましては、1位にC者を挙げられた方が4名、B者を挙げられた方が1名、2位にB者を挙げられた方が2名、A者を挙げられた方が1名、C者を挙げられた方が1名です。

結果として、1位にC者を挙げた方の数が4名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、家庭については、C者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下委員長　それでは、家庭については、C者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下委員長　ご異議ございませんので、家庭についてはC者に仮決定いたしました。

それでは、C者の発行者名について指導課長、お願いをします。

○指導課長　それでは、仮決定のC者についてでございます。

発行者名は東京書籍。書名は新しい技術・家庭（家庭分野）　自立と共生を目指して。

以上でございます。

英語

○矢下教育長　次に、英語についてご審議願います。発行者は6者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

私から順に発言をいたします。

英語では、教科書の内容、英語の学び方、小学校からの接続といったことに配慮したということを申し上げた上で、順位を申し上げます。1位にA者、2位にC者を推薦いたします。

A者は、表紙裏の見開きで、「言葉を使うことは思いを伝えること」として、世界のありがとうの言葉を紹介しています。「この教科書のしくみ」では、学ぶ方向とそれに関連した内容を概観しています。このあとに、クラスルームイングリッシュ、ハローエブリワン、スターターで、小学校で学習した表現や、話す・聞くといった活動が集中してできるようになっています。その後本文でも、始めの数章では小学校の学習事項と関連を待たせています。本文はメリハリがあって見やすく使いやすい。巻末に会話表現がまとめられていて、復習や発展的学習に向いています。全体に見やすくなっていると思います。

C者は、表紙裏の見開きで、「英語で世界とつながろう」で「もっと英語を使おう」と

英語を学ぶ意味、コミュニケーションの楽しさについて説明をしております。こうしたことを意識して、「小学校で学んだことを生かして、もっと積極的に英語を使っていきましょう」と言っています。ユニット０で、小学校で学習した表現や聞く、話す活動を中学校につなげていきます。その後の数章でも小学校の学習事項と関連をもたせています。それぞれのページ判型が大きいので見やすくなっています。ただし、各ページのフッターにまで学習の指示があったり、A者と比較すると対話や発表する場面の数が多いと思います。発展的といえると思いますが、精選ということを考えて、ここではA者といたしました。

どちらも優れていますが、申し上げたように1位にA者、2位にC者とさせていただきたいと思います。

続いて、髙森委員、お願いをいたします。

○髙森委員　科目名「外国語科」・種目「英語」については、導入部分のガイダンスや目次の作りに工夫がなされているか、デジタル教材は有効に活用できそうか、辞書の使い方について発音記号の紹介ともに解説されているか、読む・聞く・話す・書く活動が充実しているか、文法事項の説明に過不足はないか、などという視点で比較・検討し、私は1位にC者、2位にA者を選びたいと思います。

C者は、各学年の巻頭において英語学習の意義が簡潔に示され、続いて教科書の取扱説明と学習の方法が提示されます。また、1年生の巻末には、教室で使う英語表現がイラスト入りでまとめられてます。一方、A者は、各学年の巻頭に教科書の取扱説明と学習の方法、1年生では教室で使う英語の一覧が提示されています。教室英語のリストは、小学校とは異なる部分もあると思われますので、1年生には安心感を与えるのではないかと感じました。

目次の構成について、C者はバナーの色分けや文字のサイズ・フォントをうまく使い分けているため判然として分かりやすく、文法事項は紫色の枕に乗せて学習内容が提示されていたり、目次見開きの右端にはシチュエーション別の活動やコラムの一覧がまとめられているなど、目的のページをただちに探し当てる工夫がなされています。一方のA者は、インデックスが見出しの羅列になっているので判然としていないのと、目次だけからでは文法事項の内容がわからないという点で、使い勝手に課題があります。

デジタル教材はC者・A者ともに充実しており、使い勝手もほぼ共通しています。基本的に２次元コードは、目次ならびに本編の要所に配置され、目次のコードからはデジタル教材の目次へ、各ページのコードからはC者ではUnit別、A者ではLesson別のインデックスへと、それぞれ誘導するかたちになっており、しかも、読み込んだコードの現在位置が、C者では赤色の文字、A者では青色のバナーで表示されるなど、自分の居場所が迷わない設計になっています。

辞書の引き方についての学習は、C者は1年の9頁と65頁、A者は1年の14頁と68頁にそれぞれ紹介されます。C者は、辞書の各項目の具体的解説がなされているという点が、A者は英和辞典のみならず和英辞典の活用にまで言及している点が、それぞれ特徴です。発音記

号については、C者では1年巻末の資料編に、A者では1・2年巻末の付録に、それぞれ掲載されていますが、これについては全学年に掲載して欲しかったところです。

読む・聞く・話す・書く活動のうち、特にC者が優れていると感じるのは、目次にアイコンを使って表示されているシチュエーション別の活動で、例えば、道を案内したり道を尋ねる場面や、体調が悪い時に助けを求める場面をはじめ、ホテルでのトラブル、電話連絡でのやりとり、災害情報や機内アナウンスの聞き取りなどなど、様々な事態を想定した活動が組み込まれ、まさに海外旅行などでも応用できる実践的プログラムが充実していると感じました。

なお、発表の活動として、A者では各学年巻末付録に「会話表現」として会話を始める表現、進める表現、終える表現が整理され、教室での会話活動に役立てられる工夫がなされています。これはC者にはないコンテンツです。また、各学期毎のしめくくりでは、C者ではStage Activityにおいて、A者ではProjectにおいて、それぞれプレゼンテーション形式の活動が用意されており、既習事項の応用編としての活用が期待されます。また、中学校生活をしめくくる3年生では、C者は101頁で、A者は112・113頁で、中学校3年間を振り返る卒業記念スピーチの活動が用意されています。

文法事項に着目すると、C者は1年生でbe動詞・一般動詞の平叙文・疑問文、名詞の単数形・複数形、疑問詞と特殊疑問文、三単現、代名詞のうち再帰代名詞以外の人称代名詞と所有代名詞、現在進行形・過去形・過去進行形、2年生では、最初に五文型、次いで接続詞、不定詞、助動詞のcan・will・may・must、比較構文、3年生で現在完了形・現在完了進行形、不定詞の学習のうち仮主語や原形不定詞の用法、後置修飾、仮定法の順で展開します。特に、C者の場合、A者においては特別枠で扱われていない五文型の解説が、2年生の学習の早い段階に組み込まれている点が、大きな特色ではないかと思います。なお、命令文の文法解説が管見の限り確認できませんでしたが、教室英語や様々なシチュエーション活動では頻繁に用いられているので、文法的な説明はいらないということなのでしょうか。

一方のA者は1年生で、be動詞・一般動詞の平叙文・疑問文・命令文・特殊疑問文、助動詞のうちのcan、代名詞のうち人称代名詞と所有代名詞、三単現、進行形・過去形・過去進行形・未来形および時制の順で、2年生では、接続詞、準動詞のうち不定詞・動名詞、前置詞、第Ⅳ・第Ⅴ文型、助動詞のcan・will・may・must、比較構文、現在完了形の順で、3年生では現在完了進行形、態（能動態・受動態）、分詞（現在分詞・過去分詞）、前置修飾・後置修飾、関係詞のうち関係代名詞、仮定法、間接疑問文、原形不定詞の順で、それぞれ学習します。文法事項は、中学英語で求められる高い水準までほぼ学習できます。ただし、五文型については、C者と異なり具体的には学習せず、2年生の64頁、3年生最後の「文法のまとめ⑥」の中の「英語のしくみ」116・117頁で、多少触れる程度に留めます。A者は一方で、時制については、かなり早い段階の1年生で学習する設定になっており、教科書140・141頁に用意された時間軸を図式化して時制を学ぶ教材は、たいへんすばらしい

と思いました。

なお、A者には、特筆すべきコラムとして、「文法のまとめ」とセットになっている「英語のしくみ」があります。3年30頁・102頁の「英語の発想」は、特に優れており、例えば主語が省略されることがある日本語と異なり、英語では動作をする人を明確に示すことなど、双方の言語の表現方法の違いを確認することができます。

以上、両者ともに長所短所両面があるのですが、比較・検討の結果、私は1位にC者、2位にA者を選びました。

以上です。

○矢下教育長　続いて、神田委員、お願いをいたします。

○神田委員　英語は、英語による聞くこと、読むこと、話すこと（やり取り）、話すこと（発表）、書くことの５領域の言語活動を通して、コミュニケーション能力を身に付けることにあります。

教科書を選び視点として、それらの言語活動がバランスよく配置されていることが大切です。また、英語を使って日常的な話題や社会的な話題を表現したり伝え合ったりすることできるようにすることです。これからの英語の学習では身に付けた力を活用することができるようにすることが求められています。

学習指導要領の改訂で英語科も指導も大きく変化していくのではないでしょうか。これまでの文法や知識を教えることを中心とした内容から実生活で生きる学び、英語を使いたくなるような教科書を選ぶことが必要だと考えます。教科書の教材で取り上げている内容についても考える視点となります。

新学習指導要領を基に英語の授業は、オールイングリッシュとなること、その他「場面・目的・状況」を意識した学習、「即興力」の育成、高校入試に対応できるか、小中の連携という視点からの変化が期待できます。このような新しい視点で教科書を拝見したしました。

私は、１位をＥ者、２位をＡ者で推したいと思います。

Ｅ者は、学習指導要領の視点を取り入れた新しい感覚の教科書であると感じました。「話す」「聞く」の活動が多く取り入れており、これまでの「読む」「書く」とのバランスが取れるようになったと思います。英語と使いたくなるような内容かについては、日常生活や実社会に即した内容で、場面や目的、状況を設定した題材が取り上げられています。１年生では自己紹介、部活動、転校生など、２年では球技大会、職場体験、３年では修学旅行、合唱大会など実際の学校での活動や行事等が取り上げられています。案内文を読む、紹介文を読む、手紙を書く、レポートを書く、ガイドブックを読むなど、読むことや書くことについても実生活に即した内容になっています。

また、即興力の育成に関しては、とじ込みの「レッツトーク」では、その場でスピーキングができるように、巻末のユニットの帯教材「ストーリー　リテーリング」も設けられ、即興力とコミュニケーション能力の育成を意識した工夫が見られます。

各ユニットの巻頭には目標とゴールが示されています。ユニットの巻末にはゴールとして学習事項の確かめと振り返りができるようになっています。入試対応については、２０２２年度の都立高校入試「スピーキングテスト」の導入が予定されています。これらの教材での学習は話す力を育成することに役立つのではないでしょうか。

この教科書はＣａｎＤｏ（英語を使ってどのようなことができるようになるか）を中心とした紙面となっています。ＣａｎＤｏリストも充実しています。

小中の連携に関しても小学校でアニメーション動画、慣れ親しんだ表現や語彙を取り入れ抵抗感をなくすようにしています。小中の接続を強く意識したことが感じられました。１年の教科書には浅草が出てきて、親しみを感じます。

Ａ者は、全体のバランスや構成などを考えると優れた教科書であると思います。取り扱っている内容も適切であり、文法やドリルの充実、小学校での既習事項を意識した取組などが見られます。オーソドックスで優れた教科書ではありますが、新しさがもう少しほしかったです。

私は、先ほど申し上げたように1位をE者、2位をA者で推したいと思います。

○矢下教育長　続いて、末廣委員、お願いをいたします。

○末廣委員　私は、英語、1位はA者です。それから2位がC者です。

A者ですが、まず最初に小学校の振り返りですね、その後、レッスン1から始まるのですが、レッスン1から3まで、これも小学校のレベルの復習をするということですが、この中でやはりレッスン、例えば1で、聞くこと、listen、それからしゃべること、talkですね、それから読む、read、それからwrite、書く、その点、それが全部入ってきています。それが繰り返しまた出てくるということで、それが同じレッスン3まで、繰り返し繰り返しこの五つが出てくるということです。一つのレッスンの中に、この五つの要素が全部入ってきて、非常に立体的な学習ができるというのがこのA者の良さだと思います。

そういうことで、やはり確実に少しずつでもマスターしていくというのが英語の大事なところだと思います。いきなりうまくなるとかということは、英語の場合はあまりないことですので、確実にクリアをしていく、レッスンをクリアしていく、その積み重ねが英語が好きになる第１の条件だと思いますので、その点で特に台東区の生徒たちには、c者よりA者が合っているのではないかというふうに思いますので、A者を1位に推します。

○矢下教育長　続いて、垣内委員、お願いをいたします。

○垣内委員　外国語に関しましては、第1位をA者、第2位をC者で推薦したいと思います。

外国語、少し学習指導要領も改定されてきておりますけれども、外国語の音声、語彙、表現、文法、言語の働きなどというものをまず基礎的なところを理解して、これを聞くこと、読むこと、話すこと、書くことという様々な機能を駆使して、実際のコミュニケーションにて活用するということが目的であろうと理解しております。その観点で、まず一つは、小学校との接続、小学校で英語を嫌いにならずに興味、関心を持った子供たちが、その深い言語的な特徴を学ぶということが十分にできるような滑り出しというか、導入部に

なっているかどうか。それから二つ目は、バランスの良い、先ほど言った四つの機能をバランスよく盛り込まれている教材かどうか。三つ目は、コミュニケーション能力に力を注いでいるかどうか。こういう3点から検討しましたところ、A者が最もバランスが良く、かつ内容も充実していて、恐らく実践的、教える方、教師の方も教えやすいテキストではないかと思いました。

特に非常に丁寧な導入、2年、3年と進むにつれて、発達段階に沿って教材が盛り込まれているということ。それから、様々なヒアリングの教材も用意されているということで、いずれの教科書もよくできてはいるのですけれども、中でもA者が最も総合的に見てバランスよく、実践的かなということで、A者が第1位となります。以上です。

○矢下委員長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局、お願いします。

（集計）

○矢下委員長　ただいまの集計結果につきましては、1位にA者を挙げた方が3名、C者を挙げた方が1名、E者を挙げた方が1名、2位にC者を挙げた方が3名、A者を挙げた方が2名。

結果として、1位にA者を挙げた方の数が3名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、英語については、A者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等はございますでしょうか。

（なし）

○矢下委員長　それでは、英語については、A者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下委員長　ご異議ございませんので、英語についてはA者に仮決定いたしました。

それでは、A者の発行者名について指導課長、お願いをします。

○指導課長　それでは、仮決定のA者についてでございます。

発行者名は三省堂、書名はNEW CROWN。

以上でございます。

道徳

○矢下教育長　次に、道徳についてご審議願います。発行者は7者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。

髙森委員から順にお願いをします。

○髙森委員　科目名「特別の教科道徳」・種目「道徳」については、導入部分において道徳という教科の説明や道徳を学ぶ意義・学習の進め方などについてどのように触れているか、全体の構成が体系づけられているか、単位時間×年間授業時数で計算したとき教材の分量は適切か、「４つの視点」すなわち自分・他者・社会・自然界の各領域において全体を見通すことのできるか、各教材の問い・話し合い・自己評価など学習の発展性・持続性

がどのように担保されているか、などに着目して比較・検討し、私は1位にD者、2位にA者を選びたいと思います。

まず、道徳の教科と学びのガイダンスについて、D者は導入部分で「道徳科で学ぶこと」および「道徳科での学び方」のページを設け、具体的に整理して説明をしております。一方のA者は、「話し合いの手引き」および「道徳の授業はこんな時間に」のページの中で実践例を紹介しながら説明をしています。しかし、いずれも道徳を学ぶ意味については、具体的な説明はありません。今回の採択にかけられた発行者のうち、導入部分で最も工夫が見られたのはC者です。C者は、巻頭の「道徳の授業を始めよう」において、1年生では「道徳で何を学ぶの？」「どうやって学ぶの？」の2項目、2年生では「なぜ学ぶの？」をこれに加えた3項目、3年生では更にこれらに加えて「なぜいっしょに学ぶの？」の4項目をもって、詳しく解説をしております。特に、2年・3年の「なぜ学ぶの？」を読めば、そこには道徳学習の目指すものが何であるかが示されているため、あとは学習者が教材を通してケーススタディを重ねるだけで、教科のねらいを達成できるような気がします。今回どの発行者の教科書が採択されたとしても、現場の先生方には、C者に示されるような問題意識を常に念頭に置いて授業を進めて頂きたいと思いました。

本編の構成について、D者は、巻頭の目次の表記が羅列的でメリハリに欠け、これを補うテーマ別目次が4・5頁には用意されているものの、道徳科のスタンダードな４つの視点とは異なる構成になっていることをアピールする狙いがあるようで、若干盛り込みすぎている感があります。問題は、目次において４つのテーマの配当を確認できるインデックスがなく、４のつテーマは各教材の標題の上にアイコンで提示するに留めているため、これが4・5頁のテーマ別目次と重層的な印象を与え、かえって分かりづらくなっているような気がすることです。これに対して、A者は、目次を見ただけで、教科書の構造が分かりやすく、４つのテーマも、目次上で確認できます。テーマ別インデックスも8・9頁に分類・整理されています。また、道徳科で重点的に学習を促したい、「いじめ」や「命」をテーマにした教材をパステルカラーのバナーを入れて表記しているのも効果的です。

各教材の学習のポイントについては、D者は教材の頭に「困難を乗り越える力」「礼儀の心」など学習のポイントが明記され、A者は「義務について考えよう」「いのちを考える」などの大きな見出しの下に1～3点の教材が配置されるつくりになっております。本編を開いても、A者は、大見出しごとに内扉を用意し、メリハリを利かせている点に好感を持てます。このあたりのつくりは、A者のほうが優れていると感じました。

教材の分量・配当については、D者は全35教材が用意され、年間授業時数の上限に達している一方で、A者は28教材を主軸に付録7教材を足して合計35教材になるよう設定され、無理のない配分になっております。この点については、A者は、発行者や編集部が意図的に教材の価値を決めつけているような気がして、教員が付録教材を使った時に、生徒がこれをどう受け止めるか気になるところです。また、A者のメリットであった大見出しが、付録になってしまったために設定されていないのも、マイナスポイントです。

メインとなる用意された教材について、教科書によっては学習する学年が異なるもの、また教材名および編集が若干異なるものもありますが、多くの発行者で採用されていたのが、「魚（さかな）の涙」「銀色のシャープペンシル」「ごめんね、おばあちゃん」「“どうせ無理”という言葉に負けない」「六千人の命のビザ」「風に立つライオン」「二通の手紙」「足袋の季節」「卒業文集最後の二行」で、特に「二通の手紙」と「足袋の季節」は、今回選考に上がった7者全ての教科書で採用されておりました。道徳科の学習の進め方・発問の具体例・話し合いなど教室での活動の内容について比較する際は、これら共通する題材の扱い方をみるのが公平であろうと思いますので、A者・D者より1例だけ、「二通の手紙」を取り上げ、比較したいと思います。

まずA者・D者ともに、教材の最後に提起された発問は各2つで、それぞれ登場人物の心情を考えることと、自分の身に引き当てて考えることの2パターンが用意されています。これは、他の教材でもほぼ同様のスタイルとなります。ただし、D者のよいところは、すべての教材に用意されているわけではないのですが、「二通の手紙」の108・109頁のように「学習の進め方」の項目が設定され、教材のとらえどころを把握し、考察を深めるためのガイダンスが整っているところです。これは、教える側にとっても、学ぶ側にとっても、たいへん有効だと思います。一方のA者の場合、ほぼすべての教材が発問と自己分析のみで始終するため、限定された価値観に誘導する心配はないのですが、逆に生徒は自分の気持ちを振る変えるだけで終わってしまう可能性があります。活動内容の深み、学習者の気づきを促す工夫は、D者のほうが優れています。

各者共通のもの以外に特色ある教材として、D者には、興味深いオリジナルテキストが用意されています。2年の教材5と6は、ひとつのストーリーを二人の登場人物の視点を入れ替えて考えさせる教材、3年の教材7と8は杉原千畝とユダヤ人少女とを主人公として、ユダヤ人迫害のドキュメンタリーをそれぞれの立場から照らし出して考える連続テーマで、こうした「もうひとつの物語」的なスタイルは他の発行者に見られないもので、工夫が凝らされていると思います。

努力・克服・達成・成功などの心が晴れやかになる美談、失敗・挫折・苦悩・罪悪感・後悔・反省・償いなど「心の弱さ・醜さ」をテーマにした教材のバランスについて、A者・D者ともに効果的に配置されます。特に後悔・反省・償いなどを取り上げた題材は、人間を生きることの難しさ、自らの本分を尽くすことの大切さを深く考えさせる機会となり、これから社会に出て行く中学生にとって大きな気づきになると考えます。

コラム類の扱いについて、D者は、プラットフォーム・参考・私の生き方など多彩なコラム欄が組み込まれ、かつ横組みの見開きページと縦組みの本編とではページの起こしが異なるなど、複雑なつくりになっております。しかし、内容についてはD者は充実しおり、例えば「いじめ」を題材にした活動を概観しますと、D者のプラットホームでは1年で「いじめの構造」「アンガーコントロール」、2年で「思考パターンの分析」「いじめと法律」、3年で「攻撃を誘発する正義感」「コミュニケーション・タイプの分析」をテーマ

に段階的に展開します。一方、C者は、役割演技を取り入れたACTIONと学習内容を拡張するPLUS＋の二本立てに絞り、シンプルな構成になっていますが、内容の充実度はD者ほどではありません。

なお、D者には、記入式の別冊が用意されています。ただし、内容は本編の問いや活動を記録する程度のもので、別途ノートを用意する必要がないことは理解できますが、記録や自己評価は教材毎に本編中に記入できるA者のスタイルでも充分だと思いますので、別冊についてはそれほどの必要性は感じません。

また、デジタル教材については、両者とも、必ずしも全ての教材に用意しているわけではなく、教材の背景となる歴史・地理・文化といった情報へアクセスする内容になっております。他教科と異なり、必要がなければ利用しなくても支障はないと思います。

以上の比較・検討をふまえ、私は1位にD者、2位にA者を選びました。

○矢下教育長　続いて、神田委員、お願いをします。

○神田委員　特別の教科　道徳は、人間としての生き方について考えを深める学習を通して、道徳的な判断力・心情、実践的意欲と態度を育てることが目標になっています。自分自身に関すること、人との関わりに関すること、集団や社会と関わること、生命や自然、崇高なものと関わることの四つの項目を扱っています。

教科書を選定する観点として、道徳のねらいに迫りやすい内容であるか、四つの項目がバランスよく構成されているか、考え、議論する道徳を実現することができる内容か、いじめや情報モラル、ユニットなど、様々な工夫を基に考えました。どの教科書もそれぞれに捨てがたい素晴らしい教材が含まれています。特別の教科　道徳の指導を意識した内容の工夫が感じられました。

私は１位にＢ者、２位にＤ者を推したいと思います。

Ｂ者、Ｄ者ともに巻頭に道徳科で学ぶことの意義と学び方、テーマについて掲載しています。また、四つの項目がバランスよく盛り込まれています。

各者の特徴として、Ｂ者は１年の導入の教材が「あなたが生まれた日」次に「おはよう」礼儀を扱っている流れは自然で、中学校に進学した最初に教材としてふさわしく感じます。感動的な読み物もいいのですが、私はＣ者の魅力は生徒の実態に合う教材を扱っており、自分に投影して考えることができるところです。例えば、１年では「いじり」？「いじめ」？「幸せな仕事って」２年「まるごと好きです」「短所を武器とせよ」３年「ハゲワシと少女」「校長先生の模擬授業」などが挙げられます。

教材文を読む前に自分なりの考えを求める課題があり、教材文を読み、「道しるべ」で提示された三つの問いを考えることで考えを深め、自分に引き寄せる展開となっています。シンプルな構成ではあるが、自由な発想での議論で考えを深めたり指導者の考えで柔軟に扱ったりすることができると考えます。

Ｂ者は、いじめと生命についての指導に力を入れていて、目次ではユニット形式で取り上げています。１年で数教材のニット形式で年間２か所。２・３年は１か所で扱ってい

ます。情報モラルも各学年で取り上げられています。現代の課題として大切にしたい項目です。巻末に学習の記録ができるページが設けられています。

Ｄ者は、「考えてみよう」「自分に＋１」で考えを深めたり自分に引き寄せて考えたりする問いが掲載されています。

「いじめと向き合う」「よりよい社会と私たち」がユニット形式になっています。SDGｓに関する内容は豊富です。様々な視点から考えさせる教材は魅力的です。巻末の道徳のノートなどもＤ者の特徴です。考えを深めるための資料や学習の進め方など学習を導く工夫も掲載されています。

○矢下教育長　続いて、末廣委員、お願いをいたします。

○末廣委員　道徳は、E者が2位、D者が1位です。

このE者とD者は似通った構成になっておりますけれど、まず、1年、2年、3年、全学年の組み合わせ共通のテーマがあり、E者の場合は六つのテーマがあります。まず「かけがえのない命」、「いじめをなくすために」、「地球と地域の未来のために」、「誰もが暮らしやすい社会」、「受け継ぎ伝える伝統文化」、「将来の私を考える」、この六つですね。それから、同じく全学年でユニット学習というのが展開されますが、そのユニット学習のテーマが二つありまして、「地球と地域の未来のために」というのと、「夢に向かって共に輝く」という、この二つですね。その複数の教材がここに入ってきます。特に「いじめをなくすために」というところには、そのテーマには、1年が四つの教材、2年は四つの教材、3年が六つの教材が入ってきます。やはりいじめというものを大分意識した構成になっているのではないかと思います。それから「よりよく生きるための22の鍵」というのもあります。

それから、D者のほうですが、これも、全学年共通のテーマが出てきます。D者の場合は八つあるのですが、まず「命の大切さ」、「安全に生きる」、「情報」、「モラル」ですね、それから「環境」、「伝統文化」、「国際理解」、「先人に学ぶスポーツ」と、八つのテーマが全学年、共通しています。道徳という教科を考えるとき、このような幅広い分野に視野を広げていくことが必要であるということです。教材によっては一つだけではなくて、例えば、「命の大切さ」、「安全に生きる」これは両方に入るという場合には、両方にわたって入っていますね。特に「稲むらの火」では、「安全に生きる」、「伝統文化」、「先人に学ぶ」と、この三つのテーマが一つの作品にわたって入っている、そういう形ですね。

このD者でも、特に、いわゆるユニットのテーマがありまして、「いじめと向き合う」、それから「より良い社会と私たち」、この2ユニットが全学年で展開しています。それで特に、いじめと向き合うというのは1年で七つ、2年で五つ、3年で五つの教材が該当するということ、いじめ問題を重要視していることがよく判ります。

これにいわゆるコラムですね、コラムは、「プラットホーム」とか、「参考」とか、「私の生き方」、これはいろいろな分野の社会人に聞いていますね。私の生き方など、一

人の人間として生きていくそのいろいろな姿が、生徒たちにとっては大いに参考になるのではないかと思います。E者にも「クローズアップ」、あるいは「クローズアップ・プラス・プラス」、「深めよう」など問題を深めるコラムの欄があります。

全体にわたって、両方ともとても良いのですが、全体的なバランスの感覚から、1位にD者を推薦いたします。

○矢下教育長　続いて、垣内委員、お願いいたします。

○垣内委員　道徳は、特別の教科ということで、いじめや規範意識の低下、道徳の形骸化といったようなことに対処するために、道徳的諸課題についての理解、事項を見詰め、物事を広い視野から多面的、多角的に考え、人間としての生き方について考えを深めるという学習を通して、道徳的な判断力、実践意欲と態度を育てるという目的と理解しております。この観点から、いずれの教科書も、やっぱりいじめとか命の問題、それからICTなども絡めた課題、いずれもバランスよく盛り込んでおりますし、目的や学習の流れ、その他についても、それぞれ工夫がなされているところであると思っております。

ただ、以下述べる理由で、第1位はD者とさせていただき、第2位がA者というふうに考えております。

第1位に挙げましたD者に関しましては、全学年でいじめと向き合うということ、それからよりよい社会と私たちという二つの大きなテーマ設定をして、複数の教材やコラムを組み合わせてユニットという多角的なアプローチによって、この二つの大きなテーマに迫ろうとしているという点を評価させていただいております。

特に、いじめの件数が多いということが知られている第1学年に関して、中学校に入ったばかりで、いろいろな問題に直面するということに対して、いじめのユニットを多く配置しているというところも高評価につながっております。

2番目といたしましては、学習の流れの中で、教材はいずれのテキストも非常によく扱われていて、重複するものもあるんですけれども、学習の進め方、学習のヒント、それからプラットホームなど、様々な問いを、いろいろ随所、設けることによって、主体的な学びにつなげようという工夫がよく分かるという点が2点目の重要なポイントになります。

3点目といたしましては、これはどちらがいいのかというのはちょっと悩ましいところですが、別冊で道徳ノートというのを、これをD者は用意しております。これは授業の導入で気づき、議論を深めた上で、これからの自分について考えるという流れを意識した構成になっていると。生徒の実態に応じて、発問を柔軟に設定できるように発問欄も空欄になっているということがあります。これは教員の方の力量にも若干関わるところかもしれませんけれども、逆に、子供たちの興味、関心をすくい上げて、教えていくためのきっかけとか、優良ポイントになるのではないかと思って、私はプラスの評価をさせていただきました。

丁寧な説明があり、そして様々な方策、アプローチによって、この道徳の目的を達成しようとする優れた教科書であろうということで、第1位はD者、第2位はA者ということでお

願いいたします。

○矢下教育長　道徳でございます。学習指導要領の道徳科の目標は、より良き生きるための基礎となる道徳性を養うため、道徳的価値についての理解とともに、自己を見つめ、物事を多面的に多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、実践、意欲と態度を育てるというふうに述べられています。そして、その内容項目としては４点あって、主として自分自身に関すること、人との関りに関すること、集団や社会との関わりに関すること、生命や自然、崇高なるものとの関りに関することとなっています。どのような内容の教材として取り上げられているかということに関しては、基本的人権はもちろんですが、情報モラルなど、他の問題にいろいろと関わっているいじめの課題や防止がどうのように扱われているかに若干重点を置いて教科書を見させていただいております。

こうしたことを十分に踏まえていると考えD者を推薦したいと思います。

D者は、目次のあとの「道徳科で学ぶこと」「道徳科での学び方」が簡潔で分かりやすくなっています。４点の内容項目とそれに関連している学ぶテーマもしっかり示されております。教科書の内容の点では、実際の授業を考えると、教科書のそれぞれの題材の内容に関わる問いはまずは適切でわかりやすくなっていることが大事であると考えます。生徒がテーマの方向性を予想したり、教室で考えたり、議論や話し合いをしたりする時にふさわしいものになっているか、問いが多すぎて、議論を一定の方向に向けて引っ張ってしまわないか、少なすぎれば、議論が展開しないのではないかということにあります。D者には別冊のノートがついております。このノートは、記入欄が十分にあるので、教科書で学んだことの記録や振り返りにつながりやすくなっています。さらにこの別冊は、別冊になっていることで十分なスペースを持っていますが、そこでの指示内容が過度になっていないことで、授業中の教員の指導により、より適切に生かせると考えています。こうしたことからD者を推薦したいというふうに考えております。

以上でございます。

ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局、お願いをいたします。

（集計）

○矢下委員長　ただいまの集計結果につきましては、1位にD者を挙げられた方が4名、B者を挙げられた方が1名、2位にA者を挙げられた方が2名、D者を挙げられた方が1名、E者を挙げられた方が1名となっております。

結果として、1位にD者を挙げられた方の数が4名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、道徳については、D者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○矢下委員長　それでは、道徳については、D者に仮決定させていただきたいと思います

が、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下委員長　ご異議ございませんので、道徳についてはD者に仮決定いたしました。

それでは、D者の発行者名について指導課長、お願いします。

○指導課長　それでは、仮決定のD者についてでございます。

発行者名は日本文教出版、書名はあすを生きる。

以上でございます。

○矢下教育長　以上で、中学校教科用図書については、全ての教科について仮決定いたしました。

それでは、中学校教科用図書の仮決定した発行者の確認及び審議を行った全ての発行者の公表について、指導課長、お願いをします。

○指導課長　それでは、中学校教科用図書につきまして、仮決定した発行者名並びに書名を改めて確認させていただきますと共に、審議を行った全てのアルファベットにつきまして、発行者名のみ公表をいたします。

種目、国語。仮決定はC者、発行者名は光村図書出版、書名は「国語」でございます。その他の発行者ですが、A者、三省堂、B者、教育出版、D者、東京書籍、以上でございます。

種目、書写。仮決定はD者、発行者名は教育出版、書名は「中学書写」でございます。その他の発行者ですが。A者、光村図書出版、B者、三省堂、C者、東京書籍。以上でございます。

種目、地理。仮決定はC者、発行者名は帝国書院、書名は「中学生の地理　世界の姿と日本の国土」でございます。その他の発行者ですが、A者、東京書籍、B者、教育出版、D者、日本文教出版。以上でございます。

種目、歴史。仮決定はB者、発行者名は東京書籍、書名は「新しい社会　歴史」でございます。その他の発行者ですが、A者、教育出版、C者、山川出版社、D者、帝国書院、E者、日本文教出版、F者、育鵬社、G者、学び舎。以上でございます。

種目、公民。仮決定はE者、発行者名は東京書籍、書名は「新しい社会　公民」でございます。その他の発行者ですが、A者、帝国書院、B者、育鵬社、C者、日本文教出版、D者、自由社、F者、教育出版。以上でございます。

種目、地図。仮決定はB者、発行者名は帝国書院、書名は「中学校　社会科地図」でございます。その他の発行者ですが、A者、東京書籍。以上でございます。

種目、数学。仮決定はC者、発行者名は教育出版、書名は「中学数学」でございます。その他の発行者ですが、A者、大日本図書、B者、学校図書、D者、啓林館、E者、数研出版、F者、東京書籍、G者、日本文教出版。以上でございます。

種目、理科。仮決定はA者、発行者名は東京書籍、書名は「新しい科学」でございます。その他の発行者ですが、B者、啓林館、C者、大日本図書、D者、学校図書、E者、教育出版。

以上でございます。

種目、音楽一般。仮決定はA者、発行者名は教育芸術社、書名は「中学生の音楽」でございます。その他の発行者ですが、B者、教育出版。以上でございます。

種目、器楽合奏。仮決定はB者、発行者名は教育芸術社、書名は「中学生の器楽」でございます。その他の発行者ですが、A者、教育出版。以上でございます。

種目、美術。仮決定はA者、発行者名は日本文教出版、書名は「美術」でございます。その他の発行者ですが、B者、光村図書出版、C者、開隆堂出版。以上でございます。

種目、保健体育。仮決定はC者、発行者名は東京書籍、書名は「新しい保健体育」でございます。その他の発行者ですが、A者、大修館書店、B者、大日本図書、D者、学研教育みらい。以上でございます。

種目、技術。仮決定はA者、発行者名は東京書籍、書名は「新しい技術・家庭（技術分野）みらいを創るテクノロジー」でございます。その他の発行者ですが、B者、教育図書、C者、開隆堂出版。以上でございます。

種目、家庭。仮決定はC者、発行者名は東京書籍、書名は「新しい技術・家庭（家庭分野）自立と共生を目指して」でございます。その他の発行者ですが、A者、教育図書、B者、開隆堂出版。以上でございます。

種目、英語。仮決定はA者、発行者名は三省堂、書名は「NEW CROWN」でございます。その他の発行者ですが、B者、教育出版、C者、東京書籍、D者、開隆堂出版、E者、光村図書出版、F者、啓林館。以上でございます。

種目、道徳。仮決定はD者、発行者名は日本文教出版、書名は「あすを生きる」でございます。その他の発行者ですが、A者、東京書籍、B者、教育出版、C者、光村図書出版、E者、学研教育みらい、F者、廣済堂あかつき、G者、日本教科書。以上でございます。

確認及び公表は以上でございます。

○矢下教育長　それでは、以上のとおり仮決定の確認をいたしました。

次に、第28号議案についてご審議願います。

指導課長より説明をお願いいたします。

○指導課長　令和3年度使用台東区立特別支援学級教科用図書の採択について、ご説明申し上げます。

固定制の特別支援学級におきましては、年度ごとの子供たちの障害の状況や学年の人数構成などに対応するため、教科用図書採択を毎年度行っております。固定制の特別支援学級では、本区が採択した教科書のほか、特別支援学校用文部科学省著作教科書、さらに学校教育法附則第9条により、検定教科書、文部科学省著作教科書以外の一般図書を教科用図書として使用することもできます。

本区におきましては、蔵前小学校、松葉小学校、金竜小学校、柏葉中学校の4校に、いずれも知的障害の特別支援学級を設置しており、教科用図書の選定に当たっては、各特別支援学級の教育目標に基づくとともに、どの教科書が児童生徒一人一人により適している

かということを考え、調査研究を行い、調査結果をご報告いただきました。

こちらにつきましては、一覧にしたものを8月8日の定例教育委員会にてご報告させていただいたところです。

4校の教科用図書の選定結果についてでございますが、蔵前小学校と松葉小学校は本区で採択している検定教科書を使用いたします。金竜小学校におきましては、検定教科書に加え、一般図書6件について、柏葉中学校におきましては、検定教科書に加え、一般図書18件について、採択のご審議をいただきたく存じます。

なお、教科用図書の見本として、一般図書の一部を机上に置かせていただきましたので、ご覧ください。

報告は以上でございます。

○矢下教育長　特別支援学級の教科用図書について、ご質問、ご意見などがありましたら、どうぞお願いします。

○髙森委員　ご説明ありがとうございます。小学校の場合は昨年度採択された教科用図書に基づいて、本年度の特別支援学級の一般図書がリストアップされているのでしょうけれども、中学校の場合は、本日、令和3年度から6年度の教科用図書が採択されたばかりですので、現行の教科用図書、発行者が変わった教科があった場合に、この一般図書の活用については、新しい教科書との整合性、関連性というものについて、不都合はないのでしょうか。

○指導課長　特段、影響はないというふうに認識しております。

○髙森委員　安心しました。ありがとうございます。

○矢下教育長　そのほか何かございますでしょうか。よろしいですか。

（なし）

○矢下教育長　それでは、特別支援学級の教科用図書については、説明のとおり仮決定することについて、ご異議ございませんか。

（異議なし）

○矢下教育長　それでは、以上のとおり仮決定いたしました。

ただいま審議及び仮決定した内容をもとに事務局が議案を用意いたしますので、ここで準備が整うまで休憩といたします。概ね10分程度と思われますが、遅れることもありますので、ご了承ください。

それでは、これより休憩といたします。

（休憩　17：55 ～18：05 ）

○矢下教育長　これより会議を再開いたします。

まず、第27号議案を議題といたします。

お手元に、審議した内容に基づき用意した議案がございます。

指導課長、説明をお願いします。指導課長。

○指導課長　第27号議案、令和3～6年度使用台東区立中学校教科用図書採択について、ご説明申し上げます。本議案は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき提出するものです。

恐れ入りますが、裏面をご覧ください。

先ほど仮決定の際に確認させていただきました発行者、教科用図書等について、表にまとめたところでございます。よろしくご審議の上、採択いただきますようお願いいたします。

○矢下教育長　第27号議案は、先ほどの審議による仮決定のとおりとなっています。本件についてご審議願います。ご意見等がございましたらお願いをいたします。

よろしいですか。

（なし）

○矢下教育長　これより採択いたします。第27号議案については、原案どおり決定いたしたいと思います。これにご異議ございませんか。

よろしいでしょうか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、原案どおり決定いたしました。

次に、第28号議案を議題といたします。

指導課長、説明をお願いします。指導課長。

○指導課長　第28号議案、令和3年度使用台東区立特別支援学級教科用図書採択について、ご説明申し上げます。本議案は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第21条第6号の規定に基づき提出するものです。

恐れ入りますが、2枚目の別表をご覧ください。

蔵前小学校及び松葉小学校は、本区採択の検定教科書に仮決定されました。金竜小学校は、検定教科書及び表にございます一般図書について仮決定されております。柏葉中学校につきましては、第27号議案で可決賜りました検定教科書及び表にございます一般図書について仮決定されております。

よろしくご審議の上、採択いただきますようお願いいたします。

○矢下教育長　第28号議案は、先ほどの審議による仮決定のとおりとなっています。本件についてご審議願います。ご意見等がございましたらお願いをいたします。

よろしいでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　これより採決いたします。第28号議案については、原案どおり決定いたしたいと思います。これにご異議ございませんか。

よろしいでしょうか。

（異議なし）

○矢下教育長　ご異議ございませんので、原案どおり決定いたしました。

以上で、教科用図書採択についての議案の審議は全て終了いたしました。

・その他

○矢下教育長　その他、何かございますでしょうか。

（なし）

○矢下教育長　以上をもって本日予定された議事日程は全て終了いたしました。

これをもちまして、本日の定例会を閉じ散会いたします。

午後6時15分　閉会